それは黒くて重かった

D.K.B.Y.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
それは黒くて重かった

【Ｎコード】
Ｎ３６８２Ｙ

【作者名】
Ｄ．Ｋ．Ｂ．Ｙ．

【あらすじ】
王都から遥か北の村に、父親を亡くして母親と二人で暮らす少年が居た。父親の造ってくれた形見の鎧と、それを扱う鍛冶の技を幼い頃から仕込まれてきた少年は、それらを使いながら、父親の遺した言葉通りに己を鍛える毎日を過ごしていた。その傍らには、艶やかな毛皮の獣、黒炎が常に側に居て、共に楽しい生活を送っていた。ある日、少年と黒炎は、自宅への帰路で５０代位の大怪我をした男を助ける。それは、少年の旅立ちから王都、学院へと続く運命の輪が回り始めるきっかけとなった。

始まり（前書き）

これが初めての投稿になります。拙筆ですが暖かい目で見て貰えると嬉しいです。投稿のペースは遅いと思いますが、それに関しての突っ込みは無しにして頂けると助かります。

始まり

ブンッブンッブンッ

何かを振っている様な音が規則的に響いている。その場には他に音を出すモノは無く、その音を聞いているのもまた、音を出しているモノだけではないかと、もしその場に第三者が居れば思っただろう。

「・・・ハッ・・・フッ・・・」

振りに合わせるように微かに聞こえる声はかけ声のようであり、ただの呼吸音の様でもある。その発信源は小さく、十歳位の子供と同じ位の大きさで黒くずんぐりとした体型をしている。手に持っているのは黒い金属製の棒で、身長と同じ位の長さのそれを軽々と、まるで剣の素振りをする様に振っていた。

呼吸に合わせて吐かれる息は真っ白く、その場がとても寒い場所であると主張している。陽が傾き、山の稜線に近付いてきている時間帯で気温も下がってきており、その山も、人影の周りも目に見える場所は例外も無く雪と氷に覆われているので、ますます寒々とした景色であった。

ここは、大陸の北、人が居住している最北端の村、ノースアタロスから山へと向かった先の森の入口付近である。険しい山へと続く登山道の入口には粗末な小屋が建てられており、山へ向かう人々の準備の場になると共に、村人達の狩りの拠点にもなっている。

人影はその小屋の傍らで一心不乱に素振りをしていた。

「ふぅ、そろそろ帰ろうかな」

人影から聞こえて来た声は、少年特有の高い声で、さっきまでの力強さとはかけ離れている印象を受けるだろう。この場に居て実際に見ていなければ声が人影から発せられたとはとても思えなかった。

人影、改め、少年は腕を回して大きく伸びをした後に小屋へと入る。小屋の中は暖炉からの熱で暖められており、過ごし易い温度に保たれていた。

「黒炎（こくえん）、汗拭いて着替えたら帰るよ」
少年は荷物の中からタオルを出しながら暖炉の方向へと声をかける。
正確には、暖炉の方向ではなく、その前にある黒い毛玉（？）に向かってであった。
黒い毛玉、改め、黒炎は少年の声に反応して、恐らく寝ていたであろう丸まった状態から首が持ち上がって少年の方を向く。
「ふにゃ、終わったのか～・・・ふわぁぁぁ」
驚いた事に、黒炎という獣は人語を解して少年に返事を返し、大きな欠伸をしてから四足で起き上がる。細身の身体はしなやかな筋肉と艶やかな漆黒の毛皮に覆われており、優美な姿は見る者を感嘆させる。猫科の獣、黒豹の様な体つきにピンと立った三角の耳と狐の様なフサフサの尻尾、そして最も特徴的なのはルビーの様に紅く輝く瞳である。その身体を弓なりにして伸びをする様は実に気持ちが良さそうに見えた。
「ごめん、待たせたね」
「ホントだよ、毎日毎日よく飽きないな～」
「ボクの日課だし、それに父さんと約束したから」
「そっか・・・とりあえずお腹空いたから早く帰ろ」
「そうだね、ボクもお腹空いちゃったよ」
一人と一匹、お腹を押さえて笑いあう。まるで友達同士の会話、というよりも家族の様な暖かい空気が包んでいた。
ガチャ・・・ビューーーーー
扉を開くと外は先程とは全く違った様子になっている。空は厚い雲に覆われ、辺りは真っ暗になっており、雪と風がとても強く吹雪いていた。
一人と一匹は顔を見合わせるとお互いに溜息をつく。
「あ～あ、吹雪いちゃってるよ」
「ごめん、今日はもう少しの間、変わらないと思ってたんだけど・・・」
頬をかきながらすまなそうにする少年の足に前足を乗せて、黒炎は

首を振るように尻尾を横に振る。
「いいから、さっさと帰ろうよ。ボケッとしてたら凍えちゃうよ」
「・・・うん、急ごうか」
嬉しそうに微笑みながら黒炎の頭を撫でた少年は、黒炎を先に出すと小屋の扉を閉めてしっかりと施錠をする。
「火はちゃんと消したかい？」
「大丈夫、ちゃんと確認しておいた」
そんな事を話しながらも素早い足取りで村へと向かう。この辺りの積雪は深くなる為、積もる前にさっさと家に帰る必要があるからだ。
黒炎の獣特有の素早い走りに遅れる事も無く、ずんぐりとした格好に荷物を持った少年は、その姿に似合わないスピードで並んで走っている。それは正に飛ぶような走りであった。
普通の大人が走るよりも数段早く村の明かりが見えてきた所で、唐突に黒炎が止まる。少年は数歩進んだ所で同じ様に止まった。
「黒炎、どうしたんだい？」
そう問う少年の言葉に返事をせずに、黒炎は村から街道へと下っていく方向へ鼻の先をピクピク動かしている。その様子に少年は何も訊かずに次の動きを待つ。
「血？・・・血の臭いがする」
「血の臭い？・・・大変だっ、誰か怪我でもしているのかもしれない」
「行くのかい？」
「あたりまえだよ、案内してっ」
「わかった」
そう言って先程鼻の向いていた方向へ風の様に走り出す。その黒炎に遅れずに走る少年の姿は先程までの走りとは全く別物の走りであった。
ザザザザッ
勢い良く走ってきた為、急停止するには少し余裕が必要であり、数歩分を靴底が地面を削る。

陽が落ちて暗くなり、吹雪もあって視界が悪い中で怪我人を探すのは困難を要する。頼りになるのは黒炎の鼻の良さだけである。臭いで探す黒炎の背中を不安そうに見詰めながらついていく少年の頭や肩の上には早くも雪が積もり始めていた。

「居たよ」

同時に走り出した黒炎を追いかけながら最悪の結果には会いたく無いと願う。

前方に白い盛り上がりが見えてくる。雪の積もった大人一人分位の大きさの雪には所々赤黒い染みの様なモノが見える。その量は大怪我を予想させ、最悪の結果も考えなくてはいけないと覚悟させられた。

一人と一匹は手や前足を使い急いで雪をどかし始める。雪の中からは所々衣類が破れボロ布の様になった５０代位の男性が出てきた。

少年は傷の様子を確かめながら、脈や呼吸を確かめた後に、ホッと溜息をつく。

「出血は酷く見えるけど血は止まり始めてる。

気絶して動かないけど、脈も呼吸もしっかりしてるから命には別状ないと思う。

だけど早く運んで暖めないと危ないのも確かだね」

「それは良かった、荷物は持ってやるから、その人を担いでいきなよ」

「うん、急ごう」

少年は荷物を黒炎の背中にくくりつけ、自分は怪我人を背中に担いで立ち上がる。そのまま一緒に村へと走り始める。人間一人を担いでいる様には見えないくらい足取りは速かった。

村の入口、木の柵に囲まれた一角に大きな木製の門がある。その近くには守衛が詰めている小屋があり、窓からはランプの灯りが漏れている。外には寒そうにしながらコートに包まれた守衛の姿が見え、少年達の姿に気が付いたところで静止の声がかけられる。

「ちょっと待った、一度門の前で止まれ」

言われた通りに立ち止まった少年達に向けて手に持っているランプの光を当てる。厳しく引き締められた守衛の顔はすぐに緩んで笑みを浮かべた。

「おぉ、お前達か、今開けるから早く入れ」

ギィ

同時に軋む音を立てながら門が開く。隙間に少年達は素早く入ると、門はしっかりと閉めなおされた。

「ありがと、急ぐから、バイバイ」

「おい、どうしたんだその背中のヤツは？」

「怪我人を見付けたんだ、ウチに連れて行って手当てするから。何か聞きたい事があったら明日ウチに来て」

まだ何か言いたい事がありそうな守衛の言葉を振り切るように再び足を速める。少年の家は村の東側、ちょうど門とは反対側の場所にある。村の西から東を貫く中央通りを走り抜けると、他の家と少し距離がある場所に一軒家があった。

「黒炎、扉よろしく」

「あいよっ」

黒炎は一足先に扉の前に辿り着くと、器用に前足で扉の取っ手をひっかけて開く。室内の暖かい空気が逃げない様に、少年達は室内に入った。

カタン

深呼吸をして荒くなった呼吸を落ち着けているところで、部屋の奥から物音がする。少しして少年の母親らしき人物が現れた。

「おかえりなさい二人とも」

「「ただいま」」

少年達は同時に返事をしてから顔を見合わせて苦笑する。笑顔で二人の様子を見ていた母親は、少年の背中に誰かが背負われている事に気付く。

「あら、その背中の人はどうしたの？」

「あ、そうだ、この人、街道から村に続く道で倒れていて、酷い怪

我もしてるから連れて来たんだ」
「まあ大変、早く横になれる所に寝かせて手当てしないと」
「うん、僕のベッドに運ぼう。見かけはこんなだけど命には別状はなさそうだから心配しないで」
そう言って少年は自分の部屋へと向かう。その後ろから黒炎がおとなしくついてきていた。
　ガチャ
部屋の扉を開けて窓際のベッドへと近付く。
「ねえ、黒炎、このまま布団に寝かせてもいいのかな？」
「多分、高い確率でお前の母ちゃんに怒られると思うけど」
「だよね・・・」
そんな事を話していると扉が開いて母親が部屋に入ってくる。その手には救急箱が持たれていた。
「何やってるのっ、早く暖炉に火を入れて部屋を暖めなさい。
　その人は、一旦、床に毛布をひいて寝かせておけばいいから」
母親の言う通りに床に毛布を敷いて怪我人を寝かせ、暖炉に薪を積んで火を点ける。火に風を送って強めていると、黒炎が側に寄ってきて身体を触れさせてくる。
「鎧脱がないと冷たいな～、ついでに着替えた方がいいと思うよ」
　カチャカチャカチャ
すっかり忘れていた事を指摘された少年は、留め金の音を立てながらくすんだ黒色の鎧を外して傍らに積み上げる。雪が積もっていた鎧の下には早くも水溜まりが出来ていた。それを見ながら後で拭いておかないといけないなと思う少年であった。
「綿入れ羽織ったらこっちを手伝って」
その言葉に母親の方を見ると怪我人の服を脱がそうと悪戦苦闘している姿があった。ボロボロになった服をそのままにしていたら手当ても出来ないし、身体も冷えるからである。
　少年は母親と代わると服を次々と脱がす。母親は桶と湯と手拭いを用意して傷口を拭いて綺麗にする。ある程度綺麗になったところ

で強いアルコールの地酒を吹きかけて消毒も行う。吹きかけた瞬間に怪我人はうめき声を上げていたが、気が付いた様子は無く、ぐったりとしたままであった。余分な酒を拭き取った後に母親の作った薬草の軟膏を塗り、清潔な包帯を巻いていく。最後に既に亡くなっている父親の寝巻きを着せてベッドに寝かせ、出血による体温の低下を防ぐ為に布団をかけた。

呼吸の安定している様子と苦しそうになっていない顔を見て母親は頷く。

「これなら大丈夫そうだね、目が覚めたら何か暖かい物でも食べさせればいい」

それを訊いた少年は安堵の息をつく。自分の診断でも大丈夫だとは思っていたが、第三者の見立ても聞くと確かな物に感じられるからだ。

「良かった、母さんありがとう。後は僕が見てるから母さんは寝て良いよ」

「そう？だったら先に晩御飯を食べちゃいなさい。

スープを温めれば食べられるから、黒炎も一緒に行ってきな」

「分かった、行ってくるよ・・・黒炎、行こう」

少年は扉を開いて黒炎を促すと台所に向かう。スープの鍋を火にかけるとパンに干し肉のスライスとチーズを挟んで皿に載せてテーブルへと運んだ。

「怪我が思ったよりも酷く無くて良かった」

「ふふん、ボクに感謝していいんだよ」

「そうだね、黒炎が見付けなかったらどうなっていたか・・・お手柄だよ」

「スープ多めでよろしく」

「いいよ、ご褒美だからね」

得意顔になっている黒炎に、苦笑しながらスープ鍋の様子を見に行く。野菜と肉と牛乳の入った温かなシチューは美味しそうな匂いを漂わせている。二つの器にシチューを注いだ少年は水差しとグラス

を一緒に持って戻る。料理を分けて、多い方のシチュー皿を黒炎の前に置き、水をカップと皿に注いで席に座った。
「「いただきます」」
声を揃えて言ってから食事を始める。お腹が空いていたらしく、すごい勢いで器の中身が無くなっていった。
「黒炎、シチューどうだった？」
「う～ん、もっと熱くても良かったよ」
「そっか、熱いのが好きだったもんね」
「やっぱりシチューは熱々が一番だよ」
そんな会話をしながら食事を済ませる。水を一気に飲んで一息つくと、お腹を押さえて満足そうな顔になった。少年は食器を集めて流しで洗うと、怪我人用に水差しを持ち、黒炎を促して自分の部屋へと戻っていった。
ガチャ
濡らした手拭いで怪我人の額から汗を拭っていた母親は、扉の開く音に反応して顔を向ける。
「もういいの？ゆっくりしてくれれば良かったのに」
「いつも通りだよ、さあ、母さんもそろそろ寝ないと」
「そお？それじゃあ部屋に戻るけど、何かあったら呼ぶのよ」
「うん、わかった、それじゃあおやすみ」
「おやすみなさい、黒炎もおやすみ」
立ち上がって扉の方へと向かう母親に、黒炎も暖炉の前で横になりながら大きな尻尾を振って挨拶をする。その様子を見ながら微笑んで部屋から出て行った。
黒炎は暖炉の前で再び黒い毛玉になり、少年は鎧を拭いて手入れをする。鎧はくすんだ黒色をしていて厚みもあり、ほとんど全身を覆う造りになっている。少年は身長も平均的で、引き締まってはいるが細身の身体なので、全身鎧を着てあれ程の動きが出来る事が信じられる人間は少ないだろう。最後に素振りをしていた鎧と同じ素材の棒を拭いたところで、大きな欠伸が出る。眠そうに目に滲んだ

涙を拭った少年は、立ち上がって伸びをする。ポキポキと関節が鳴る音が身体の中に響くのを心地良さげに感じながら、眠気を飛ばすように深呼吸を何度かすると、怪我人の様子を見る為にベッドへ近付いた。

呼吸も落ち着いており、顔色もここに来た時点よりも良くなっているようだった。額の手拭いを水ですすいで絞りまた戻す、この調子でいけばすぐに回復するだろうと少年はホッと一息ついた。

手入れの終わった鎧を定位置に片付け、父親の遺した覚書を読んでいるうちに、窓を覆うカーテンの隙間から朝日が漏れてくる。

「もう朝か・・・ふぁぁぁ」

次第に明るくなっていく窓を見ながら、欠伸をしていると、ベッドの上から声が聞こえてくる。

「・・・うっ・・・ここは・・・」

弾かれた様にベッドに向き直した少年の目の前で、怪我人が目を開いて周囲を見回しているようであった。答えを返そうと、少年は脅かさないように小さい声にする。

「ここはノースアタロス村の僕の家です」

その言葉に、初めて少年がそこに居る事に気が付いた様子で、怪我人の男は相手の顔を確認するように視線を向けてくる。

「君の家・・・どうして私はここに居るんだい?」

「覚えていないんですか?あなたは村の外で血塗れになって倒れていたんですよ」

「血塗れ・・・うぐっ・・・この身体の痛みはそれが原因だったのか」

痛みに顔をしかめた男は荒い息で起き上がろうとする。

「まだ無理はしないで下さい」

少年は上体を起こすのを手伝いながらたしなめ、男の背に枕を当てて壁に寄りかからせる。それから水差しからカップに水を注いで男に渡した。

「ゆっくり飲んで下さい」
「ありがとう」
礼を返して少しずつ水を喉に流し込む様子に、少年は食事も摂った方が良いと思い立ち上がる。
「スープを温めてきます。弱った身体には栄養のあるものを入れたほうが良いですから」
扉の方へと向かいながら黒炎の方へと視線を向ける。少年と男の会話で起きていた黒炎は、首だけ持ち上げて少年の方を見ていた。少年は、任せた、という意味の視線を向けており、黒炎もまた、任された、という意味の視線を返している。二人の絆の強さが成せる意思疎通であった。
スープを鍋にかけて温める。まだ固形の物をたくさん食べさせるのは早いと考えた少年は、スープから大きめの肉や野菜を除いて皿に盛った。
ガチャ
部屋に戻りベッドへと向かう少年の方を見ながら、男の視線は持っている皿に固定されている。匂いにつられて腹の虫が鳴っているのが少年にも届いているので、少々バツの悪そうな表情になっていた。少年はその様子を見て、身体は回復に向かって居ると確信できた。
「スープです、まだ身体は弱っているのでゆっくり食べて下さい」
皿とスプーンを受け取った男が勢い良く食べ始めそうな気配を感じて、釘を刺す。男は照れくさそうにしながらゆっくりとスープを飲み始めた。
「美味い、まるで生き返るようだ」
全くその通りだと思いながら少年は苦笑する。
「ありがとうございます、母さんが聞いたら喜びますよ」
「君が私をここに連れてきてくれたんだろ？お母さん共々お礼を言わないとな」
そう言ってスープを味わいながら飲んでいる男の邪魔にならない様に黙ってベッドの横の椅子に座って待つ。しばらくして食べ終わり

を見越してカップに水を注ぎ、造血作用のある薬草の粉末と一緒に男に渡した。
「これを飲んで下さい。出血が多かったので造血作用のある薬草です」
「ありがとう、人心地がついたよ」
薬草と水を飲み干した男は、大きく息を吐き出す。ひとまず落ち着いたようだと思った少年は、本題に入るタイミングだと考え、姿勢を正して男へと身体を向けた。
「あの、訊いても良いですか？」
「ん？なにかな、答えられる事なら何でも答えるよ」
微笑む男に安心した少年は質問を続ける。
「どうしてあんな場所で倒れていたんですか？」
「ああ、あれは私の考えが甘かった。
こっちへ来る途中の森で魔狼の群れに襲われてね・・・撃退はしたんだが途中で力尽きたんだ」
「えっ、魔狼に襲われたんですか・・・良く助かりましたね」
「まあそれなりに鍛えてるからね、しかし歳かな、このくらいで身体が動かなくなるとは」
「すごいですね、何をしている人なんですか？良ければ教えて下さい」
「構わんよ、私は王都の学院で学院長をしている者だ」
「えっ、学校の先生は皆こんなに強いんですか！？」
「あ～、いや、ウチは特別でね、戦闘職を養成するための学院なんだよ」
「へ～、王都にはそういう学校もあるんですね」
驚きながらも納得した少年は、そんな所の学院長が何をしにこっちへ来たのかが気になりだす。少しの間逡巡しながらも恐る恐るといった感じで聞く事にした。
「でもどうして学院長さんは、この村の方へと来たんですか？」
その質問に考える様子になった学院長は、少しして頷くと少年へと

目を向ける。
「別に秘密にするような事では無いからな。それに命の恩人には答えたい」
そう言って笑みを浮かべて少年にウインクをする。年齢に合わないお茶目な様子に、少年も笑顔になった。
「私の目的は、この村に居る人物に仕事を依頼する事なんだよ」
「えっ、目的地はここだったんですか、それなら偶然でも見付けられて良かったです」
「ははは、本当だよ。神は私を見捨てなかったという事だ」
冗談めかして言う学院長はとても魅力的な笑顔を見せてくれ、年齢の離れた者とのこういった会話の経験が無かった少年は不思議と違和感が無かった。
「この村の人だったら僕が案内しましょうか？」
「おぉ、それは助かる。動ける様になったら頼むよ」
「はい、それで何ていう人なんですか？」
「うむ、確か、ウォールとかいう鍛冶屋だったかな、村唯一の鍛冶屋らしいからすぐ分かるだろう」
「えっ・・・」
それを聞いた瞬間、少年の顔に悲しみ混じりの何とも言えない表情が現れる。それを見た学院長は、不思議そうに思った次の瞬間、後悔したかの様な苦い表情になった。
「父さんは去年亡くなりました」
「すまない、君の父君だとは思わなかった・・・辛い事を思い出させたかな」
「気にしないで下さい、知らなかった事ですから」
その場が重苦しい沈黙に包まれ、お互いに気まずさから何を言えば良いのか分からなくなる。
しばらく屋根から雪が落ちる音や、暖炉の薪が爆ぜる音だけが聞こえてくる空間であったが、軽い足音と共に少年の足に暖かい何かが触れてくる。少年がその方向に目をやると黒炎の紅の瞳がじっと

見詰め返していた。心配そうな様子の黒炎に頷くと、少年は一度目を閉じて深呼吸すると気持ちを入れ替えて学院長へ視線を向ける。
「大丈夫です、父さんは今でも僕達家族の心の中に居ますから」
硬いが笑顔になった少年は力強く拳を握って学院長へと頷いた。
「それに、いつまでも弱いままだと父さんに笑われちゃいます」
その力強い様子を見た学院長も笑顔になって少年の頭を撫でる。その瞳は優しそうな光に満ちていた。
「君は強いな、私の目的は達成出来なかったが、新たな光を得た気分だ」
「？？？」
不思議そうな顔の少年に笑顔を見せながら嬉しそうに頷く学院長は、大怪我してまで訪れた村で目的が達せられないにも関わらず、実に満足そうな様子に見えた。
「さて、そろそろ横になりたくなってきたよ」
お互いの事を少し話題にしながら世間話を楽しんでいた少年と、それを聞いていた一匹は、その学院長の言葉で結構長く話していた事に気が付く。
「そうですね、僕も眠くなってきました」
「君のベッドを占領して申し訳ないが、さすがに今日のところは使わせてもらうよ」
「はい、僕は黒炎が居れば暖かいから大丈夫ですよ。学院長は傷が良くなるまでベッドを使って下さい」
「ありがとう、お言葉に甘えてそうさせてもらうよ、ではおやすみ」
「おやすみなさい」
学院長が横になるのを助け、布団を身体にかけてから暖炉の薪の様子を確かめる。しばらくはこれで大丈夫だと確認した少年は、黒炎と一緒に毛布に包まりながら暖炉の側で横になる。次の瞬間には室内の全員が眠りに落ち、その場には気持ち良さそうに眠る呼吸の音が聞こえていた。

数日が経ち、学院長の傷も動ける様になると同時に急激に傷が癒えていった。さすがは戦闘職を育てる学院の学院長だと、少年は驚きながらも納得していた。

村の守衛からの簡単な尋問も無事に終わり、晴れて自由の身になった学院長はその夜、少年の家で家族全員と共に食事を摂りながら改めて礼を言う。

「ありがとう、本当に世話になったね」

「いえいえ、遠くから主人に会いに来てくれた方をもてなすのは当然ですよ」

「いや、命を救われて、手当てもしてもらい、本当に助かりました」

「目的が達せられなくなった人をそのまま帰したら、主人に怒られちゃいますから」

「ははは、母君には感謝してます、それ以上に息子さんにはね」

「この子がお役に立てて嬉しいです」

「自慢して良い、立派な息子さんですよ」

笑顔で会話を交わす学院長と母親の姿に、いつしか学院長と話をするのが楽しくなっていた少年は寂しそうにスープをすすっていた。

学院長の次の言葉が予想出来ていたからである。

「話は変わりますが、傷もほぼ癒えたのでそろそろ王都に帰ろうと思います」

「まぁ、ウチはまだまだ滞在されてもよろしいんですよ。

この子も学院長さんの話に喜んでいますし、傷が完治してからの方が良いのでは？」

「十分傷も癒えました。それに私は学院長なので余り長い事学院を留守に出来ないのです」

「そうですか、残念ですが気を付けて帰ってくださいね。

この辺は田舎で山も近いので雪が結構積もっていますから足元には注意して下さい」

「ありがとう、さあせっかくの料理が冷めてしまうから、食事にしましょう」

終始楽しそうな雰囲気で食事を終えると、少年の母親は食器を洗う為に台所へ行き、少年は食器をまとめて流しへと運んだ。
　少年が戻ってくると、学院長が笑顔で待っていた。
「君には本当に世話になった、ありがとう」
頭を撫でながら礼を言う学院長であったが、少年の顔は曇ったままだった。
「そんな顔をしていたら父君に笑われてしまうんじゃないかな」
「うん、でも学院長さんのお話が楽しくて、別れが寂しいんだ」
「嬉しいよ、そう思ってくれて」
そう言い、学院長は少年の肩に手を置いてから目線を合わせるようにしゃがんだ。
「確かに別れは寂しいものだ、だけど再会の喜びに変えられる。
　また会えた時にお互いの成長や、離れていた時の話をしようじゃないか」
「また会える？」
「ああ、お互いがそう信じていればいつかは叶う。
　だから、別れの時には笑顔で、『またね』と言おう」
少しの間無言で学院長の顔を見ていた少年は頷いて笑顔を見せる。
「うん、またいつか会えると信じるよ」
「偉いぞ、君の成長を楽しみにしてる」
同じ様に笑顔になった学院長は、少年の頭を撫でながら頷き返した。
　台所からは、洗い物の終わった少年の母親が笑顔で少年を見詰め、黒炎は笑顔になった少年に嬉しそうな様子で尻尾を振っていた。

　翌日の早朝、村の門の前には学院長と少年と黒炎の姿があった。
少年の母親とは家で別れを交わしていたのでこの場には居ない。いつもより早めに門を開いてくれた守衛は少し離れた所で様子を見ている。
「今日晴れてくれて良かったね」
「そうだな、吹雪は老骨には堪えるからな～」

笑いながら言う学院長に、約束通り、少年もまた笑顔であった。
「学院長さんは強いけど気を付けてね、油断してるとまたやられちゃうよ」
「ははは、今度はさっさと逃げる事にするよ、帰り道だからね」
「うん、それがいいよ」
「うむうむ」
笑顔で話す二人の側で欠伸をしていた黒炎に、学院長は唐突に視線を向ける。
「今度会った時は、黒炎君も私と話をしてくれると嬉しいな」
「気付いていたんだ、黒炎が話せる事を」
「伊達に学院長をしていないさ」
説得力のまるで無い返答をする学院長を、黒炎は驚いた顔で眺める。
その様子に楽しそうにウインクを返す学院長は、悪戯が成功した少年のように嬉しそうであった。
「そうだ、これを君に渡しておこう」
そう言って少年に渡したのは、白く高級そうな造りの封筒であった。
表には『紹介状』と記されており、裏には学院長のサインがある。
それを確認した少年は問う様に学院長の目を見た。
「数年後、もし君が王都に来る意思があり、君の将来に戦闘職への道があれば私の学院に来なさい。
奨学金、つまり卒業してから返金する制度で君をウチの学院に推薦してあげよう」
突然の話に、少年の口調も改まったものに変わる。
「え、いいんですか・・・ありがとうございます、その時はお世話になりたいです」
「但し、母君が反対したらこの話は無かった事になるからね。
来る場合はきちんと説得してからにするんだよ、母君を一人で村に残すのだから」
「はい、分かっています。
僕も母さんを一人にするのは心配ですから、母さんと良く相談し

てから決める事になると思います」
「うむ、いい子だ。それではまた会える時を楽しみにしてるよ」
学院長は少年と黒炎を笑顔で見てから手を振ると村から街道へと続く道を進み始める。
「僕もまた会えるのを楽しみにしてますね、お気を付けて～」
元気に手を振る少年の傍らでは、別れの挨拶をする様に大きな尻尾を振る黒炎の姿があった。
何度か振り向き、少年と黒炎の姿に笑みを深めながら手を振る学院長の姿は次第に見えなくなっていく。その姿が雪景色に完全に見えなくなるまで手や尻尾を振っていた少年達は、一度も悲しそうな顔になる事も無く、家へと戻っていく。その瞳は目標に向かっていく者の力強さで強い光を放っていた。

始まり（後書き）

楽しんで頂けたでしょうか。続きも早く読んで貰えるように頑張ります。

旅立ち（前書き）

前回の投稿から1週間で投稿出来ました。週刊誌みたいな感じに次回も同じ位には投稿出来るようにがんばります。

旅立ち

抜けるような青い空がどこまでも続いている。北の大地の空は険しく高い山脈の影響で天候が変わり易く晴天になる事が少ない為、今日の様な青空は貴重で気持ちの良い物であった。

「ふぅ～」

自宅の裏、少し離れた場所に建っている石造りの小屋から出てきた人影は、１０代半ば位、少年から青年に向かう年頃の人間である。激しく運動していたかの様に汗びっしょりの身体を手拭いで拭いながら、深呼吸をゆっくりと行う。作業着を脱いだ裸の上半身は引き締まって、全体的に猫科の動物の様な印象がある。ボサボサの黒髪と優しそうな黒い瞳、同年代の平均的な身長よりは少し低い身長は、どこか草食動物の様な印象を受ける。

凝り固まった身体を解す為に、腕や首を回したり、ストレッチを行う。十分な時間を使って身体を解したその顔は、どことなくやるべき事をやり切った満足感の様な物があった。

サクサクサク

軽い足取りで枯れた草の上を歩く足音が家の方向から聞こえてくる。聞き慣れた音に、笑みを浮かべながら聞こえて来た方向へと視線を向ける。こちらへと向かってくる姿は予想通りでありながら、思わず微笑を浮かべてしまうような光景であった。

「ダスク、キミっていつも着替えを忘れるけど、間抜けなのかい？」

「黒炎、君もなかなか楽しい状態だけど」

家からこちらへと向かって来ていたのは、艶やかな黒い毛皮の獣、黒炎である。６年前よりも大きくなり、少年改め、ダスク・ウォールの腰の辺りまで届いている。その頭には手拭いが、背中にはダスクの着替えが載っている。微笑ましいというか、楽しい光景になっていた。

「キミの母ちゃんが持って行けって、乗っけたんだよ」

不満そうな様子で、ルビーの様に紅く輝く瞳を細めてダスクを睨んでいる。
「あはは、持ってきてくれてありがとう」
頭の手拭いをどかしてゆっくりと撫でながら笑顔で礼を言う。汗の引いた身体が冷えないうちに、背中の着替えも受け取って着替える。黒炎は撫でる手に気持ち良さそうな顔をした後、全身を振るって毛の乱れた場所を直す。
「それで、完成したのかい？」
「うん、父さんの腕には及ばないけど、僕なりに納得できる物が出来たよ」
黒炎の問いに、満足そうな笑顔で答えるダスクの顔から、それが嘘では無いと納得できる。嬉しそうに尻尾を一振りした黒炎は、ダスクを石造りの小屋、鍛治小屋へと向かうように押す。
「早く見せてよ、ボクも他人事じゃないし」
「いいよ、家に戻るから全部装備して見せてあげる」
頷いて扉を開け、黒炎をその場に残して再び扉を閉める。ダスクが、黒炎にはフル装備を見せたいと考えたからだろう。黒炎の方も楽しみらしく、尻尾をブンブンと音が出る位の勢いで左右に振っている。
ガチャ
扉が開く音に、黒炎は、弾かれたように視線を向ける。扉の形に暗い室内が窺え、一瞬何も無い様に見えたが、くすんだ黒色の塊が動き出した事でダスクが出て来た事を確認できた。６年前から使っている鎧は、定期的に調整されて今の体型に合わせてある。とはいえ、相変わらずのずんぐりとした印象は拭えない。
「相変わらず丸いな～、それでも少しはましになったと思うけど」
「まあね、父さんの形見だから基本的な所はあまり手を加えてないから。
でも、遺言通り、自分の手で調整しながら良くなる様に努力はしたよ」
最初の分厚い鉄板を鎧の形にしただけのようなデザインは、父親が

ダスクへの課題として遺した物である。己を鍛えるのは、身体能力だけでは無く、鍛治の技も含まれていたからだ。

ただ分厚い円筒等で構成されていた鎧は、所々、湾曲した部分を加え、衝撃を受け流す効果が加わっている。それに加えて、ワンポイントの装飾も目立たない様にされている為、見る者が見れば価値のある造形物であると評価されるかもしれない。

黒炎は、ゆっくりとダスクの周りを回りながら採点する様に眺める。その尻尾は機嫌の良さそうな動きでゆっくりと振られていた。

「なかなかいいね、ボクも手伝った甲斐があったよ」

「ありがとう、お眼鏡に適って嬉しいよ」

嬉しそうな声が鎧の兜の辺りから聞こえてくる。全身鎧なのでほとんど外に出ている部分がない為、声以外はダスクの様子を確認する術は無かった。

「それで、それがキミの造ったモノだね」

そう言う黒炎の瞳は、ダスクの両手に持たれている物に惹き付けられている。その巨大な物体は、ダスクの様な小柄な体格の人間にはとてもじゃないが持てないと、誰でも思う様な装備に見える。両利きなので左右は関係ないが、右手に持たれている物は身長より長く、幅や厚みも通常の物とはかけ離れている。一方、左手に持たれている物はずんぐりとした鎧全てを覆い隠す程の大きさがあり、厚みは鎧に使われているものよりも厚いので、その重さは簡単に計算する事も出来ない位であると予想された。

「でっかいね・・・大丈夫なのかい、それ」

ずっと一緒に居た黒炎でも驚く位、それらは大きな存在感と重量感をもってその場に存在していた。

「大丈夫、両方合わせても父さんの形見の鍛治用ハンマーより軽いから」

苦笑いする様な声色で答えるダスクは、頬を掻きたかったのだろう、右手を空けて兜の横をゴツイ籠手で触れている。置かれた長い方は、地面に少々沈み込んでいた。

「そっか、それじゃあ戻ろうよ。お腹空いちゃったよボク」
「そうだね、僕も仕上げをするのに昼飯も抜いちゃったから、正直しんどい」
頷き合って家へと向かう。黒炎は軽い足取りで先を歩き、ダスクは重さを感じない動きでそれに続く。驚いた事に重量感のある足音は聞こえず、普通の人が歩いている様な足音であった。
ガチャ
家の裏口の扉を開けると、待っていたかの様にダスクの母親が仁王立ちしていた。
「いつまでも戻って来ないから、どうしたかと思ったわよ」
バツが悪そうな様子になったダスク達は、それぞれ頭を下げたり、耳と尻尾を力無く垂らしたりして謝罪の気持ちを伝える。
「ごめん、ちょっと話し込んじゃって」
「母ちゃん、ごめんよ」
「もぅ、しょうがないわね、ダスクはさっさと鎧を脱いできなさい、黒炎はこっちで手伝って」
「うん、行ってくる」
「は〜い」
それぞれの答えを返して、それぞれの方向へと向かう。ダスクは自室へ、母親と黒炎はいつも食事を摂っているリビングへと。
部屋着に着替えたダスクがリビングへ入ると、母親は台所で料理を温めなおしており、黒炎は器用にテーブルを布巾で拭いている。入ってきたダスクに気が付いた黒炎は、不満そうな声で愚痴を言う。
「母ちゃんったら、獣使いが荒いよ。出来るからってボクにテーブル拭きをさせるなんて」
「あはは、ご苦労様。それにしても、黒炎も大きくなったな〜」
笑いながら黒炎の頭を撫でたダスクは、テーブル拭きを交代する。面倒臭がっていても、黒炎は仕事をほぼ済ませていた。テーブルの上は端を除いて拭き終わっている。
「いいのよ、黒炎だってウチの子なんだから、手伝うのは当たり前」

台所からスープの入った器を持ってきた母親は、テーブルに皿を並べながら言う。ダスクはパンを運ぶのを手伝ったりしながら、黒炎用の水等を用意した。
「さあ座って、それでは、いただきます」
「いただきます」
「いただきま～す」
全員揃って『いただきます』を言う。これが普段からのこの家の基本ルールである。ゆっくりと食事をする母親を尻目に、ダスクと黒炎は勢い良く食事を掻き込んでいく。母親は呆れたようにその様子を眺めており、口元には笑みが浮かんでいた。
ある程度食事が進んだところで水で食べ物を流し込み、ダスクは真剣な表情になる。その様子を黒炎はチラリと見るが、何事も無かったかの様に食事に戻る。母親は気付いているのかどうか、相変わらず笑顔で食事を続けていた。
「母さん、話があるんだけど、いいかい？」
「いいけど、なんだい？」
ん？という表情で自分を見る母親を見ながら、ゴクリと唾を飲み込む。食事を続ける黒炎は、ピンと立った三角の耳がピクピクと動いて聞き耳を立てている。
「お願いがあるんだ」
普段通りの顔で話の続きを促す様に母親はダスクの目を見る。ダスクはしっかりと目を見返しながら、あの時からずっと考えていた事を伝える。
「6年前の学院長さんの事、覚えてる？」
「ああ、あの時の学院長さんだろ？大怪我してて大変だったね」
「うん、黒炎が見付けた時の血塗れの様子はすごかった」
自分の名前が出てきた黒炎は、耳をピクリと反応させたが、気にしないように水を飲む。
「それで、学院長さんが帰り際に誘ってくれたんだ。
王都で自分が責任者をしている学院に来ないかって、紹介状も書

いてくれたんだよ」
「まぁ、そんな事があったのね・・・それでお前はどうするんだい？」
再びゴクリと唾を飲んだダスクは、逡巡する様な表情で口を開いたり閉じたりする。それを見た母親は一転して厳しい表情に変えてダスクを見る。
「その程度の気持ちなのかい？何をやるにしてもそんなんじゃやるだけ無駄だよ」
その言葉に、知らずに俯いていた顔が跳ね上がり、その勢いのまま椅子を蹴倒して立ち上がる。奮然とした表情になったダスクは、母親にくってかかる様に声を荒げる。
「そんな事は無いよっ！僕は6年間この為に色々な事をやってきたんだっ！
父さんの言った通りに鍛えてきたし、仕事もやってお金も結構貯めた。
遺言だった形見の鎧を自分の物と言えるモノにもしたし、それに、それにっ！」
「じゃあ、いいんじゃない？」
「えぇっと、後は、後は・・・・・えっ？
いいの？僕が・・・僕と黒炎が王都に行っちゃっても」
「ぷっ、あははは、なんて顔してるんだい」
ポカンとした顔で母親の顔を見返すダスクの表情が面白かったのだろう、盛大に笑いながら腹を押さえる母親の様子に呆然とした様子で、ダスクは固まっている。
「ぷぷぷっ」
傍らから聞こえて来た黒炎の笑い声に、ダスクはハッとした様子で我に返ったようである。怒ったような、困ったような、複雑な気分で母親の方へと視線を戻す。
「母さん・・・ふざけてないで真剣に考えてよ」
「何言ってるんだい、全然ふざけてないよ。

何かを成そうとするんだったら気持ちで負けてたらだめじゃないか」

「それはそうだけど・・・」

不満そうな顔で見てくる我が子の様子に、母親は相手を慈しむ様な表情に変える。

「知っていたよ、この6年間、何かの目標に向かって進もうとしているのを。

あたしは、あんたの母親だよ?それくらい分からなくてどうするんだい」

「っ、だって僕達が居なくなったら母さん一人になっちゃうんだよ?」

「そんなの大丈夫だよ、あたしを誰だと思っているんだい。

息子の夢に反対する様な肝っ玉の小さい女だと思われたくはないね」

「母さん・・・」

ダスクは己の視界が歪んでいるのを自覚する。その原因が頬を伝って流れ落ちるのを感じながら、胸中を熱くする感情に、しばらく動く事が出来なかった。

少し無言の時間が流れた後、ふと脚(あし)に暖かいものが触れるのを感じる。ダスクが視線を向けると、心配そうにこちらの顔を見上げてくる黒炎の瞳があった。フッと、知らずに止めていた息を吐き、黒炎の頭を撫でてから、気が付いたように頬と目元を拭う。拭い終わった手の下からは、少し赤くなった目と感謝の笑顔が出てきた。

「ありがとう、僕には母さんと黒炎、それに心の中に父さんが居る。

とても心強い味方がずっと側に居たんだね」

「ほらほら、これから目標に向かって進んでいく男が、小さな子供みたいに泣いているんじゃないよ」

すこし赤くなった目でこちらを見る母親に頷いたダスクの顔は、短い間に少しだけ成長して、大人の顔に近付いたかと錯覚させた。

「母さん、約束するよ。絶対に僕は強くなって、誰かを守れる人間

になるって」
「ああ期待しているよ、夢をかなえて戻ってくるのを、父さんと一緒にずっと」
「うん、待ってて」
暖かい空気がその場に満ちている、そう思えるような和やかな時間を過ごす。親子の絆を実感できる貴重な機会を得られたダスクは、益々力が湧いてくる心地であった。
「ちょっと、ボクの事も忘れないでよっ」
完全にのけ者になっていた黒炎が拗ねたふうにダスクの脚を突付いてくる。それを見たダスクと母親は楽しそうに笑い声を上げた。
そっぽを向いてしまった黒炎に、ダスクは真剣な顔に戻ってから黒炎の傍らにしゃがむと、その首をギュッと抱き締める。ビックリした様子で固まる黒炎に、ダスクは艶やかな毛皮を撫でながら言葉を贈る。
「忘れるはずがないよ、僕達はずっと一緒だから」
瞳を閉じて気持ち良さそうな顔をする黒炎の尻尾は、リラックスした様にゆったりと振られている。
「（そうだよ、一緒に居てくれなきゃ）・・・約束だから一緒に居てあげるよ」
前半は小さくてほとんど聞こえてなかったが、期待通りの言葉にダスクは嬉しくなって、もう一度ギュッと抱き締め直した。
「ありがとう、頼りにしてるよ、相棒」
その様子を嬉しそうな顔でジッと見ていた母親も黒炎に向けて頷く。
「黒炎、その子の事お願いね」
「ふんっ、しょうがないから任されてあげるよ」
照れ隠しの様な言葉で母親と話す黒炎の尻尾は、その言葉を裏切って、頼られた事を喜び嬉しそうに振られていた。
ダスクは、仕切り直すように深呼吸を1回してから、改めて席に座り直す。今度は、少し冷めてしまった食事を食べ終えてから続ける事にした。せっかくの料理がもったいないと思ったようである。

黒炎は既に食べ終わった食器の前から暖炉の前へ移動して丸くなった。
「それで、いつ出発するつもりなんだい？」
何度かお替りしたスープがダスクの皿の中から無くなるタイミングで、先に食べ終わっていた母親からの問いが来る。スプーンを置き、カップの水を飲み干したダスクは、口元を拭ってから母親へと顔を向ける。
「うん、鎧と装備が出来たから、ちょっと急だとは思ったけど明日出発しようかなと思ってる」
その言葉に、一瞬表情を変えた母親だったが、誰にも気が付かれない程度であった。色々と思う事があるのだろう、余りにも突然の事なので動揺が表に出てしまったのかもしれない。
「ずいぶん急だね、準備は出来ているのかい？」
「うん、少しずつ必要そうな物はまとめていったから」
「そう、忘れ物があったら困るだろうから、ちゃんと確認しておくんだよ」
「わかった、ちゃんとやっとくよ」
嬉しそうに答える息子の様子に、複雑そうな顔の母親は、親の心子知らず、という言葉が頭に浮かんだ。
「そうだ、渡しておく物があったんだ」
「なにかしら」
「これなんだけど、母さんに使って欲しくて」
そう言いながら腰の後ろから取り外したのは、重そうに膨らんだ皮袋であった。ダスクは身を乗り出して母親の目の前に置く。金属のこすれる音と共に、重そうな音がテーブルに響いた。
「これは？」
「中身を見てみてよ、母さんの為に用意したんだ」
首をひねりながら皮袋の口を縛っている皮ひもを解く。皮袋を開いた母親の顔には、ランプの灯りが反射する中身からの照り返しの光が当たっている。皮袋の中身は、銀貨が詰まっており、所々、価値

の高い金貨が覗いていた。
「これ・・・こんな大金どうしたんだい？まさか・・・」
「待って、待って、別に悪い事をして稼いだんじゃ無いから！」
顔の前で両手を振るダスクの様子に、嘘は言っていないと納得した母親は不思議そうな顔になる。
「じゃあどうやって稼いだんだい？」
「うん、実は魔狼の毛皮を売ったりしたんだ、都会から来た行商人に結構高く売れるんだよ。
まあ、高価な金貨は珍しく魔皇熊（まおうぐま）を狩れたから、その毛皮のおかげなんだけどね」
「魔皇熊っ！あんた、あんな危険なヤツを狩ったのかい・・・本当に無茶するねぇ」
今迄見た中で一番驚いた顔になった母親は、心底呆れたようにダスクの顔を見る。魔皇熊はこの辺りでも珍しい獣で、普通の熊の倍以上になる。性質は獰猛で、出会ったら必ず死ぬと言われており、狩りを生業にしている猟師達も避ける獲物である。しかし、その毛皮は美しく、大部分を占める白銀の毛の中で四肢だけが黄金の毛に覆われている見事な物である。好事家には人気のある物なので大金で取引されている。
「それはいいとして、こんなに受け取れないよ。お前達もこれから必要になるだろうし」
「大丈夫だよ、王都までの旅費とか食費は抜いてあるし。
実際に学院に通う事になったとしても、学院長さんが奨学金を出してくれるらしいからね」
「そうだとしても、お前だって都会の生活なんてした事もないだろう？
どれくらい必要になるかなんて分からないじゃないか」
「平気だって、必要になってもならなくても向こうで働くと思うから」
「いいからもっと持っていきなさい」

「いいって、母さんが使ってよ」
平行線になった会話に、双方とも引く事をしない、ある意味似た様な親子である。譲り合う両者に、寝ていた黒炎はうるさそうな様子で首を上げると、テーブルの方へと視線を向ける。
「もぅ、何でそんな無駄な言い合いをしてるんだよ」
「無駄じゃないわよ、お前達がこれから村の外で生活していくんだから必要だろ」
「違うよ、母さんだって生活があるんだから必要になるだろっ」
「むぅ、だったら分ければいいじゃん！
銀貨は半分にするとして、金貨の方はダスクが命懸けで母ちゃんの為に熊倒したんだから、それは受け取らないと駄目でしょ」
「「うぅ」」
折衷案でありながら、説得力のある解決方法を黒炎に言われた二人は、反論も出来ずにただただ黙るのみであった。知性は人間並みに高いとはいえ、動物に言い負かされている人間の様子は、この場面を見ている人が居るならば、とても滑稽であると思っただろう。
「はぁ、そうしましょうかね、まったく頑固なんだから」
「母さん、頑固なのはお互いさまだろ」
相変わらずの二人の様子に、似たもの同士だな、と思いながら首を振り振り再び丸くなる黒炎であった。
その後は、意見がぶつかる事も無く、順調に会話は進む。明日の天気の事や、昔の事、これからの事について母親と話す。今迄、こういう事を親と話す事が無かったダスクは、新鮮であり、意外と楽しいものだったんだなと実感すると共に、しばらく離れ離れになる事がきっかけではあったが、こういう時間が持てて良かったと思った。
「そろそろお開きにようかね」
「そうだね、明日も早いし」
頷いて立ち上がり、食器をまとめて流しへと運ぶ。洗い物を始めた母親を手伝おうとしたダスクではあったが、母親に止められ、あっ

ちへ行けと手を振られる。
「お前達はさっさと部屋に行きなさい。準備を終わらせて明日に備えるんだよ」
「うん、ありがとう、母さん」
ダスクはそう返事をして洗い物をする母親の背中を見る。その小柄な背中に深々と頭を下げると、暖炉の側で丸まっていた黒炎を連れて部屋へと向かう。
「うにゃ」
寝惚けて変な声を出した黒炎の声を最後に、その場には洗い物の音だけが聞こえていたが、少しして違う音も聞こえてきた。
「うっ、うぅ・・・」
押し殺したような声が、途切れ途切れに水の音の合間に漏れるが、それを聞いている者は発している本人のみであった。
ガチャ
部屋に黒炎を入れてから扉を閉めたところで、ダスクは溜息を吐いてからベッドへと移動すると、身体を投げ出すようにしてうつ伏せでベッドに横たわる。
「ふぅ、説得というよりも母さんが察してくれただけだし、何やってるんだろうな」
自嘲的な言葉が口から飛び出す。もっとうまく出来たはずだという不満が言葉の端々から滲んでいる。その様子に、暖炉の種火に口を使って器用に薪を積んでいた黒炎は、呆れたような声でダスクに言う。
「いいじゃん、結果的にはうまくいったんだから」
「ホントにまだまだ駄目だな、僕って奴は」
「そんな事より、明日の準備とか、持ち物の確認とかやらなくていいのかい？」
「いいんだよ、時間をかけて準備してきたんだから大丈夫。
明日の朝に最終確認だけすれば問題ない・・・それに、今日はもうやる気が起きないし」

「相変わらずだなあ、キミは」
しばらくすると、パチパチと音を立てながら燃える薪が部屋の中を暖めてくれる。黒煙は気持ち良さそうに暖炉の前で丸くなり、ダスクは布団に潜って顔だけ出して暖炉の方を眺めていた。
「ねえ、黒炎、僕達はうまくやれるかな？」
「分からないよ、こればっかりは実際にやってみないと」
「そうなんだけど、僕達はノースアタロスから離れた事が無い田舎者だろ。
今までの慣れ親しんだ場所から離れて、王都なんていう都会で生きていけるのかなって」
「大げさだな～、なんとかなるって、ボクも一緒にいるんだし。どんな事があってもボク達ならどうにでもなるって」
「そっか、そうだよね、僕達なら大丈夫。今迄も、色々な事を一緒に乗り越えてきたもんな」
「でしょ、とにかくボクについてこいっ！」
「あはは、頼りにしてるよ、ホント」
笑い合いながら双方共に不安を心から追い出そうとする。これはダスクと黒炎が出会ってから続けられてきた習慣の様なものである。こうやって色々な問題と立ち向かってきた。異種族でも心が通い合えば良い相乗効果を生み出す一例であった。
「ホッとしたら眠くなってきたよ、明日の為にさっさと寝ちゃおう」
「そうだね、ボクも眠くなってきたし」
「ありがとう、おやすみ、黒炎」
「おやすみ～」
不安だったのはダスクと黒炎の両方だった様で、暖かくなった部屋と安心感からか吸い込まれるように睡魔に身を委ねる。あっという間に部屋の中に聞こえる音は、薪の弾ける音とダスク達の安らかな寝息の音だけになっていた。

チュンチュンチュン

早朝の薄明かりがカーテンから漏れる窓の外からは、目を覚ました小鳥達の鳴く声が聞こえてくる。暖炉の火も種火の大きさになり、冷えた室内ではベッドの上のふくらみだけがモゾモゾと動いていた。

「・・・むにゃ・・・」

言葉にならない寝言をつぶやいたダスクは、寒そうに身震いすると、暖かさを求めるように側にあるモノを引き寄せる。寝ている事もあって、少しでも近づける為に手加減抜きでギュッと抱き締めた。

「ふにゃ・・・っ、イダダダダッ！

ちょっ、ちょっと、ヤバイって、出ちゃう、中身が出ちゃうよっ！」

ミシミシと身体中が悲鳴を上げている音を聞きながら、黒炎らしき影はダスクの腕から逃れようと暴れる。悲鳴と一緒に、前足でダスクの顔をバシバシ叩いているうちに限界が近付いてきた。『ボク、もうダメなのかな』、そう思った瞬間に腕が緩んで開放される。荒い呼吸を繰り返す黒炎の姿に、目を覚ましたダスクは不思議そうな顔を向ける。

「ふわぁ、おはよう、黒炎。また僕の布団に入ってきたのかい。

それにしても、いったいどうしたんだ?グッタリしてそんなに呼吸を荒げちゃって」

「キミがっ・・・はぁ、もういいよ。潜り込んでいたボクが悪いんだよ、きっと」

「???」

トンッ

不思議がっているダスクを残して、黒炎はベッドから軽やかに床へと降りる。暴れて乱れた毛並みを直す為に全身を振るうと、サラサラの毛はあっさりと元の艶やかな状態へと戻る。固まった身体を解すように全身を弓のようにして伸びをする様子は、当人ではなくても気持ち良さそうに見えた。

「遅くなったけど、おはよう。早く朝ごはん食べて準備しちゃおうよ」

ベッドから降りたダスクは、両手を上に挙げながら伸びをしていた手を降ろして頷く。
「そうだね、着替えるからちょっと待ってて」
そう言って、手早く寝巻きから普段着に着替えると、扉を開け、黒炎を促して部屋を出る。
リビングに向かいながら、いつも通りのスープの良い匂いを感じて少し寂しい気分になる。明日からは慣れ親しんだこの匂いが無い場所に居るのだろう。感傷に浸りそうになる気分から逃れるように、軽く首を振ってリビングに入る。
「おはよう、母さん」
「おはよ～」
「おはよう、顔洗ってうがいでもしてきな・・・黒炎、あんたもだよ」
「えっ、ボクも?・・・はぁ、わかったよ」
外の水場へと方向転換したダスクとは逆に、暖炉前の定位置に行こうとしていた黒炎は渋々とダスクの後を追いかけて行く。家を出て井戸から水を汲むと、半分は地面の桶に注ぎ、半分はそのまま井戸の石組みの上に置く。触れる水は予想通り冷たく、洗顔やうがいをするとサッパリとして眠気はすっかり無くなった。
「母ちゃん、いつも通りだったね」
器用にうがいっぽい事をした後に、黒炎は桶に顔を突っ込んでから水を振り飛ばす。
「だね、やっぱり母さんは強いや」
手拭いで水気を拭い、深呼吸をして朝の空気を胸一杯に入れる。ダスクは、吐く息と一緒にモヤモヤとした気分も一緒に出ていってくれればいいのに、と思っていた。
外から戻り、リビングに入ると朝食の準備は既に済んでいた。何事も無く、いつも通りの朝食風景がある。昨晩の出来事はまるで夢だったかのようである。
「今日はどうするんだい?朝食の後すぐに出発しておくかい」

「そうだね、食べ終わったら、持ち物を確認して出発するよ。
あっ、村を出る前に父さんに挨拶してからにする。報告するのを忘れてた」
「それがいいね、ちゃんと『いってきます』の挨拶をしていきな」
食事を終えて、先に済んでいた黒炎と共に立ち上がる。昨晩に続き、片付けの手伝いは断られてしまったダスクは、笑顔を母親に向ける。
黒炎も思うところがあったらしく、ジッと見詰めていた。
「ごちそうさま、美味しかった」
「ごちそうさま～」
これからしばらくは食べれないお袋の味は、気持ちの違いなのか、いつもより美味しかったと感じた。
部屋に戻り、荷物を検める。日にちをかけてきただけあって、旅をするのには十分な荷物が出来上がっている。黒炎は手持ち無沙汰らしく、暖炉の前で横になってダスクの方を見ていた。
「黒炎、これ作ってみたんだけど、どうかな？」
「ん？なに作ったんだい？」
ダスクが手に持っている物を良く見ようと近付いていくと、それは金属と革等で出来た・・・何かであった。不思議そうな顔をしている黒炎に痺れを切らしたダスクは、手に持っている物を見やすいように広げた。
「分からないかな、黒炎用の背嚢とか部分鎧とかだよ」
「えっ、それボクの分？重いのは苦手なんだけどな～」
「これから何があるか分からないから必要かと思ってね、
とりあえず背嚢に予備の保存食くらいは持ってもらおうかと思ったんだ。
鎧に関しては僕が持っていくから安心してよ」
「それくらいならいっか、せっかく背嚢も黒く染めた革や布を使ってくれてるんだし」
「毛の色に合わせてみたんだ、我ながら良い出来だと思うよ」
自信作なのだろう、ダスクはニコニコしながら製作中のあれこれに

ついて語っている。黒炎は、また始まった、と呆れながら聞いていた。

持ち物の確認が終わったところで、黒炎に背嚢を背負わせ、鎧と荷物を身に付ける。ダスクと黒炎は無言で部屋の中の物を順に眺める。出発点の光景を目に焼き付けるかのようにゆっくりと。

「さあ、僕達の長い旅を始めよう。笑顔でこの場所に戻って来れる様に頑張ろうな」

「そうだね、大変そうだけどつきあってあげるよ」

頷き合って歩き出し、扉を開ける前に暖炉の火も完全に消しておく。扉を開け、黒炎を促してリビングへ行くと笑顔の母親が待っていた。その手には大きめの包みが持たれている。

「はい、これ、お弁当を持っていきな。飲み物も入ってるからちゃんと食べるんだよ」

「ありがとう、母さん」

兜を外して顔を出し、同じく笑顔で受け取ったダスクは、自分の背嚢に大切そうに入れる。

「気を付けて行っておいで。

お前達はあたしの大事な息子達だからね、帰ってくる時は一緒に帰ってくるんだよ」

目を少し赤くした母親は、そう言ってダスクは鎧の上から（少々抱き締めにくそうにしていた）、黒炎はしゃがんで目線を合わせて、抱き締める。ダスクは泣き笑いの顔で鎧に涙の雫を落とし、黒炎も珍しく紅く輝く瞳に涙を溜め、別れを噛み締めていた。

別れの後には新しい出発が待っている。涙を拭い、表情を笑顔に変え、この出発を明るいものとする為に、元気良く玄関へと移動する。扉を開けると今日も空は青く、気持ちの良い一日になりそうだった。

「いってらっしゃい」

優しい声で送り出してくれる母親に応える様に、元気良く始まりの言葉を告げる。

「「いってきます！」」
手を振り合って離れていく。最後まで笑顔で居てくれた母親に、まだまだ勝てないなと思うダスク達であった。

ガチャ
ダスク達の姿が見えなくなった後、家に入って扉を閉めた母親は抑えていたものが溢れるのを感じる。
「アナタ、あの子達を守ってやって下さい・・・」
誰も見ていない場所で、亡き夫に祈る姿を見る者は誰も居なかった。

無言で村の外れまで歩いていく。村の北東の柵の側（そば）には、この村で亡くなった人達の墓石が立ち並んでいる。墓石の間を抜けて、一番柵に近い所にウォール家の墓がある。右の墓石、盾の意匠がされた方には祖父と祖母が、左の墓石、交差した鎚（つち）の意匠がされた方には父が葬られている。墓石の周りの雑草を手早く取り除いて、祖父と祖母にも簡単に出発の挨拶をすると、ダスクはジッと父の墓を見詰めた。
「父さん、これが僕の技だよ。まだまだ未熟だと言われそうだけど、これが今の僕なんだ」
両手の装備と鎧を見せるように両手両足を広げる。陽光に照らされて、尚そのままの、くすんだ黒色に光っている。
「しばらく村を離れる事になったから、母さんの事を見守っていて。僕の方は大丈夫だから、黒炎が付いて来てくれるし」
「うん、ボクが一緒だから心配ないよ。母ちゃんの事は父ちゃんの役目だからね」
黒炎も思うところがあったのだろう、墓石にポンッとタッチすると尻尾で挨拶するようにゆっくりと振る。それを見て、ダスクも黙祷を捧げた。
「それじゃあ、いってきます、父さん」
「いってきま～す」

一礼をして歩き出す。墓地から中央を貫く東西の道に戻り、西の端にある門へと向かう。早朝なので、まだ人の姿は見られない。出発の挨拶は前もって行ってあるので心配はなかったが、知人の顔を見ずに別れるのは少々寂しいものなんだとダスクは思った。

「おはよう、早いな、とうとう行くのか？」

「おはようございます、はい、いってきます」

門の側に居た守衛に声をかけられる。一人だけでも別れに立ち会ってくれる事が、なんとなく気持ちを楽にしてくれる。一つ頷いた守衛は、すぐに門を開けてダスク達を通してくれた。

「気を付けてな」

「ありがとうございます」

「いってきま～す」

ダスクは頭を下げて手を振り、黒炎は尻尾を大きく振る。少し歩いて、守衛が小さくなってきたところで、黒炎の三角の耳がピクリと動く。何かたくさんの音が後ろから聞こえてきた気がした。

「何か聞こえるよ」

「ん？どこから？」

「後ろ、村の方向からだね」

「後ろ？何だろう？」

そう言って、後ろを振り返ったダスク達の目に思ってもみなかった光景が飛び込んでくる。そこには、ほとんどの村人が集まって、こちらに向かって手を振っていた。

「がんばれよ～」

「身体に気を付けるんだよ～」

「お前の母さんの事は心配するな、みんな村の仲間だから任せておけ～」

「途中で逃げ帰ってきたらしょうちしないぞ～」

「ダスクくん、黒炎ちゃん、がんばって～」

・　・

・

村人達からの温かいエールが辺り一面に響き渡る。今迄に無い人々の大きな声に、鳥達は飛び立ち、獣達は森の奥から何事かと様子を窺っている。晴れ渡った青空に応援の声、旅立ちの門出には相応しい光景が目の前にあった。

「みんな・・・」

「いいやつらだな～」

「そうだな、良い人達だ」

あまり大きくない村だから村人全員と面識がある。だからといって全員と同じ様に親しい訳では無かった。それなのに、ほぼ全員の村人が自分達の見送りに来てくれた事が自然と胸を熱くさせる。

「「いってきま～す！」」

顔を見合わせて頷き合わせたダスク達は、タイミングを合わせて大声で応える。ダスクは目立つ両手の装備を振り、黒炎は大きな尻尾を激しく振る。少しずつ進みながら何度も振り返り、だんだん小さくなっていく村の前、見えなくなるまで村人達は見送ってくれた。

「なんか力をもらったって気がする」

「やる気の足しにはなったんじゃないかな」

「うん、改めてここで誓うよ、絶対に夢をかなえて村に帰るって」

「いいね、ボクも一緒だから、ますますかないそうだね」

温かい気持ちになりながら笑顔で先へと進む。いつの間にか別れの寂しさを忘れている事にも気が付かず、足取りも軽くなっていた。

ここから先はほとんど行った事の無い場所になっていく。街道に入れば人通りも増え、見知らぬ土地、見知らぬ町、見知らぬ人々が待っている。道は未来へと通じているけれど、それはどんな未来へと導いていくのだろう。ダスクと黒炎は無事に王都へと辿り着けるのだろうか。

旅立ち（後書き）

楽しんで頂けたでしょうか。続きも早く読んで貰えるように頑張ります。

無知と出会い（前編）（前書き）

前話の投稿と同じペースで投稿できました。気を抜かずに続けられたら良いなと思っています。

無知と出会い（前編）

ザァーーー

辺り一面、土砂降りの雨で水溜りが出来ている。空は分厚い雲に覆われて薄暗く、大量の雨をまさにバケツをひっくり返した様な感じで落としている。頭上には大きな常緑樹が枝を張り出しており、濃い緑の葉は雨が直接かかるのを防いでくれていたが、葉の隙間から滴（したた）ってくる雫だけでも全身が湿ってくる。次第に強くなってくる風に、直接かかる雨が増えてくると急激に体温を奪い始めた。

「風も吹いてるから、さすがに冷えてきた」

「うぅ、ボクなんて毛が濡れて身体に張り付いてるから、さ、寒い・・・」

「ちょっとまずいな。雨風（あめかぜ）を防ぐ場所を探した方が良いかもしれない」

身を乗り出して雨に霞む景色の奥を見通す様に眺めるのは、くすんだ黒色の全身鎧を装備した人物で、声は鎧の内側なのでくぐもって聞こえるが十代半ば位の少年の声である。

「さ、探すなら一緒に行くよ。戻ってくると二度手間になるし」

そう言い、身体を振るって濡れた身体から雨水を飛ばしたのは、ピンと立った三角の耳と狐の様な大きい尻尾を持った艶やかな黒い毛皮の獣で、最も特徴的なのはルビーの様に紅く輝く瞳である。もっとも今は、雨に濡れて耳は伏せられ、尻尾や身体は毛がペタッと張り付いてみすぼらしく見えている。

前者はダクス・ウォール、後者は黒炎である。ダスクは木の根元に置いてあった荷物を持つと、忘れ物が無いか確認してから黒炎に頷いて合図し、雨宿りをしていた木の下から走り出す。どうしてこんな事になったんだろう、そう思いながら。

故郷の村、ノースアタロスを出発したダスクと黒炎は順調に街道

までの道を進んでいた。数日経った今では、だいぶ旅にも慣れてきて、野宿をするのも手際が良くなっている。枯れ木を集めて焚き火を熾し、薪と一緒に見付けたキノコと先程捕まえた兎をさばいた肉で作った串焼きを地面に刺して炙る。その近くにはヤカンがあり、お茶に使う湯を沸かしていた。

「街道って遠かったんだね。結構歩いているのにまだ合流できない」

「あはは、それだけ村が山奥のド田舎にあったんだね」

「こらっ、そういう事は言っちゃ駄目だよ。僕達の故郷なんだから」

「いいじゃん、ボクなりに親しみを込めて言ってるんだし」

「はぁ、まあいいか」

苦笑いしながら串焼きの様子を見る。焼き加減も良さそうだと判断して、黒炎の前に皿に乗せて半分置き、自分の分にかぶりついた。黒炎も熱々を美味しそうに食べている。出発が雪に閉ざされる冬の前、秋であった為、周囲からは虫の音が聞こえてくる。収穫の秋でもあるから食料も豊富で、その面では野宿にも最適である。問題はこれからどんどん気温が低下してくる事だろう。

「これからどんどん寒くなってくるんだろうね」

焚き火に手を当てながら水筒の水を飲むダスクは、装備を外して楽な格好に着替えている。こちらを見る黒炎の視線に応えて、追加の水を地面の皿へと注いだ。

「さっさと街道に出た方が良さそうだね」

そう言って皿の水を飲み干した黒炎は、焚き火の前で丸くなる。眠るのではなく、首は持ち上がってダスクの方を見ていた。

「ボク的には野宿でも美味しい物が食べられるなら全然構わないんだけど、

　キミ達ニンゲンは布団で横になって休まないと体力的にしんどくなってくるんじゃないかな」

「そうかもしれない。僕はまだ大丈夫だけど、この先は分からないからね」

少し考え込んでいたダスクは、表情を真面目なものに変え、黒炎へ

再び視線を向ける。
「明日は少し急いでもいいかな？」
「ん？いいよ、ボクはキミについてくだけだから」
紅い瞳が笑っている様に感じられ、尻尾は機嫌が良さそうにゆったりと振られている。
「ありがとう、それじゃあもう寝ちゃおう」
「そうだね、おやすみ～」
黒炎は、首を引っ込めて黒い毛玉になり、ダスクは食事の後片付けを済ませて毛布にくるまった。
「おやすみ」
小声でささやいて目を閉じるやいなや、眠りへと落ちていった。

早朝、太陽が山の稜線から顔を出すと同時に起床する。簡単な朝食を摂り、荷物をまとめ装備を整えると、さっそく街道を目指して出発する。今日は確実に街道に出たいのでしばらく身体を慣らす為に走った後、本格的に長距離走へと突入した。黒炎の四足の走りは優美で美しい物であったが、くすんだ黒い全身鎧に加え同素材の大きな装備を背中にかついで走る姿は、まるで黒い塊がすごい勢いで転がっている様な印象を与える。たまに森から飛び出してくる動物がそれを見て、恐れをなして逃げていく光景が何度も繰り返された。

ザザザザッ

どれ程の体力があれば出来るのか、太陽が真上に昇るまで走り続けたダスク達は、突然木々に囲まれていた道から広々とした道に出る。驚いたらしく、急に止まろうとしたダスクは、鎧等の重さで地面を少しの距離滑ってから止まった。黒炎はぶつからない様に、軽やかに横にステップして、その隣に止まる。
「あぶなっ、さすがのボクでもキミにぶつかったら結構痛いよ」
「ごめん、急に広い場所に出たから驚いちゃって」
「気を付けてよ、もぅ」
道の真ん中で立ち止まって話をするダスク達は、街道を行き交う旅

人達の目を引くのに充分以上に目立っていた。ほとんどの旅人が指をさしたり、連れと囁き合っている。しばらくの間、言葉をやりあってたダスク達は、自分達が旅人達の注目の的になっている事に気が付く。

「あらら、道の真ん中で話してたら、そりゃ注目の的だよね」

「まいったな、ここで立ち止まっていたら通行の邪魔だな」

「かなり邪魔だったんだろうね、みんなが見てたよ」

「とりあえず早く行こう。確か、街道に出たら右へ進めば良いって言ってたかな」

「そうしよう、せっかく街道に出たんだから町に行こうよ」

「うん、僕も久しぶりにベッドで寝たいからね」

「楽しみだな～、最初の町には何があるんだろう」

街道を右へ、つまり西に向かって歩き出す。ダスクと黒炎、お互いが会話だけに気を取られて周囲へ注意を向けていなかったので、道の端へ寄って歩いていながらもすれ違う旅人達の視線を依然として集めたままだという事に気が付かなかった。

今日は天候も良く、秋から冬へと変わる時期の冷たい風も吹いていないので、過ごし易い陽気である。見渡す景色は、牧場でのんびり牧草を食む牛が並んでいたり、黄金色（こがねいろ）のススキの原があったりして、とてものどかな雰囲気だった。そういった空気に浸りながら歩いているうちに、いつの間にか少なくない距離を歩いていたらしい。ふと気付くと、遠めに町らしき影が見えてきた。

「あ、町が見えてきた。ほら、あそこ、見えるかい？」

「やった～、記念すべき最初の町だね。ボクお腹空いちゃったから何か食べようよ」

「まだ着いて無いのに気が早いって。でも、そうしようかな、僕もお腹減ってるからね」

街道に出る為に、朝からずっと走りっぱなしで、その後はずっと歩いていたからだろう、ダスク達は意識した途端に腹の虫が泣き出すのを聞く。それからは無意識に、先程よりも歩調を速めて歩いてい

たのであろう、町の影はみるみるうちに近付いてきていた。
　ガラガラガラガラ
牛に引かれた荷車に続いて町の門へと差し掛かる。数台の荷車が新鮮な牛乳が入った缶や農作物を運んでいる。酪農や農業が主産業の町の様で、ますます食事が楽しみになる。
「え～と、町の名前は・・・アチケットっていうのか、意外としっかりした町だね」
門の上の壁に書かれている町の名前を眺めながら、黒炎は少し失礼な事を言う。しょうがない、という感じの表情で肩をすくめるダスクも似た様な印象を受けたのだろう、視線を向ける町を囲む塀は自分達の村の柵とは比較にならない位しっかりと造られていた。基礎に石を積み上げ、その上に防火防水作用のある塗料を塗った木材で壁を作っている。
「やっぱり街道沿いだから塀も立派だね」
「ウチの村とは全然違うね。ボクでも乗り越えるのは大変そうだ」
「何言ってるんだよ、乗り越える機会なんてあるわけがない」
「あはは、まあそうだけどね」
門の脇に立っていた守衛に村発行の身分証明書を確認してもらい、何故かこちらを凝視しているもう一人の守衛に見送られる様に門をくぐる。町を東西に貫いている中央通りには今迄見た事も無い数の人が歩いている。道の両脇からは商店の客引きの声が響き、客とのやりとりが一層の活気を辺りに振りまいている。ここから見えるだけで村の人口くらいあるんじゃないかと思えたダスク達は、驚きの余りその場に立ち止まっていた。行き交う人々は、邪魔そうな素振りでダスク達を見るが、まさしく黒い塊という存在感にギョッとした顔で離れていく。
「すごい人の数だ、町にはこんなに人が居るんだね」
「むぅ、人が多過ぎてボクには周りが見えないよ」
「そっか、それじゃあ肩に乗るかい？」
「久しぶりにそうしようかな、そのうち誰かにどこかを踏まれそう

だし」
頷いたダスクは乗りやすいように少し腰をかがめる。黒炎は素早く背を駆け上がると、首の後ろに横向きに胴を付け、両肩に足を置く。周りに居た人々は一瞬驚いた様子であったが、動物を肩に載せる様が、どこか微笑ましさを感じさせて笑顔になっていた。
「ねぇねぇ、あそこの屋台で売ってる串焼きが美味しそうだよ。食べようよっ」
　ザワッ
黒炎が話すところを、ダスク達の方を見ていた人々が目にした途端に周囲の空気がざわつく。人々は一様に驚いた顔をしており、近くの人間と何か小声で会話をしていた。
「なんだろう、周りの人がこっちを見ているような・・・まあいっか、ダスク、早く行こっ」
「ん？分かった、落ちない様に気を付けて」
ダスクも黒炎も自分達が注目されるとは思っていないので、周りの反応を改めて意識する事も無く、人々をかき分けて屋台へと向かう。驚いていた人のほとんどは自分の見聞きした事は何かの間違いだった、と思い直して首を振りつつ、再び当初の目的に向けて歩き出す。その後も、ダスク達の行く先々（さきざき）で同様の現象が起きていたが、本人達は特に気に止めることも無く、初めての町を楽しんでいた。その後ろを追いかけながら、様子を窺っていた人間が居る事にも気が付く事は無かった。
　カラーン、カラーン
陽も傾き、空は夕焼けで真っ赤に染まっている。帰宅を促す教会の鐘の音が辺りに響き、遠くには巣に戻る鳥達の姿が見え、人々も家路へと足を速めている。壁や建物がある町は、村に居た時よりも暗くなるのが早いらしく、辺りの様子が見えなくなるのも間もなくであろう。
「屋台の食べ物は美味しかったね。町って良い所だな～」
「うん、食べ物もだけど、色々な物を売ってて面白かった」

「キミったら金属の細工物のトコから全然動かなかったよね」
「う、悪かったよ。職業柄ああいった物には興味があったから」
「まあいいけどね。今のボクは美味しい物が食べられて機嫌が良いから」
「あはは、ありがとう」
町を周っている間にやった事を話しながら楽しそうに道を歩く。これだけ暗くなってくると黒い格好も目立たなくなり、人も少なくなっているので黒炎もダスクの肩の上から降りて地面を歩いている。たまにすれ違う人は黒い塊が突然視界に入ってくる事に驚いていた。
「そろそろ宿を決めないとまずいかな」
「そうだね、ボクも部屋の中でゆっくり休みたい」
「今日は結構歩いたからね、僕も同じだよ」
「ところで、宿ってどうやって探すんだい？」
「あ、どうしよう、それは考えてなかった」
「えぇっ、どうするんだよっ！？ボクだって分からないよ」
困惑したような様子で顔を見合わせる。鎧の顎の有る辺りに手を当てながら考えているダスクを見ながら、落ち着かない風（ふう）に尻尾を振る黒炎はうろうろと行ったり来たりしていた。
「お客さん、宿を探しているんで？」
タイミングを見計らった様に後ろから掛けられた声に、ダスクは振り向き、黒炎はその横へと回って、新たな登場人物に視線を向ける。少なくない時間考え込んでいたらしく、真っ暗になった道を照らす白い月明かりは強くなっていて、道の真ん中に立っていたダスク達をくっきりと見せていた。現れた人影はランプを持っており、その弱い灯りが照らしている姿は、３０代後半位の男で、無精ヒゲを残した身なりの悪い格好であった。
「オジサンは誰？ボク達に何か用かい？」
黒炎が話しかけた瞬間に男は少しだけ表情を変えるが、すぐに元に戻して答える。奇妙に歪んだ表情は、辺りの暗さもあって、ダスク達にはハッキリとは見えていなかった。

「あっしは宿の客引きですよ」
「客引き？あなたが宿を紹介してくれるのですか？」
「そうでさ、それが仕事なんでね」
「でも、どうしてボク達が宿を探してるって分かったの？」
「まあ、言い方は悪いですが、この時間にボケッとこんな所で立っている人間は稀なんでね。
そんな稀な人間はだいたい同じ理由で居るもんなんですよ」
「なるほど、そういう背景があったから僕達に声をかけたんですね」
「そうでさ、まあ、たまたま通りかかった所で『宿』っていう言葉が聞こえたんですけどね」
「あはは、ちゃっかりしてるな～、でも助かったね」
「そうだね、ちょうど良かった。そういう事なので、案内よろしくお願いします」
「あいよ、それでは着いて来て下さいな」
一礼して向きを変えた客引きの男は、サクサク進んで行くが、時々着いて来るのを確認するようにダスク達の方を見る。遅れずに着いて来る様子に安心した様に、客引きの男は口元に笑みを見せつつ先へと進む。中央通りを後にしてからの進む方向は、どんどん道が細くなっていくと共に薄汚れた建物が目立つようになっていた。
「宿ってこんなところにあるんだね」
「うん、僕も知らなかったから勉強になったよ」
そんな事を言いながら歩くダスク達を連れて、いくつもの角を曲がった客引きの男は一軒の建物の前で立ち止まる。建物には宿屋を示す看板が無いどころか何を扱っているか分からない様子だったが、灯りの漏れる扉の奥からは飲酒を楽しむ声や、料理の匂いが伝わってくる。案内をしてきた客引きの男は、入口の扉を開けて入ると、片手を促す様に広げる。
「いらっしゃいませ」
それに応えて店内へと足を進めたダスク達が視線を上げると、いつの間にか静かになっていた店内の客の全員が見ているのが分かった。

思ってもいなかった状況に戸惑ったダスクは立ち止まり、黒炎も警戒する様な仕草で傍らに寄る。

「おらっ、お前らには関係無いんだから酒でも飲んでろっ！」

焦っているのか、怒っているのか分からない様子で客へと怒鳴ると、客引きの男は愛想笑いを浮かべてダスク達へと頭を下げる。

「すいやせん、ウチの客は無遠慮な奴ばっかりで」

「え、ああ、構いませんよ。少し驚いただけなので」

「そんな事より、ボクお腹空いちゃったよ」

黒炎が言葉を発した瞬間、まだこちらを見ていた周りの客達は顔を見合わせて喋り始める。さすがに分かりやすい反応で自分達を見る客達に、気分を害した黒炎はムッツリと黙り込んでしまった。

「すいやせん、あっしが注意しときますんで」

「お願いします。とりあえず簡単な物で良いので料理を出して下さい」

「まいど、あんたは普通で良さそうだが、その御仁は同じ物で大丈夫かい？」

「大丈夫です、逆に彼のは熱々にして下さい」

無言で頷くカウンター内の男は後ろで煮込んでいたスープを皿に注いで持って来る。黒炎の分は注文通りに別の鍋に分けて熱々にしてくれた。さびれた店構えの割にスープの味は文句の付け様が無く、黒炎もある程度機嫌が良くなったようで尻尾が満足そうに振られていた。

食べ終わりに合わせて出されたカップの水を流し込み、満足そうに鎧の腹辺りを撫でたダスクは、黒炎も食事が済んでいるのを確認してから促すように客引きの男へと顔を向ける。近くで酒を飲んでいた客引きの男も心得た様子で頷き返す。

「そいじゃあ宿帳にサインをしちまってくださいな。すぐに部屋に案内しますんで」

カウンターに居た別の男から宿帳を受け取った客引きの男は、ダスクへインクに浸けたペンを渡してくる。宿帳と入れ替えで食事代と

前払いの宿代を渡す。ダスクがサインをして返した宿帳をカウンターへと放った客引きの男は、部屋まで案内するらしく、着いて来いという仕草をしてから歩き出した。

ギィ、ミシィ

案内する客引きの男に次いで木製の階段に足を乗せた瞬間、ダスクの足の下から木の軋む様な嫌な音が聞こえてくる。慌てて足を戻したダスクは、困惑したように客引きの男を引きとめた。

「あの、申し訳ないのですが1階に有る部屋に変えてもらえないでしょうか」

「あぁっ!?・・・ゴホン、どうかしやしたか?」

「見ての通り鎧があるので少々重さがありまして、率直に言いますと階段がもちません」

「は?・・・ちょっと待ってろ、相談してくる」

予想もしていなかった事態に、不機嫌そうな顔になった客引きの男は返す口調が荒くなっていたのにも気が付かず、慌ててカウンターの男と相談を始める。

「・・・せっかく・・・になる・・・」

「・・・1階は・・・裏の・・・」

小声で話し合う二人の様子に申し訳ないと思いつつ、見知らぬ町で今から新しく宿を探すのが困難だと考えたダスクは客引きの男に近寄る。

「あの、ちょっといいですか?」

「ん?ちょっと待っててくれ、今話してる」

「ですから、その事についてです」

ハッとした顔でダスクの方を見た男達は、何か勘違いしたかのようで慌てた様に詰め寄ってくる。

「お客さん、待ってくれ、今なんとかするから」

「あ、いえ、違うんです。

1階で僕達が横になれるスペースがあるなら物置小屋でも構わないってお願いしようかと」

「なんだそういう事か。本当にいいのか？裏に大丈夫そうな物置があるが」
「はい、こっちの都合で悩ませるのも悪いので」
「すまねぇな、宿代は安くしとくぜ」
「ありがとうございます」
安心したダスクと、何故かホッとした顔になった宿の男達は安堵の息をつく。宿代の差額を受け取り、再び案内をする客引きの男の後に着いて行くと、今度は裏口へと案内される。扉を開いて進む後ろ姿を眺めながら、先程から無言の黒炎にダスクは小さな声で話しかける。
「どうしたんだい？さっきから黙ったままだけど」
「ん？ちょっとね、後で話すよ」
出てきた宿屋よりも更にくたびれた感じの小屋の前で止まった客引きの男の姿に、黒炎は会話を止める。ダスク達が側に来るのを待って、客引きの男は入口の鍵を外した。
「ちょっとボロいけど我慢してくれ。邪魔だったら中の物は自由に動かしちまっていいぞ」
「分かりました、ありがとうございます」
「ゆっくり寝てくれ」
そう言い戻って行く客引きの男の背中を少しの間見ていた黒炎は、ダスクが開いて待つ扉を抜けて奥へと入っていった。小屋の扉が閉まり、真っ暗になった裏口の扉の前で立ち止まっていた客引きの男は、ダスク達が確かに小屋へと入ったのを確認していたかのようにしばらく見てから宿へと入った。
　宿で話をしているうちに拡がったのか、月を隠した厚い雲は辺りを尚一層暗闇に閉ざしている。加えて吹き始めていた風は湿り気を帯び、遠からず雫を落とすのではないかと思える雰囲気になっていた。
　ガタガタガタッ
物置小屋の中では背嚢から出したランプの灯りに照らされたダスク

が、乱雑に置かれていた木箱や麻袋等を端へと動かしている。床には埃が積もっていたので、動く度に舞い上がるそれに黒炎が嫌そうな顔をしていた。

「ねぇ、ボク達、ちゃんとしたベッドの有る部屋で寝る予定だったよね」

「しょうがないだろ、僕の鎧のせいでこんな所になっちゃったのは悪いとは思うけど」

「ここがボロ過ぎるだけだと思うよ。普通の建物ならかろうじて重さにも耐えられるんじゃないかな」

「まあ、そうかもしれないけど、今は屋根の有る場所で寝られるだけで良しとしようよ」

「はぁ、文句言ってもしょうがないか。とりあえず広さはそれなりにとれそうだし。

それにさっき外に出たときに風が湿っていたからね」

「良かった、少しはましに思える事があったね。そういえば、さっき話を止めたけど何だったんだ?」

「うん、ちょっとね・・・」

途中で言いよどむ様な仕草で何か考えていた黒炎であったが、心を決めたらしく真剣な瞳でダスクの顔を見る。

「なんか、変じゃなかった?

あの宿に居た人達もそうだけど、それ以上にボク達を案内してくれた客引きの人の態度とか」

「そう?僕は別に気にならなかったけどな~。

ほら、建物も傷んでるし、客を集めるのに必死だったんじゃないかな」

「そうなのかな、う~ん、ボクの野生の勘がビンビン反応してるんだけど」

「野生って・・・僕達と一緒に住んでたんだから野生じゃないって。

でも黒炎の感覚も馬鹿に出来ない時があるからな、大丈夫だとは思うけど注意はしておこうか」

そう言うダスクの言葉に黒炎は嬉しそうに尻尾を振る。それを見て笑顔を見せたダスクは、外していた兜を再び装着すると、鎧のまま寝る事に決めたようで、そのまま壁を背に座ると手の届く位置に装備類を置く。黒炎はその傍らに来ると、背嚢を背負ったまま丸くなる。

「おやすみ」

「おやすみ～」

お互いに言葉を交わし、黒炎は目を閉じるや否や睡眠に落ちる。その様子に笑みを見せてからランプの火を消し、自分の背嚢にしまうとダスクも同じ様に目を閉じる。真っ暗になった小屋の中にはダスク達の寝息だけが聞こえていた。

ガタガタッガタッ

深夜になり風が強くなって建物の戸や窓を揺らす音が鳴っているが、次第に強くなってきた風の音にかき消されそうになっている。寝静まっている町に起きている人間は居ないだろうと、もし誰かが見ていたら思いそうな時間帯ではあったが、不意に宿の裏口が開かれる。そこから顔を見せたのはダスク達を案内した客引きの男であった。辺りを見回し、物置小屋の方を注意深く観察していたが、静かな様子に納得して身体も外に出す。その後ろにはカウンター内に居た男も一緒であった。

ポツッ

ふと頬に落ちた感触に手をやると、客引きの男の掌は少し濡れていた。

「雨か、音を消してくれるから好都合だな」

「ああ、仕事をするには良い天候だ」

闇にまぎれる二人は、そう小声で話しながらニヤリと笑う。その手には物騒な物が握られていた。闇の中では判別しづらいが、太く頑丈そうな棍棒には何か黒っぽいシミがこびり付いている。頷き合った二人はゆっくりと忍び足で物置小屋へと向かう。背を向けた二人の腰のベルトには大振りのナイフが差し込まれていた。扉に耳を付

けて内部の音を聞いていた客引きの男が手で合図をした後に、再び二人は頷き合った。鍵穴に油の様な物を差し、音を立てずに開錠するやいなや扉を開いて飛び込むと、目の前には闇に目が慣れていてもなお、影にしか見えない二つの膨らみが床に並んで横になっていた。

ドガッボグッ

二人は同時に飛びかかると、大きい方の影には頭部らしき場所を乱打し、小さい方の影には1発殴った後に捕獲する様に押さえつける。二つの影は最初の一撃で失神してしまったかの様にピクリとも動かない。大きい方の影に馬乗りになった客引きの男は、そのまま頭部らしき場所を殴り続ける。

グシャッ

何かが潰れる様な音が室内に響き、客引きの男の手にも何かを潰した手応えが伝わってきた。そこでやっと手を止めると、男達は顔を見合わせてニヤリと笑う。

「くっくっくっ、やったぜ、息の根を止めてやった」

「こっちも一撃で気を失ったらしい、ピクリとも動かないぜ」

「おいおい、せっかくの売り物なんだ、殺して無いだろうな」

「安心しろって、それくらいの加減は出来る。なにしろ慣れているからな」

嫌な感じに笑いあう二人の様子は、殺しを何とも思っていない様子がありありと窺われた。

「おい、灯りを点けろよ。真っ暗じゃ戦利品も確認できない」

「そうだな、あのくすんだ黒色の鎧も骨董品屋に高く売れそうだしな」

そう言って、慣れたように天井に吊ってあったランプに火を灯す。

ランプの灯りに照らされた室内は人が動いたので埃が舞い、積み上げられた木箱や麻袋の薄汚れた様子がはっきりと見える。少し咳き込みながら自分達の成果を確かめようと、先程まで影だったモノに視線を向ける。

「は？」

二人の男達は目の前にあるモノが何であるか理解できなかった、というよりは理解したくなかった。

元々ここに放り込んであった麻袋や毛皮がまとめられて置かれ、その上に毛布が被せてあり、まるで何かが寝ている様に形を整えられている。小さい方は毛皮が多く使われ、大きい方は頭の位置に麻袋に入れられた何かが潰れ、何か液体を染み出させている。その色は埃で汚れているだけで、赤黒くも無く、血液からは程遠い色をして、どこか果物の様な匂いが漂ってくる。

バタンッ

放心していた二人の男の背後から突然扉の閉まる音が聞こえてくる。ビクリと身を震わせ恐る恐る後ろに振り向く二人の男の目に、信じたく無い光景が飛び込んでくる。

「な、な・・・」

そこには完全武装のダスクと、獲物に飛び掛る直前の様に身体をたわめた黒炎の姿があった。ダスク達には全く怪我が無く、自分達が騙されたのだと、男達はようやく理解する。放心していた男達の顔には一転して怒りの感情が噴出し、悔しそうに奥歯をギリギリと音が鳴るくらい強く噛み締める。

「・・・何で分かった？俺達が襲ってくる事を」

油断無くダスク達の方を睨みながら、二人の男達は棍棒を持ち替えて手の空いた方の腕を背後へとまわす。怒りの顔から冷めた顔に変わった男達は、先程よりも迫力のある様子に変わった。

「さっき、この小屋を変な気配が探ってたんだよね。ボクはそういうのに敏感だから」

「ちっ、なるほどな。それで身替りを用意したってわけか、悪天候もこっちだけの味方じゃねぇな」

「それにしても、おっちゃん叩き過ぎだよ。ボクのオヤツが台無しだし」

うらめしそうな声で何かの染み出した麻袋を一瞥する黒炎の様子に、

客引きの男は床に唾を吐き出す。
「けっ、そんな事知るかっ！それより、何でお前ら完全武装になってるんだよ」
「簡単な話だよ、それも黒炎が、あんた達の様子が少し変だって教えてくれたんだ」
「てことは、お前は変だって思ってなかったんだろ、何で簡単に信じるんだよ」
「当たり前だろ、黒炎とは長い付き合いなんだ。僕は家族の言う事を信じる」
そう言って一歩前に踏み出したダスクの背中を、黒炎は嬉しそうに尻尾を振りながら紅い瞳で見る。
「家族、ね。それじゃあ脅しても渡しはしないだろうな」
「当然だろ、だから諦めて欲しい」
「聞けない話だな、おい、やるぞ」
客引きの男が合図すると、二人共に背後から腕を前に戻す。その手には大振りのナイフが握られており、二人の手付きはそれを使い慣れている様子が窺えた。頷き合った男達は、同時に前に出ようと足を踏み出す。しかし、それは果たされる事は無かった。
ドガッ
何かが視界一杯に広がったと思った次の瞬間には、二人の男達は背後へと吹き飛ばされていた。背中一面に感じる痛みに、自分達が吹き飛ばされて木箱の山に激突した事を理解する。しかし、何が起こったのかが分からなかった男達は、視線を上げて自分達が立っていた場所を見る。その場所には、いつの間に動いたのか、くすんだ黒色の全身鎧をランプの灯りに鈍く光らせ左腕の装備を身体の前に掲げたダスクの姿があった。
「ぐっ、てめぇ、何しやがった」
「武器で攻撃してきそうだったから、ちょっと下がってもらっただけですよ」
「二人まとめてそれで押しただけってのか、まさかそのなりでそん

な動きが出来るとはな」
「どうします？続けますか？」
隙を窺っていたもう一人の男が動こうとした瞬間、右手の装備で機先を制する。先端を向けられた男は身動き出来ない様子で悔しそうな顔になった。その光景を見て観念したのか、ナイフを下に向けた客引きの男は、憎憎しげな表情でダスクを見る。
「くっ、クソがっ！さっさと出て行きやがれっ！」
「ああそうだ、忘れてました。どうして僕達を狙ったんですか？」
「ちっ、人語を解する獣が珍しかったんだよ。金持ち連中に高く売れそうだったからな」
「なるほど、ありがとうございます」
視線を外さずに毛布を回収して後退したダスクは、合図をする様に黒炎に頷く。それを見た黒炎は、器用に扉を開けると雨の強くなってきた外に飛び出す。それを確認して再び視線を戻したダスクは、声に力を込めて男達へと伝える。
「追って来ても良いですが、今度は手加減しませんので」
その言葉を残して小屋を出ると、扉を閉めて黒炎の後を追いかける。ダスク達の姿は雨と闇夜に紛れてあっという間に見えなくなった。
フゥ
図らずも同時に溜息を漏らした二人の男達は、立ち上がって身体を動かし、異常が無さそうだと分かって顔を見合わせる。
「どうするよ？」
「コケにされたんだ、ぶち殺さないと気が済まねぇ」
「想像以上に手強いぞ、何か手があるのか？」
「くくっ、同業者やゴロツキ連中、全てに声をかけろ。追い込んでやる」
「分かった、連絡を回す」
「頼んだぜ、俺はあいつらを追いかける」
「せいぜい死ぬなよ」
そう言って、カウンター内に居た男は先に小屋から出ていく。それ

を追う様に、客引きの男は走り出す。その顔には狩りを楽しむ様な残忍な表情が表れていた。

ピーーーー

深夜の雨の町を、雨風の音を切り裂くように呼子の笛の音が鳴り響く。それと同時に大勢の人間の気配が集まりだす。それは、ダスクが黒炎に追い付き、しばらく走ってから始まった。水溜りの雨水を跳ね飛ばしながら走り回る人影を避ける様に、ダスク達は物陰に隠れる。

「失敗したね、あの二人の事縛っておけば良かった」

「そうだね、あれで諦めてくれると思っていたんだけどな」

「これからどうしようか？」

「ここまで大掛かりになると、町を出ないと駄目だろうな」

「やっぱりそうなるか、はぁ、最初の町がこんな事になるなんて」

「しょうがないよ、僕達の無知が原因でもあるんだから」

意気消沈した様に肩を落とすダスク達は、しばらくそのままの格好で暗闇の中で動かず、影の様な建物に同化しているかのようであった。

「さて、そろそろ行こうか」

「それがいいね、いつまでも落ち込んでいる場合じゃない」

「また次の町に期待しようよ」

「何も知らなかった僕達への手痛い洗礼だと思えば良い」

「うん、ボク達にとっては勉強になったかな」

「行こう」

頷き合ったダスク達は、周囲の気配を探り、とりあえずの安全を確認して走り出す。建物の隙間を渡りながら目指すのは、街道の先へと進む西門のある方向ではあったが、地の利が無い為、ひとまずは町を囲む塀に突き当たる様に端に向けてまっすぐ進んでいた。追っ手は中央通りと東西の門を重点的に見張っているらしく、塀を目指して入り組んだ区画へと突入したダスク達は結果的には見付かる確率が減っていた。土地勘の無い事が逆に有利に働いたようである。

そのまま走り続けたダスク達は、目の前に黒い壁が見えてきたのに気が付く。一気に壁際へと近付くと、近くの建物の影に飛び込む。緊張感からか、ダスク達の息は荒くなっており、白く染まった二つの塊が空中にかすんで消える。

「やっと着いたね、ボク疲れちゃったよ」

「うん、逃げているってのが悪いのかな、僕もいつもより疲れやすいみたいだ」

「どうする？」

「追っ手の気配が遠いって事は、中央通りとか門は見張られているだろうね」

「だろうね、やっぱりこれしかないか」

そう言いながら、黒炎は塀を見上げる。それに釣られるようにダスクも塀を見上げ、その高さに溜息をつく。

「近くで見ると更に高く感じるな。僕には足場が必要かな。黒炎は僕の肩を使えば行けるでしょ」

「そうだね。はぁ、まさか本当にこれを越える事になるとは思わなかったよ」

「ははは、言霊（ことだま）なのかもね。・・・さあ、行こうか」

その言葉と共に塀の前に立つダスクに頷いて、黒炎は走り出す。軽い足取りで跳び上がると、ダスクの肩を踏み台にしてジャンプする。高く舞い上がった身体は、フワリと音を立てずに塀の上に降り立った。

「追っ手の姿はあるかい？」

「居ないよ、後ろにも、壁の向こう側にも動く影は見えない」

「分かった、先に降りてて」

頷いた黒炎が塀の向こう側へと消えるのを見送ったダスクは、近くの頑丈そうな木箱をいくつか積み上げる。高さが足りないんじゃないかと思える状態であったが、少し助走をとったダスクは重さに反して音を立てずに軽々と塀の上に立つ。塀の向こう側を見下ろすと少し離れた場所に紅く輝く瞳が見えた。黒炎の位置から地面までの

距離を測ったダスクは、さっきよりも高さが有るので今度は慎重に塀から飛び降りる。

ドンッ

雨でぬかるんだ地面であったが、鎧の重さからか足は地面にめり込み、思っていた以上の音が鳴る。そのままの格好で辺りの様子を窺っているダスクの姿に、軽い足取りの黒炎が傍らに寄った。

「ダイジョブ、音に気が付いた気配はないみたいだよ」

「そっか、まだまだ鍛え方が足りないな」

「う～ん、今でも充分鍛えられてると思うけどな～」

「まだまだだよ、父さんと比べたら雲泥の差だから」

「父ちゃんか・・・あれはスゴかったよね」

「うん、僕の目標だからね・・・とりあえず町から離れよう」

「そうだね、町の外まで追いかけられたらメンドくさい」

頷き合ってダスク達は町から離れていく。町の方向を見ると、西門の場所には守衛が用意した篝火が辺りを照らしている。おそらくこの時間帯には守衛を無視して門から出る事は出来ないようである。安心したダスク達は、門の位置から街道のある場所の見当をつけて西の森へと入る。馬鹿正直に街道の通っている門へと向かえば姿を見られてしまうからだ。森に入ってしばらく歩いているうちに緊張感が薄れていたのだろう、ダスク達はそれに全く気が付かなかった。

ドカッ

後ろに注意していたダスクの少し前を歩いていた黒炎が、突然真横に吹っ飛ばされる。声も無く横たわる黒炎の姿に呆然となりながら、その原因となったモノへと視線を向ける。いつの間に先へと回り込まれていたのか、ニヤニヤした顔でダスクを見るのは、客引きの男であった。

「落し前をつけさせてもらいに来たぜ。あぁ、安心しな、殺してはいない、商品だからな」

黙ったまま黒炎へ視線を向けたダスクは、その身体が呼吸に合わせて上下しているのを確認して安心する。その様子を楽しそうな顔で

見ながら、客引きの男は右手の長剣をダスクへと向ける。
「まあ、お前には死んでもらうから、関係ないだろうけどな」
「そうか」
低い声でそれだけ言うと、ダスクは両手の装備を構える。それに反応して長剣を上段に構えた客引きの男は、緊張感のある顔であったが、未だに口に笑みを浮かべている。今迄長剣を使って逃した獲物は居なかったからだ。目の前の獲物の大きさは、油断さえしなければ小屋の時みたいに見失う事は無いだろうと、客引きの男は考えていた。
「こいよっ、黒豚っ！」
自分を奮い立たせる様にダスクへと罵声を飛ばした客引きの男の目には、向かってくるダスクの姿がハッキリと見えている。油断をしなければ大丈夫だと確信したかのようにニヤリと笑った。一直線に走り寄るダスクの様子に、がら空きの兜に一撃してふらつかせたところで止めを刺そうと決める。左手に持っていた棍棒を振り上げると、カウンター気味に兜へ叩きつけた。
ガッ
痺れる様な感触を残して棍棒が砕け散る。立ち止まったダスクの姿を見て、笑みを深めた客引きの男は止めを刺す為に長剣を構えた。
ギンッ、ドガッ
次の瞬間、金属同士のぶつかる様な音と、金属と肉体のぶつかる鈍い音が響く。客引きの男は吹き飛びながら、どうして自分が飛んでいるのか理解できなかった。数メートルも吹き飛んだ後、やっと止まった客引きの男が目を上げると、近くの地面に何かが落ちてきて刺さるのを目にする。それが自分の持っていた長剣の刀身である事に気付いて呆然となった。
あの一瞬に何が起きたかといえば、ダスクが右腕の装備を目にも留まらない速さで水平に振り抜いて長剣を叩き折り、無防備な客引きの男の眼前に踏み込んで胸部に左手の装備を叩きつけただけの単純な事である。ただそれが非凡であったのは、それらが一瞬の間に

連動して行われた事であり、踏み込んだ場所の地面には足のめり込んだ跡が十センチ以上の深さの穴を開けていた。
　信じられない光景に動けずにいた客引きの男の耳に、ぬかるみを歩く音が聞こえて来た。視線を向けると、ダスクの黒い姿がゆっくりと近付いてくるのが見える。慌てて下がろうとするが、胸の骨が折れているらしく、激痛が走って起き上がる事も出来なかった。
「ひぃ、た、助けてくれっ、俺が悪かった」
その言葉が聞こえていない風に近付いてくるダスクの姿は、客引きの男の目には黒い死神の様に映っていた。うつ伏せになって這いずる様に下がっていく客引きの男の側に来たダスクは、無言のまま全身の体重をかける様に上から圧し掛かる。
「うがっ、潰れる、潰れちまうよっ、ぐぅ、死ぬっ・・・」
想像以上に重いダスクの鎧と装備は、客引きの男をぬかるみに数センチも沈め、更に折れていた骨を砕いていく。何も言えなくなった客引きの男の耳元に兜を近づけたダスクは、低い声で言葉を伝える。
「僕の家族に手を出したお前には手加減するつもりが無くなった、後悔しろ」
それは、再び相見(あいまみ)えても手加減するつもりであった事を伝えていた。
涙でぐちゃぐちゃになった顔で何かを言いたげに口をパクパクさせる客引きの男であったが、胸を潰されて肺から空気を押し出されてしまった状態では声にもならなかった。そのまま客引きの男が死んでしまうまで続くと思われた拷問の様な時間は、後ろから聞こえて来た声で終わる。
「ボクは大丈夫だから、その辺にしときなよ。おっちゃん死んじゃうよ」
ハッとした様子で立ち上がったダスクは後ろに振り返る。そこには心配そうな様子でダスクを見詰める黒炎の姿があった。吹き飛ばされて泥に汚れていたが、怪我をしている素振りも無く、軽い足取りでダスクの傍らへと歩いてくる。
「あ、僕、なんて事を・・・」

呆然とした様子で肩を落とすダスクの様子に、慰めるように脚に前足を置く。

「今回は運が悪かったんだよ。おっちゃんもやり過ぎたし、キミも手加減出来なかった」

「それでいいのかな？もう少しで僕は人殺しになるところだった」

「いいんだよ、ボクが許す。個人的にはボクの為に怒ってくれて嬉しかったし」

嬉しそうに尻尾を振る黒炎の仕草を見て、落ち着く為にダスクは深呼吸を何度かする。その様子に安心した黒炎は改めてダスクへと視線を向ける。

「それでも急がないと人殺しになっちゃうよ、キミは」

「そうだね、急いで町に運んで守衛さんに渡さないと」

ハッとして、ダスクは客引きの男に近寄り怪我の程度を確認すると、気を失っていたが適切な処置をすれば命に関わる状態で無いと分かった。少しだけ安心した様子で息を吐くと、黒炎に向かって頷いてから客引きの男を背負う。怪我に響かない程度に加減して走りながら、ダスクは自分が怒りに我を忘れた時の加減の無さを嘆いていた。

あっという間に町の西門に辿り着いたダスク達は、守衛へと客引きの男を渡す。事情聴取をしてくる守衛には、道の途中で拾ったと伝え、急いでいるという理由でその場を逃げる様に後にした。嘘を吐くのは心苦しかったが、町に戻ると色々面倒な状況になると考えたからであった。町から離れるように、しばらくの間走り続けたダスク達は、頃合をみて休憩の為に杉の大木の下へと逃げ込む。雨でずぶ濡れになったダスク達は、体温も奪われて余計に体力を奪われていたからだ。白く漂う荒い呼吸を収めるように深呼吸を続け、ある程度呼吸が落ち着いたところで背嚢の中から乾いた手拭いを二枚出す。防水加工をした自作の背嚢であったが、その能力を余す事無く発揮して、少しも雨が染み込んでいなかった。一枚目で黒炎の身体を拭った後、装備を全て外したダスクはまずはそれで装備から水分を拭う。それから服を脱ぎ二枚目の手拭いで全身を拭ってから着

替えをして、最後に装備を付け直した。乾いた薪も無い状態では焚き火で暖まる事も出来ず、身を寄せ合いながらダスク達は雨が止むのを待つ事にした。

なかなか雨は止まず、それどころかますます激しくなる。そのまま少なくない時間が経ったところで、物語は冒頭の状況になる。

ザザザザッ

草むらを突き抜けながら走るダスク達は、激しい雨で見通しの悪くなった森の中を奥へと進んでいく。しばらく走っていてもなかなか良さそうな場所が見付からない。足は止めないが、諦めかけた心にくじけそうになった瞬間、稲光が光り、ダスクの右手にある岩山の斜面にある洞穴が目に飛び込んでくる。

「あっち、洞穴があった、ついて来て！」

それだけ言って、急角度に曲がると、ダスクは先導する様に洞穴の見えた場所へと向かう。見間違いだったら、という不安にかられそうになったところで洞穴の黒々とした入口が見えてきた。走るスピードを上げたダスク達は、その勢いのまま飛び込んでいく。

「やった、ここなら大丈夫そうだね」

「うん、ついてない事ばっかりだったけど、僕達にも少しは運が向いてきたかな」

ダスクは笑顔になり、黒炎も嬉しそうに尻尾を振る。やっと一息つけた様子で息を吐き出した瞬間、ダスク達の背後、洞穴の奥から物音が聞こえてきた。

カランッ

誰かがうっかり足で蹴り飛ばしてしまった、という感じで小石が転がってダスク達の目の前に落ちてくる。

「誰だっ！」

誰何（すいか）の声を上げたダスクの硬い声に、本当に何者かが居たらしく、息を呑む様な音が聞こえてきた。ダスクと黒炎の向ける厳しい視線

に観念したらしく、洞穴の奥から近付いてくる足音が聞こえてくる。その音は軽く、恐れを感じる心細さの様な物が感じられた。

洞穴の奥から近付いてくるのは何者か？悪い事が続いた為、ダスク達は厳しい顔で油断無く身構える。激しくなる雨風に包まれた森は暗い未来を暗示しているかのようで、洞穴の奥を睨む顔にはうんざりとした表情があった。果たして新たな登場人物はダスク達に幸と不幸、どちらをもたらすのだろうか。

無知と出会い（前編）（後書き）

楽しんで頂けたでしょうか。続きも早く読んで貰える様に頑張ります。

無知と出会い（後編）（前書き）

前話と同じペースで投稿できました。次回も続けられるように頑張ります。

無知と出会い（後編）

ザッ、ザッ、ザッ

ゆっくりとしたペースの軽い足音で洞穴の奥から何者かが近付いてくる。警戒した様子で音の聞こえて来る方向を見るのは、くすんだ黒い鎧を装備して両手に巨大な装備を持ったダスクと、ピンと立った三角の耳と狐の様に大きな尻尾を持つ艶やかな黒い毛皮の獣でルビーの様に紅く輝く瞳が特徴的な黒炎である。黒炎は雨で毛が濡れて身体に張り付き、毛の先からはポタポタと雫が滴っている。暗い洞穴の入口から入ってくるかすかな稲光に照らされた地面の上に、洞穴の奥から出てきた何者かの足の先が見えてくる。予想に反して小柄な足の持ち主は、そのままダスク達の目の前まで歩いて止まると、上に被っていた外套（がいとう）を外す。驚いた事に、現れた人物はダスクと同年代の少女であった。驚きで固まっているダスク達の様子を勘違いしたのか、現れた少女は諦めた様子でその場にしゃがみ込む。

「はぁ、よりにもよって今日が最悪の日になるなんて・・・」

無言のまま自分を見るダスク達に何を思ったか、手に持っていた荷物と小振りのナイフを目の前に置く。

「無駄だと思うけど、持ち物はこれだけです。見逃してもらえませんか？」

そんな事を言い出した。どんな状況になっているのか、この時点でやっと理解したダスクは慌てた様に両手の装備を放り出し、手と一緒に首も振る。危うく装備に潰されそうになった黒炎は、その場を飛び退いて文句を言いかけたが、思い直して口を閉じる。

「ち、違います。僕達は雨宿りに寄っただけで、そんなつもりは全然ありません」

うろたえるダスクの様子を疑わしげな表情で見ながら、少女は置いた持ち物を回収して立ち上がる。

「本当かしら？油断させといてズバッとやるんじゃないの？」

「そんな事しないよっ！はぁ、ホントについてない事ばっかりだ・・・」

ガックリと肩を落としたダスクは、脅かさないように装備を拾って隅に置くと、兜を脱いで顔を見せる。ボサボサの黒髪から覗く黒い瞳は優しそうな性格が現れていて、それを見る少女にもどこか安心させるモノを感じさせた。

「ふ～ん、そんな顔してたんだ。私と同じ位の年齢だったのね」

「こんな顔で悪かったね。まあ誤解だと分かってくれたみたいで良かった」

「まだ分からないわよ」

「そんなぁ」

困った顔をしたダスクの様子が面白かったのだろう、笑顔になって手を軽く振る。

「ウソウソ、私にも人を見る目くらいはあるわ」

「勘弁してよ・・・」

誤解が解けたらしい少女の様子に安心したダスクは、荷物の中に燃やせる物が無いか漁り始める。使えそうな物は、鍛冶にも使う炭くらいであった。予備のつもりで持っていた物なので濡れた身体を暖めるだけの焚き火にするには量が圧倒的に足りなかった。困ったダスクは、洞穴の内部に燃やせる物が落ちていないか探し始める。それを見ていた黒炎も、心得たようにダスクを手伝う。

「何やってるの？」

「ん？濡れた身体を暖めたくて、焚き火に使えそうな物が無いか探してるんだよ」

「そうなんだ、だったらこれを使うといいよ」

少女が荷物の中から出してきたのは乾燥した苔の塊だった。受け取ったダスクは、ひっくり返したりして確かめると少女の方へ視線を向ける。

「この苔、燃えやすそうだけどすぐに燃え尽きちゃうんじゃないの？」

「大丈夫よ。この辺りでは薪の代わりに使ってるし、火もゆっくりまわるから長持ちするの」
「へぇ～、便利な物もあるんだな」
そう言ったダスクは、苔と炭を組み合わせて焚き火を熾す。空気は湿っていたが、苔は火が点き易く、あっという間に炭も赤くなる。洞穴の内部の空気が暖められ始め、ダスク達はやっと安堵の息を吐いた。
「ちょっと着替えたりしたいから奥に行くけど、焚き火の面倒よろしくね」
「いいわよ。なんだったらここで着替える？」
笑顔でそんな事を言う少女の顔を眺めながら、見た目は大人しそうなのに性格は違うんだな、と思いつつ溜息を吐くダスクであった。
荷物を持って洞穴の奥に向かったダスク達は、焚き火の光がかろうじて見える場所で立ち止まる。背嚢から手拭いを二枚出したダスクは、一枚目で黒炎の身体を拭きながら小さい声で会話をする。
「あの娘が居るから喋らなかったんだよね？」
「うん、失敗したばかりだったからね。ちょっと用心しておこうかなって」
「なんとなく大丈夫そうな気がするけど、黒炎はどう思った？」
「まあ、嫌な気配は感じないからイイヒトかもね」
「戻ったら自己紹介でもしとこうか」
「そうだね。ボクも黙ったままなのはイヤだし」
黒炎を拭き終わったダスクは、装備を全て外した後にそれらを一枚目の手拭いで拭う。それが済んでから服を脱ぐと、二枚目の手拭いで身体を拭いてから乾いた服に着替える。手拭いを搾り、兜を除いて装備を付けると、少女の居る場所へと戻った。立て掛けた装備等に濡れていた服や手拭いを少しでも乾くようにと、掛けて干す。冷えた身体を暖める為に、焚き火の傍にダスク達は座った。少女の方を見ると、火にヤカンをかけてお湯を沸かしている。お茶でも飲むのだろう、と思って少女から視線を外したダスクは、黒炎の乾いて

きた毛皮を撫でる。黒炎は気持ち良さそうな様子で丸くなっていた。
「ねぇ、お茶淹れたから飲みなさいよ。暖まるわよ」
差し出してきたカップを見て、自分の背嚢からカップと黒炎用の皿を出す。
「ありがとう、君も飲んだ方が良いよ。僕と黒炎の分はこっちにお願い」
「カップが一つだったからどうしようかと思ってたの。自前のがあるなら丁度いいわ」
改めてダスク達の器にお茶を注ぐ少女の様子は、何も企んでいないと思える自然さだった。熱いお茶に舌鼓を打つ黒炎に、最初は驚いていた少女だったが、すぐに楽しそうに追加を注いでいたりした。
「これって何ていうお茶なんだい？美味しいし、香りも良いね」
「ふふっ、これは私のオリジナルなのよ。薬草学を勉強してるから詳しくなっちゃって」
「へ～、君（きみ）って偉いんだね。どうにも僕は勉強が苦手なんだよ」
「ふふっ、貴方（あなた）は見た目通りなのね」
「どういう意味だよ・・・」
不貞腐れた様子になったダスクを見ながら楽しそうに笑っていた少女は、ふと真面目な顔になってダスクを見る。
「あのさぁ、君とか貴方とかってのやめない？」
「ん？どういう事？」
「貴方って良い人っぽいし、自己紹介して名前で呼んでもいいかなって」
「ああ、さっき僕達もそう思ったんだよ。ちょうど良かった」
姿勢を正して向き合うダスクと少女、黒炎も首を上げて自己紹介に参加するつもりのようであった。
「まずは言い出した私からいくね。私の名前はフローラル・グリーン。
フローラルって呼んでも良いけど、友達は皆、ローラって呼ぶわ」
「よろしく、ローラ。僕はダスク・ウォール。ダスクって呼んでく

れれば良い」
「ボクは黒炎だよ。よろしくね、ローラ」
「よろしく・・・えぇっ！今話したのは誰？もしかして貴方なの？」
順番に自己紹介していった流れに乗って、ちゃっかり加わった黒炎の言葉に驚いたフローラルは、目を見開いて黒炎の紅い瞳を見る。
驚いても恐怖等の負の感情は出なかったらしく、珍しいものを見た時の反応でマジマジと黒炎を見ているようだった。その様子に安堵したダスクは、笑顔で黒炎達のやりとりを眺めている。
「言葉を喋る動物って初めて見たわ。ちょっと撫でてもいいかしら？」
「いいよ。そろそろ乾いた頃だし、毛並みはボクの自慢だからね」
「ありがとう」
恐る恐る手を伸ばして黒炎の頭に手を乗せたフローラルは、感触を確かめる様にゆっくりと撫でる。すぐに毛の感触を気に入ったらしく、頭から背中にかけての広い範囲を撫で始めた。
「すごく滑らかで気持ちの良い感触だわ。黒炎君の言った通りね」
「ふふん、そうでしょ。それと、君（くん）は要らないよ。呼び捨てでいいからね」
「分かったわ、黒炎。私とお友達になってね」
「もう友達だと思ってるよ。ダスクも同じだと思う」
その言葉に嬉しそうな顔になったフローラルは、ダスクの顔へ視線を向けて確かめる様に見詰める。
「うん。僕もローラの事を友達だと思ってる。僕達、君の事をローラって呼んでるだろ？」
「ありがとう。改めてよろしくね、ダスクに黒炎」
「「よろしく、ローラ」」
握手をしながら改めてフローラルの方を見る。フローラルは、明るい栗色のロングヘアーを一つに縛って無造作に背中に流し、明るい翠（みどり）の瞳が魅力的な可愛いというよりは美しい顔立ちをした女の子で、背はダスクより頭一つ分低く小柄で少し控えめな体型をしている。

服装はこの地方ではポピュラーな素朴なデザインの服を着ており、最初に会った時の上から被っていた外套は、今は彼女の傍らに置いてあった。

「そういえば、ダスク達はこんな場所で何をしていたの？」

「う、言わないと駄目かな？」

「私達って友達だよね」

「あはは、キミの負けだね、ダスク」

「はぁ、聞いても面白くないと思うよ」

「それを判断するのは私よ」

どうやっても引きそうにないフローラルの様子に、ダスクは溜息を吐くと、少し前まで居た町で起きた事を語って聞かせた。他人が聞いても面白くないし、呆れるだろうと思っていたダスクは、フローラルが怒った様な顔になっているのを見て驚いた。

「許せない。何も知らない人間を騙して金品や命を奪おうとするなんて」

その言葉に、ダスクは少し救われた様な気がした。黒炎も嬉しそうに尻尾を振っている。嫌な事だけで一日が終わっていたら、これから先の旅も先行きが不安だけになってしまっただろう。この出会いは忘れられないモノとなる、ダスクと黒炎はそんな予感がした。

「それで、ローラもこんな場所で何を？」

「私は薬草の採取に来たの。さっきの苔もついでに拾ってきたのよ」

「それにしても、こんな時間にどうしてここに居たんだい？」

「夜中から早朝に採取しないといけない薬草もあったら。でも途中で雨が降ってきちゃて」

「なるほど。それじゃあ近所に住んでるんだね」

「ええ、私の村はここから少し南に行った所に有る、フラウガーデンよ。薬草が有名なの」

「フラウガーデンか。僕達の村は知らないだろうけど、ノースアタロスって名前」

「聞いた事あるような・・・ずっと北にある村よね」

「うん、スゴク遠いよ。山奥のド田舎だから雪くらいしかない。あと猛獣かな」
「ふふっ、一度くらい見てみたいかも」
「機会があったらね」
会話を続けていくうちに、眠くなってきたのだろう。口に手を当て欠伸をするフローラルの様子を見て、ダスクは声を掛ける。
「眠っても良いよ、僕が周りを見てるから。黒炎に抱きついていれば暖かいから眠れると思う」
「いいの？お言葉に甘えさせてもらおうかしら。さすがに眠くなってきたから」
「僕は慣れてるから大丈夫」
「ありがとう。ふふっ、私か可愛いからって襲っちゃダメよ」
「ったく、しないっての」
悪戯っぽい表情で言うフローラルの言葉でダスクは仏頂面になる。その顔を見たフローラルは更に楽しそうに笑った。話題に出ていた黒炎は、既に会話の途中で丸くなって熟睡していた。
「それじゃあ、おやすみなさい。わぁ、黒炎ってば暖かい」
抱きついたフローラルの感触に、少し不機嫌そうに動いた黒炎であったが、すぐに何も無かったかのように動かなくなる。しばらく笑顔で艶やかな黒い毛に頬擦りしていたフローラルだったが、疲れていたようで、すぐに眠りに落ちる。その様子を笑顔で見ていたダスクは、フローラルに毛布をかけてから視線を焚き火に向ける。洞穴の外から聞こえる雨風の音と薪の爆ぜる音を聞きながら一連の出来事を思い返す。町での出来事は苦い気分にさせるが、一番心に痛みを感じるのは我を忘れて主犯の男を半殺しにしてしまった事だった。自分の未熟さを実感したダスクは、身体と共に精神も鍛えていかないと本当に強い人間にはなれないのだと痛感させられた。

ピチョン

ウトウトしていたダスクの首筋に洞穴の天井から落ちてきた水滴が

ぶつかる。その冷たさにビクリとして顔を上げ、辺りを見回すと黒炎とフローラルが眠っているのが見えた。焚き火はだいぶ小さくなっていたが、かろうじて身体を暖めてくれていたようだ。洞穴の外からは早朝の弱い陽の光が入ってきていて、激動の夜が明けたのが分かる。音を立てない様に立ち上がったダスクは、静かに洞穴から外に出る。雨風はすっかり収まり、冬の冷たくピリッとした空気が呼吸と共に胸に満ちて、眠気を吹き飛ばした。

「おはよ～」

凝り固まった身体を解すように動かしていたダスクの背後から、機嫌の良さそうな黒炎の声が聞こえて来る。伸ばしていた腕を降ろして後ろを振り返った。

「おはよう。良く眠れた？」

「うん。ローラが居たから暖かかったし、薬草の匂いのせいか気持ち良く眠れたよ」

「なるほど。そういえば毛布はちゃんとかかってたかい？」

「ダイジョブ、来る時直してきたよ」

「そっか」

頷いて再び身体を動かし柔軟を始めたダスクを見て、黒炎も身体を解し始める。弓なりに反らされた背とピンと伸ばされた四肢は見ている者に、とても気持ち良さそうな印象を与える。

「これからどうしようか？」

「町に寄るかどうかかい？それは話し合う事じゃないと思うけど」

「確かに全く町に寄らずに進むのは不可能だからね」

「大丈夫だよ。ボク達が気を付ければなんとかなるよ」

「うん。街道の通る町に全部寄る必要もないし、問題ないか」

「なにが、ふわぁ、問題ないのかしらぁ？」

予想していなかった人物の声が突然割り込んできたので、ダスク達は背後の洞穴の方へ慌てて振り返る。そこには毛布を肩に掛け、眠そうな顔の口元に手を当てて欠伸をするフローラルの姿があった。寝起きが悪いらしく、ボサボサの髪と半分閉じた目でフラフラして

いる。キチンと起きている時とのギャップが感じられて、思わず笑顔になるダスク達であった。
「おはよう、良く眠れたようだね」
「うん。黒炎が暖(あった)かくて気持ち良く眠れたわ」
「それはよかった。ボクも枕になったかいがあるってモンだよ」
「それで、何が問題ないのかしら」
早朝の冷えた空気と、ダスク達との会話でフローラは完全に目が覚めたらしく、先程の言葉を重ねて言う。ダスクと黒炎はどうしようかと顔を見合わせて数瞬視線で会話をしている様に見えた後、同じ考えであったらしく頷き合う。
「昨日の事があるから、できるだけ町に寄らないで行こうかなって話してたんだ」
「ボク達、なんでか分からないけど目立つみたいなんだよね」
「うん。僕の他にも似たような武装をしている旅人が居るってのにな。
黒炎だって羽とかが生えてるわけじゃないし」
「ぷっ、あははは」
突然笑い出したフローラに呆気に取られた様子になったダスク達は、すぐに不機嫌そうな顔になる。
「なんだよローラ、笑うなんて酷いじゃないか」
「ごめん、ごめん。なんか知らないのは本人達だけっていうのが・・・。
ごめんなさい、何でもないの」
不思議そうな顔で自分を見るダスク達に、軽く頭を下げて謝るフローラの顔には優しそうな微笑が浮かんでいた。
「それなら馬車とかに乗って行けばいいんじゃない？せっかくの町なんだから楽しまないと」
「う～ん、それはそうなんだけど・・・ちょっとこっちに来てくれるかい」
少し困った感じの顔になったダスクは、フローラを促して洞穴に

戻る。昨日外しておいた装備の近くに歩み寄ると、何か考えてから兜を持って焚き火の近くに座る。フローラルが近くに座ったのを確認したダスクは、その傍らに兜を置いた。

「ちょっと持ってみて。あ、見た目以上に重いから気を付けないと筋(すじ)を痛めるかも」

「大げさじゃない？こう見えても私、力は強いのよ」

笑顔のままウインクしたフローラルは地面の兜に軽く手を添える。息を大きく吸って止めると、えいっという風に力を込めて持ち上げようとする。顔を真っ赤にして力を込めるフローラルではあったが、兜はピクリとも動かなかった。

「うむむ、あれ？ちょっと待ってね。うぅ～ぐぐぐ、駄目、持ち上がらないわ」

信じられないという顔になったフローラルは、重い手ごたえだった手とダスクの顔を交互に見る。その様子に笑顔になったダスクは、兜を軽々と持つと他の装備の傍らに置く。

「僕の装備は全部同じ素材で出来てる。

だからちょっと重いんだよね、普通の馬車が壊れたり、不具合が生じたりするくらいは」

「重そうに見えていたけど、まさかこんなに重いとは思わなかったわ」

「そうだろうね。ボクだって知らなかったら同じ事を思うよ」

いつの間にか焚き火の側で丸くなって見ていた黒炎が会話に入ってくる。その様子を横目に、フローラルは何事かを考えているようである。邪魔をしないように黒炎に目で合図したダスクは、燃料を足し焚き火の火を大きくして湯を沸かす為にヤカンをかける。背嚢から携帯食料を出して簡単な朝食を用意していたところでフローラルは顔を上げてダスク達を見る。

「そうだ、船がいいかも。途中の町は長居出来ないままだけど、船に乗れば長い距離を進めるわ」

そう言うフローラルに、朝食を手渡し、彼女のカップにお茶を淹れ

る。ありがとう、と言いながら朝食を食べるフローラルの様子を見ながら少し考えていたダスクは彼女に視線を向ける。
「なるほど、大きめの船なら乗っても大丈夫そうだ。黒炎はどう思う？」
「そうだね、良いアイデアかも。それに船にも乗ってみたいし」
「そういえば船には乗った事が無いや。移動手段であるけれど、それはそれで楽しみだな」
嬉しそうに話すダスク達をフローラルは満足そうな顔で見る。
「ここから街道沿いに西に進んで1～2週間で港町に着くと思う。それまでは町には食事や必要な物を買う時くらいに寄れば大丈夫じゃないかしら」
「そうだね、そうしよう。ありがとう、ローラ」
「ローラ、ありがと～」
「お礼なんていいわよ。友達が困っていたら助けるのは当然でしょ。いつも私はそう思ってるの」
照れた様子で少し頬を赤くしたフローラルは、ダスク達の感謝の視線から逃れるようにカップに視線を落として食事に戻る。それを見た黒炎は楽しそうに尻尾を振りながらダスクに視線を向ける。
「ローラったら照れちゃって、可愛いトコもあるんだね～」
「そうだな。強気な性格だと思っていたけど、照れる事もあるらしい」
「なによ、もぅ！私だって人並みに照れたりするわよっ」
拗ねた顔でソッポを向いたフローラルを見て、ダスク達は笑顔になる。いつまでも笑っているダスク達の様子に、諦めた様に溜息を吐いたフローラルは苦笑いになる。そこからは朝食を摂りながら適当な話題を交わし、皆が笑顔で朝のひと時を過ごした。
朝食も済み、お茶を飲んで一服した一同は、ゆっくりとした動作で出発の準備を始める。太陽も完全に山の稜線から顔を出したので、陽が出ているうちに長時間の移動をするには早めに出発する必要があるからだ。兜以外の鎧を装備したダスクは手際良く焚き火の跡を

片付け、黒炎達に洞穴の外に出るように促してから荷物を持つと、忘れ物が無いか確認してから最後に洞穴を出た。

「とりあえず森を出る所までは一緒に行こうか」

黒炎達から反対の意見が出なかったので、ダスクは一つ頷いてから最初に歩き出す。遅れて歩き出したフローラルは、小走りになって黒炎を挟んで横に並ぶ。朝の森は雨上がりで濃い緑の葉も青々として目に優しく、空気も新鮮で冷たいので呼吸をする度にリフレッシュする様で、地面がぬかるんでいなければ最高の散歩場所になりそうであった。実際、黒炎は足が濡れるのを嫌がって可能な限りぬかるみを避けていた。しばらく歩くと視線の先に木々の途切れている場所が見えてくる。やっと森から出られると、ダスク達は早足になって出口に向かった。

森から出た所は一面牧草地らしく、刈った牧草の跡が広がっている。今が冬ではなければ目にも眩しい緑の絨毯が見られたのだろうと、少し残念に思うダスクであった。街道は北の方角にあるらしく、遠くに人や荷車の姿がちらほらと見える。南の方角、それ程険しくない山の麓（ふもと）には小さく建物の集まっている場所が見える。恐らくはあそこがフローラルの住んでいる村、フラウガーデンなのだろう。ダスクの視線に気が付いたフローラルは、自分も同じ方向に視線を向ける。

「そうよ。あそこが私の村、フラウガーデン。小さいでしょ」

「小さいけど、ノースアタロスよりは大きいよ」

「だね、ウチの村はド田舎だから」

そう言う黒炎に少し非難する様な目を向けるダスクであったが、諦めた様に溜息を吐いた。その様子を楽しそうに見ていたフローラルであったが、表情を真剣な物に変えるとダスク達の前に回って顔を向ける。

「それじゃあここでお別れかな」

その言葉に、ダスク達も表情を改めるとフローラルと視線を合わせる。

「そうだね。残念だけどここでお別れだ」
「ちょっと寂しいな。ボク達の事忘れないでね」
「忘れないわ、友達だもの。ダスクと黒炎の方が忘れちゃうんじゃない？」
「忘れられないよ。
悪い事だけで終わりそうな1日が、ローラのおかげで良い日だったと思えるんだから」
「うんうん、ボクもローラに会えて良かった」
「ありがとう。私も貴方達に会えて良かったわ」
表情を笑顔に変えて籠手を外したダスクは握手の手を差し出す。それを見たフローラルも笑顔になってダスクの手を軽く握った。握手をした手が不意に重くなったのを感じたダスクとフローラルがそちらへと視線を向けると、黒炎が前足を伸ばして握手の上に乗せているのが見えた。
「ボクを忘れたら困るよ」
ダスクと黒炎とフローラルは顔を見合わせて楽しそうな顔になって笑い合う。笑いが一段落したところで手を離したダスク達は改めて視線を合わせる。その表情は別れの場であったが笑顔のままだった。
「またいつかどこかで会いましょう。だから『さよなら』は言わないわ」
「うん。また会えるのを信じてるよ」
「またね、ローラ」
ダスクと黒炎は手を振りながらその場でフローラルを見送る。フローラルも手を振りながら村へと向かい、何度も何度も振り返りながら歩いていく。お互いの顔が判別できなくなる位離れたところで、ダスクは兜と籠手を付けてから黒炎を促すと、背を向け街道へと歩き出した。

それからの道中はフローラルの考えてくれた案の通り、町に寄りながら出来るだけ目立たない様にして進んで行った。宿に泊まるの

が何となく嫌だったダスク達は、やり慣れた野宿をしながら進む。
幸い、最初の町を除いてトラブルに巻き込まれる事も無く、それぞれの町で美味しい物や名物等を楽しみながら旅をする事が出来た。
進むにつれて気候も故郷の村と比べると暖かくなってきていたので問題も無く、天候も大きく崩れる事が無かったので快適に過ごせた。
そんな旅を続けること、２週間、目的の港町が見えてくる。その町は今迄の町と比較すると数倍の規模があり、町と言うよりは街と言った方が良い大きさだった。街を囲む塀と言うよりは石垣は高く、とてもじゃないが飛び越える事は出来そうも無い。門前に居る守衛も数が多く、手分けして街に入る人々の身分証明書を確認している。
守衛の数が多いのは、守りを固めるというよりは街に入る人の数が多いからかもしれない。今迄見てきた町とは比較にならない位の人数が出入りしているのが見えた。
「すごいヒトだね・・・絶対踏み潰されちゃうよ」
歩きながら目の前の人々を見ていた黒炎が困った様に言う。ダスクも同じ様な事を考えていたのだろう、頷いて考え込む。
「最初から肩に乗らないと危ないな。いきなり目立っちゃうけど言葉を話さなければ大丈夫かな」
「そうだね、ガマンするよ。ボクだって最初の町の様な事はコリゴリだし」
門の上の街の名前が読める位近くまで来たダスクは少しかがむと肩に黒炎を載せる。近くに居た旅人達は驚いた表情になっていたが、黒炎が無言で居た為、動物を肩に載せた面白い人物という印象だけ受けて微笑ましそうに眺めていた。
「なるほど、この街はシアネントっていうんだな」
門の上を眺めながら街の名前を読んでいたダスクは呟く。視線を上げていたダスクの前で行商人らしき人がチェックを済ませて街に入って行った事に気が付かないダスクに、黒炎は声を出す代わりに前足で兜を叩いて知らせる。驚いた様子で黒炎を見るダスクであったが、守衛の視線が自分に向けられているのに気付いて慌てて身分証

明書を出す。無事に確認が終わって街に入ったところで感謝を示す為にダスクは黒炎の身体にポンポンと触れた。

「これからどうしようかな」

そう呟くダスクは傾いた陽に照らされて鎧が赤い光を反射している。周りの人々も宿や我が家へ急ぐ為に早足になっていた。とりあえずの目的地に到着したのに野宿するのも嫌だったが、最初の町の事が脳裏に浮かんで足が止まる。

コンコン

兜を叩く音が再び耳元で響いて驚いたダスクが音の発生源に視線を向けると、黒炎が兜を叩いた前足を何かに向けているのが見える。何だろうと思ってその方向を見ると、魚介類のモノと思われる串焼きの屋台がある。そちらからはタレが香ばしく焼ける匂いが漂ってきており、気が付くと頭の後ろからお腹の鳴る音が聞こえてきていた。しょうがない、と思いつつ、悩んでいてもしょうがないと思ったダスクは、笑顔になって黒炎に頷いた。

「了解。とりあえず串焼きをいくつか買って少し早い晩飯にしよう」

その言葉に、ダスクからは見えなかったが黒炎の尻尾は嬉しそうに振られていた。

屋台で串焼きを買ったダスク達は、人気の無い場所に移動する。黒炎の分を皿に置いて渡すと、ダスクは自分の分にかぶりついた。港町らしく食材は新鮮で、少しクセはあるが魚の匂いがするタレを浸けて焼いてある。焦げ目がつくまで焼いてあるので香ばしさもあって実に食が進む。水筒の水を黒炎と分けて飲むと満足そうに息を吐いた。

「これからどうする？」

「う～ん、前は辺りが真っ暗になるまで宿を探さなかったからダメだったんじゃないかな」

「そうかもしれない。

あの後通ってきた町で見たけど、宿とかの店にはちゃんとした看板が出てるから大丈夫か」

「うん。表通りの雰囲気の良さそうな宿屋を選べばいいんじゃないかな」
「そろそろ行こうか。このくらいの時間なら黒炎は肩に乗らないでも大丈夫そうだ」
「ちゃんと部屋で眠れるといいね」
食事の後片付けをして立ち上がると、ダスク達は連れ立って表通りへと向かう。表通りは街に到着した時と比べると人通りも減っているが、未(いま)だに屋台も多く、ランプの灯りで照らされていて明るい。宿屋も含めて店の客引きも多く、ダスク達は少し緊張しながら通りを歩く。しばらく歩いたところで、通りの端に良さそうな雰囲気の宿屋があるのに気が付いたダスクは、黒炎を促して宿屋の前に向かった。どうしようかと迷っていると、店内から小さな女の子が突然飛び出して来る。目の前に現れた大きな黒い塊にも見えるダスクの姿に驚いた女の子は躓(つまづ)いてしまった。
「きゃっ」
危ういところでダスクが受け止める。何が起こったか分からない様子だった女の子が、自分を受け止めているダスクを見て泣きそうになる。焦ったダスクは急いで兜を脱ぐと、笑顔になって女の子の目を見る。
「ごめん。大丈夫かい？」
出てきた優しそうな瞳を見た女の子はかろうじて泣くのをこらえる。黒炎はその様子を見て、笑いをこらえる様に身体を少し震わせていた。ダスクは受け止めていた女の子をしっかり立たせると、視線を合わせる為に膝を地面につく。
「君はここの子かい？僕達はここに泊まりに来たんだけど大丈夫かな？」
「だいじょうぶだよ。おとうさんとおかあさんがおきゃくこないかな～っていってた」
「そっか、ありがとう。君のお父さんかお母さんに聞いてみるよ」
「うん。このワンちゃん？あとでナデナデさせてねっ」

そう言ってニッコリ笑うと通りのどこかに走って行ってしまった。
「ボクはワンちゃんじゃないんだけどなぁ」
どこか不満そうな様子の黒炎を促して宿屋の扉へと向かう。
ギィ
軋むような音を立てて扉を開くと、目の前にはテーブルとイスが並んでいる。しかし、ここは宿屋の宿泊客専用の食事処のようで、落ち着いた様子で食事をしている人がちらほらと座っている。その奥にはカウンターがあり、先程の女の子の父親らしき男性が立っている。受付がそこだと判断したダスク達は、テーブルの間を通ってカウンターの前に立った。
「いらっしゃい。お客さん、一人かい？」
「はい。あと連れがここに」
そう言ってダスクが、男性改め宿屋の主人に指し示したのは、他の宿泊客が食べているスープを物欲しそうな様子で見ている黒炎の姿であった。それを見た宿屋の主人は、少し渋い顔になる。
「う～ん、ウチでは動物はちょっとな～」
「そこをなんとかお願いします」
頼み込んでいるダスクの様子が気になったのか、配膳をしていた女性、おそらく女の子の母親だろう女性が近付いてくる。
「どうしたんだい？あら、このコ綺麗な黒い毛皮だね。艶々して光ってるよ」
自慢の毛を褒められた黒炎は、嬉しそうに尻尾を振る。それを見て笑顔になった女性は黒炎の頭を撫でた。
「いや、このお客さんがその動物と一緒に泊まりたいって言うんだが」
「あら、いいじゃない。身体は綺麗だし、あたしは構わないよ」
「おまえがそう言うならいいか。お客さん、泊まっていきな」
「ありがとうございます。出来れば1階の部屋が良いのですが、空いていますか？」
「ん？空いているよ。かあさん、案内してやんな」

「はいよ。さあ、ついて来て下さいな」
ダスク達を促して先に立って歩いていく女性改め宿屋の女将(おかみ)は、階段の横を通って廊下を進む。行き止まりまで来たところで止まると、扉を示して鍵を渡してくれた。
「はい、これが部屋の鍵。
荷物を置いたらもう一度カウンターの所に来てくれるかい？宿帳にサインしてもらうからね」
「分かりました。あ、さっきはありがとうございました」
「いいんだよ。困っている時はお互い様さ」
笑顔でそう言う宿屋の女将は満足そうに廊下を戻っていった。それを見送ったダスク達は、扉の鍵を開けて部屋へと入る。部屋にはベッドが一つと窓際にテーブルとイスが1セットあり、全体的に清潔感の有る内装で宿屋の主達(あるじ)の人柄が出ているようであった。
「ふぅ、良かったね。ボクのせいで泊まれなかったらどうしようかと思った」
「良い人達だよ。最初のやりとりも悪意のあるものじゃなかった」
「終わり良ければ全て良し、ってやつだね」
「だな」
会話をしながら外していた装備を床が頑丈そうな場所に並べる。動きやすい服装に着替えたダスクは、黒炎に視線を向ける。
「とりあえず戻ろうか」
「うん。美味しそうなスープがあったけど、食べられるのかな？」
「まだ食べるんだ？まあそれは戻った時に聞いてみよう」
「やった、よろしくね」
軽い足取りで廊下へと向かう黒炎を追いかけて扉を開けたダスクは、黒炎を先に通してから出ると、しっかり施錠をしてからカウンターのある方へと向かう。カウンターの前に到着すると、戻ってきていた女の子の声が待っていたかの様に、ダスク達というよりは黒炎を出迎える。
「あっ、ワンちゃんだ」

駆け寄ってきた女の子は黒炎に抱きつくと、艶やかな毛を揉みくちゃにする勢いで撫でる。その勢いに萎縮(いしゅく)したように固まった黒炎は、なすがままに撫でられ続けていた。

「すまんな、お客さん。ウチの子は動物が好きでな」

「いいんですよ。それで宿帳にサインすればいいんですよね」

「ああ、これだ。ここんところにサインしてくれ」

「はい・・・これでいいですか？」

「おお、ありがとよ。宿代は今もらうけど、食事とかはどうする？」

「あ、お願いします。今食べる物と明日の朝食、両方彼の分ももらえると助かります」

「あいよ、そいつの分は娘に免じてサービスにしとくから、全部合わせてこれくらいだ。

お～い、かあさんちょっと来てくれ」

料金を払っているところで宿の女将が来ると、娘に揉みくちゃにされる黒炎を見て笑顔になる。

「なんだい？ああ、あんた達か。もちろん食事はするだろ？」

「ああ、おまえが二人分用意してやってくれ」

「よろしくお願いします。あと彼の分は熱々にして下さい」

「熱々でいいのかい？それじゃあそこのテーブルに座って待ってな」

指し示す場所に移動してイスに座ったダスクは、女の子にくっつかれたままヨロヨロとその傍に座る黒炎を見て、内心でご苦労様と伝える。少しして料理を運んできた宿屋の女将はダスク達の前にそれぞれ置くと、未だに黒炎にくっついている娘の頭に手を乗せて撫でる。

「ほら、ワンちゃんもご飯食べるんだからそのへんにして部屋に戻っていなさい」

「えぇ～、まだいっしょにいたいよ～」

「お前もご飯の邪魔をされたら嫌だろ？ワンちゃんに嫌われてもいいのかい？」

「きらわれたくないからへやにもどるっ」

「良い子だね。戻ったらすぐ寝れるように歯を磨くんだよ」
「うんっ」
頭を撫でてくれる母親に笑顔を返してから黒炎の頭をもう一度撫でると、走って階段の上に消えていった。宿屋の女将はしょうがないな、という表情で見送ると、すまなそうな顔をダスク達に向ける。
「ごめんなさいね。あたし達が忙しいから構ってやれなくて」
「気にしないで下さい。それじゃあ温かいうちに頂きますね」
「そうしておくれ。このスープはあたしの自慢の料理の一つなんだよ」
笑顔になってそう言った宿屋の女将は、娘と同じ様に黒炎の頭を撫でてから自分の仕事に戻って行った。
「「いただきます」」
周囲に人が居なくなったところで、顔を見合わせて小さな声で言ったダスク達はスープを一口飲む。その瞬間再び顔を見合わせる。両者とも少し驚いた顔をしていた。
「美味しいな」
「おいしいね」
魚介の旨みがふんだんに溶け込んだスープは、あっさりとした味付けであったが今迄食べた事が無い位の美味しさであった。その後は、勢い良く食べ続け、ダスク達は追加料金を払ってお替りまでしてしまった。カップの水を飲んで、お腹を満足そうに押さえたダスクは、黒炎を促して部屋へと向かう。
「ごちそうさまでした。本当に美味しかったです」
「ありがとね。そう言って貰えると嬉しいよ」
途中ですれ違った宿屋の女将とそんな会話をしてから廊下を進み、部屋の鍵を開けると黒炎に続いて部屋に入って施錠をする。そこでふと考えたダスクは、左手で持っていた装備を拾うと、扉の前に立て掛けるようにして置く。それを見ていた黒炎は、同意するような素振りをダスクに見せた。
「何もないとは思うけど、やっておくにこした事はないよね」

「まあ、一応の用心の為だよ。別に宿の人達を疑っているわけじゃない」
「ボク達も知らないことが多いから、経験したことは生かさないとね」
「それじゃあ寝ようか。明日は王都に行く船を捜さないといけないし」
「うん。ひさしぶりの室内なんだからしっかり寝ないともったいないよ」
ダスクは背嚢から毛布を出すと、いつもは上に被っていた物を綺麗に掃除された床に敷いて黒炎の寝床を作る。嬉しそうにその上で黒い毛玉になると、あっという間に眠りに落ちる。その様子を笑顔で見ていたダスクは、ベッドに入って布団を被ると、その暖かさと柔らかさで同じ様にすぐに眠りに落ちていった。

コンコン、コンコン
カーテンから朝の太陽の光が漏れ、外からは小鳥の鳴く声が聞こえて来る室内に、扉をノックする音が響いてくる。ダスク達はノックの音をうるさがる素振りは見せるが、全く起きる気配が無かった。ノックの主はこれだけじゃ足りないと思ったか、大きな声で起こそうとする。
「お客さ～ん、起きて下さいな。朝食の時間だから、起きてこないと食いっぱぐれるよ」
その言葉に反応した黒炎はゆっくり立ち上がると、大あくびをしてから出来るだけダスクに似せて答える。
「オキマシタ、スグイキマス」
声の様子が変だと感じたが、扉越しだったのでそう聞こえたと思った宿屋の女将は、起きたのが確認できた事に満足したようであった。
「待ってるよ」
その一言残して戻って行った。
「起きてよダスク。ねぇ、起きてったら」

以前の様に絞め殺されそうになる事に用心をして、緊張しながら前足でダスクの顔を押す。しばらくは嫌がって払い除けていたが、繰り返しているうちに目が覚めてきたのだろう、突然目を開けてガシッと黒炎の前足を掴む。何かされるんじゃないかとビクビクしていた黒炎であったが、ダスクはそれが黒炎の足である事に気が付くとあっさりと離してくれたので、ホッと一息吐いた。

「おはよう。起こしてくれてありがとな」

「うん、おはよ～。女将さんが朝食だって、呼びに来たよ」

「そっか、顔を洗って早く行こう」

そう言ったダスクは、備え付けのタライに水を入れて顔を洗うと、背嚢から出しておいた手拭いで顔を拭く。ついでに手拭いで嫌そうにする黒炎の顔を拭ってから食事処に向かった。食事処には数人の宿泊客が既に来て朝食を食べており、手にしている焼きたてのパンの香りが実に美味しそうである。入ってきたダスク達に気が付いた宿屋の女将が笑顔で近付いてくる。

「おはようさん。あんたさっき声がおかしかったけど大丈夫かい？」

「え？ああ、寝起きはいつも声の調子がおかしいんです。心配させてすみません」

「なんだ、それなら良かった。さあ、席に座りな」

促されて席に座ったダスクは、宿屋の女将が離れて行ったのを確認してから顔をしかめて黒炎を見る。黒炎は笑いたいのをこらえる様に身体を少し震わせていた。

「女将さんにしゃべったのかい？」

「しょうがないじゃん。キミが起きなかったんだから。あのままだと入って来そうだったし」

「むぅ」

声を抑えて話していると、宿屋の女将が朝食を持って来るのに気が付いたので会話を終わらせる。良く見ると、その後ろには宿屋の女将の娘が一緒について来ていた。

「すまないけど、一緒にいいかい？」

「ワンちゃんといっしょにたべるっ」
そう言ってテーブルの端に座っているダスクの正面の席に女の子は座る。身構えていた黒炎であったが、席に座った女の子を見て安心して緊張を解く。
「構いませんよ。食事中に邪魔をしなければ黒炎も怒りませんから」
「ありがとよ。あんたにはパンを、ワンちゃんにはハムをサービスしとく」
「ありがとうございます。それでは頂きますね」
「いただきま～す」
元気良く言って食べ始める娘の様子に笑顔になった宿屋の女将は、自分の仕事をする為に戻って行った。　食事を済ませ、しばらく女の子に撫で回される黒炎を笑顔で見ていたダスクは、気が済んだ女の子が友達と遊びに行くのを見送ってから黒炎と一緒に部屋に戻る。少し食休みを入れてから身支度を整えると、ダスク達は部屋を出てチェックアウトの為にカウンターへと向かった。
「お世話になりました」
「また来てくれ。娘もまた会えるのを楽しみにしてると思う」
「はい。いつかまた近くに来たら寄らせてもらいますね」
「まいど、待ってるぜ」
笑顔で見送ってくれる宿屋の主達に手を振ったダスクと、同じ様に尻尾を振った黒炎は、王都行きの船を捜す為に港へと向かう。港への行き方はチェックアウトの時に宿屋の主人に聞いてあった。教えられた通りに道を辿ると、段々潮の匂いが強くなってくる。
「コレって何の匂いだろう?」
「多分、宿屋の人が言ってた潮の匂いってヤツじゃないかな。海の近くは独特の匂いがするらしい」
「へぇ～、これが海の匂いなんだ。変わってるな～」
周りに人は居なかったが、ダスク達は声を抑えて会話をしていた。しばらく進んだところで急に視界がひらける。そこには朝日を浴びて輝く海面と、海鳥がたくさん止まっている大小様々な船が停泊し

ていた。
「うわっ、これが海なのか。デッカイ水溜りだね」
「話には聞いていたけど、実際に見ると本当に大きいな」
驚きのあまり立ち止まってしまったダスク達は、しばらくそのまま魅せられた様に海を眺める。少なくない時間そうしていたが、ふと当初の目的を思い出したダスク達は少し首を振って気持ちを切り替える。
「さあ、船を捜そうか。うまく王都行きの船が見付かるといいけど」
「ダイジョブ、ダイジョブ。きっと見付かるよ」
それからダスク達は、停泊している船を一つ一つ回って目的地と自分達が乗れるかを聞いていった。回り始めた辺りの船は白く塗装されており、海の青さに映えて美しい光景を見せている。ある程度回ったところで、近くの屋台で飲み物を買うと、人気の無い場所に行って腰を下ろした。日当たりの良い港は気温も高めで潮風もあり、すぐに喉が乾いてくる。ダスク達は美味しそうに飲み物を飲むと、疲れた風に溜息を吐いた。
「なかなか王都行きの船って無いな」
「そうだね。あってもちょっと小さい感じだよ」
「う～ん、この後は大きめの船だけ回ってみようか」
「それがいいかも。全部まわってたら夜になっちゃうよ」
改めて方針を決めたダスク達は大きめの船を選んで回り始める。いくつか回ったところで王都行きの白い中型の船が見付かり、船長とダスクが話している途中で不意に黒炎がダスクの脚を前足でつつく。ダスクは船長に頭を下げて離れると、少し不機嫌そうに小さな声で黒炎に話しかける。
「なんだよ、せっかく船が決まりそうだったのに。何か急ぎの用なのか？」
「うん。ほら、あっちを見て。あっちにキミが乗ってもびくともしなそうな船が並んでるよ」
そう言って前足で指し示す方向を見たダスクの目には、大型の船が

いくつも並んでいる光景が見える。その色は、今まであった大多数の白い船とは違い、赤く塗ってあり、とても目立つ様子であった。
「大きいな。確かにあれなら僕が乗っても大丈夫そうだけど、王都に行くのかな？」
「とりあえず聞いてみればいいんじゃない？」
「それもそうか。聞いてみて駄目だったらさっきの船長さんに頼んでみよう」
そう決めたダスク達は、赤い船へと向かう。船に近付いていくと都合良く船長らしき格好をした人が降りてくるのが見える。その人物に駆け寄ってみると、小麦色に日に焼けた肌で今迄あまり見なかった髪や瞳の色をしているのが確認出来た。短く刈った髪の毛は陽の光を受けて輝く銀色をしており、瞳は金色に見える。こちらに気が付いたその人物は、不思議そうな顔で黒でまとめられたかの様なダスク達を見る。
「キミタチはワタシにナニかヨウですか？」
不思議な発音の言葉に躊躇（ちゅうちょ）していたダスクだったが、黒炎が催促する様に脚をつつくのに後押しされて船長らしき人に視線を向ける。
「この船は王都に向かいますか？それと、僕達を乗せてくれますか？」
「オウト？ハイ、いきますヨ。キミタチはオキャクですか。ノルならこれクライひつようデス」
「やった、乗れるんだ！あ、すみません。すぐに乗りたいです」
「まいどデス。スグにシュッコウしますから、アソコのセンインにオカネはらってクダサイ」
そう言うと、船長は甲板に続く階段の近くに居る船員に手を振って合図する。ダスク達は船長にお辞儀をして別れると、船員に代金を払って船に乗り込んだ。船員はこの街でよく見る髪や瞳の色で、言葉も普通の発音で話していた。ちなみに黒炎は大型手荷物（笑）としての料金であった。
甲板に昇ると意外と高い位置にあり、港が一望出来る。眺めの良

さと初めての船に興奮したダスク達は出航するまでそのままの場所で目に飛び込んでくる景色を眺めていた。

とうとう船に乗り込んだダスクと黒炎は無事に王都に辿り着けるのだろうか。波も穏やかで風も追い風が吹き、滑らかに進む赤い船はこの先の航海の無事を暗示している様で、ダスク達は楽しい気分で遠くなる港町に別れを告げていた。

無知と出会い（後編）（後書き）

楽しんで頂けたでしょうか。続きも早く読んで貰えるように頑張ります。

勘違いと足止め（前書き）

同じペースを保つのは意外と大変だな～と思いつつ頑張っています。

勘違いと足止め

港町のシアネントで船に乗ったダスクと黒炎は、順風満帆な船旅を満喫していた。ダスクはくすんだ黒色の全身鎧と巨大な二つの装備を持つ、ボサボサの黒髪と優しそうな黒瞳の十代半ば位の少年で、フルネームはダスク・ウォールという。黒炎はピンと立った三角の耳と狐の様な大きな尻尾で艶やかな黒い毛皮の獣で、最も特徴的なのはルビーの様に輝く紅い瞳である。港を出港してからも海は穏やかで追い風が吹き、雲一つ無く嵐の気配も全く無かった。食事も魚介を使った珍しい料理がたくさん出され、ダスク達、特に黒炎は満足そうに平らげていた。機嫌の良いダスクは、たまに船の力仕事を手伝って船員達から色々な国の面白い話を聞いたりしながら、楽しく過ごしていた。そして出航してから1ヶ月が経ったある日、その光景が船の進行方向に見えてくる。とうとう船が目的地の王都に到着したのだ。

王都はダスク達が想像していた姿とは違い、なだらかな斜面に造られていた。目前の港から徐々に建物が建てられており、上にいくごとに建物は立派になっていき、そして一番上の目立つ場所に城が建てられている。王都の周囲は高い城壁に囲まれており、その出入りは港のある東側と、街道と繋がった中央通りの出入り口である南門と西門を通らないと不可能で、中央通りは南門から入って城と港の間を通り、そのままぐるっと王都内を通って西門まで続いている。特筆すべきは、王都全体が赤く見える事で、彩色しているのか建材に赤いものを使っているのか分からないが見事に統一されている。船の色は、おそらくこちらに合わせたものだったのであろう。ダスク達の目には、そこはまるで異国の光景の様に見えた。

「すごい。王都ってこんなに大きかったんだね」

「うん。これは想像以上だ」

ダスク達の乗った船はシアネントのあった場所から随分と南方に移

動していた。頭上に輝く太陽は冬だというのに高い位置にあり、ぬるい潮風と高い湿度で季節を間違えそうになる。船の周りには陸地が近いのでたくさんの海鳥が舞い、港まで先導するかのように同じ方向へと嘴（くちばし）を向けている。時折甲板近くまで降りてくると、黒炎をからかうかのように猫みたいな鳴き声を上げる。さっきまで黒炎が近付く海鳥を追い掛け回していたからかもしれない。王都の光景に圧倒されていたダスク達は、いつの間にか港までの距離が結構近付いてきているのに気が付いた。

「そろそろ港に着きそうだ。船を出る準備をしないと」

「そうだね、海鳥達もしつこいし、いったん船室に戻ろうか」

届かない位置から何度も海鳥に鳴かれていた黒炎は、うっとおしそうに言うと先立って船室へと向かう。苦笑したダスクは、やれやれといった素振りでその後を追いかける。長距離になると思ったダスクは、大部屋ではなく値段の高い個室の方を借りていた。部屋の前で待っていた黒炎に追い付いたダスクは、扉を開けて黒炎に続いて部屋に入る。１ヶ月も居たにしては整理整頓されており、まとめるような荷物は見当たらない。ダスクは少し薄めの服に着替えると、上から鎧を全て装着して装備を背中に固定する。最後に黒炎の背嚢を背負わせて準備は終了した。

ボォォォォ

港に到着する合図の法螺貝が鳴り響く。この船は大型なので徐々に減速してからじゃないと止まれないので、合図があってからしばらくの間は接岸しない。ダスクと黒炎は接岸までのゆったりとした時間を使って１ヶ月の船旅に想いを馳せていた。

木が軋む様な音が側面から聞こえてくると同時にガクンとした衝撃が来て船が止まる。ダスク達は頷き合うと船室を出て外へと向かう。ほとんどの船客は船の到着する合図で甲板に出ていたらしく、甲板までの通路には数人の姿しか見えなかった。スムーズに通路から甲板に出たダスク達の目には、下船する船客の列が少しずつ進んでいる様子や、積荷を降ろし始めている船員の姿が入ってくる。周

りの大小様々な船でも人や物のやりとりが盛んに行われ、それだけでも王都の繁栄を如実に語っている。
　港の光景をボケッと見ているうちに、下船する人の列が消化されたようで、ダスク達だけが残されており、下船のチェックをしている船員が早く来いという風(ふう)に手を振っている。慌てて駆け出すダスク達を顔見知りになっていた船員が苦笑して迎える。
「驚いただろ。俺も初めて来た時はお前と同じだったよ」
「すごいですよね。海から全景が分かったから尚更圧倒されました」
「はは、それではお客様、王都スカルトパシオンへようこそ」
「ありがとうございます。お世話になりました」
「おう、がんばれよっ」
お互いに軽く手を振って別れる。久しぶりに踏む大地の感触はとてもしっかりとしたもので、ダスク達は逆に揺れていない事に違和感を感じる程であった。しばらく歩いて人気(ひとけ)の少ない場所に出たところで腰を降ろして一休みする。ずっと我慢していたらしい黒炎が、周りに聞かれない程度の声で勢い良く言葉を口に出す。
「ぷはっ、やっと話せる。そういえば、王都ってスカルトパシオンっていうんだね。初めて知ったよ」
「うん。僕もうっかりしてたな。王都の名前を確認してなかった」
「まあ、結果としては王都に着いたんだからいいんじゃない？」
「そうだね。それにしても、王都ってずいぶん今までの町と違うんだな」
「そういうもんじゃないかな。王都って言うくらいだから他とは違うんだよ」
「確かにそうかもしれないな。それよりも、これからどうしようか」
昼時の太陽は相変わらずジリジリとダスク達を照らしている。鎧や毛皮の色のせいか、お互いを見ているだけでも温度が上がりそうな気がしてくる。港の少し離れている場所で働いている人達の姿が陽炎でゆらゆらと揺れるように見えていた。舌を出して呼吸の荒くなった黒炎の鼻先から汗が1滴地面に落ちるが、その跡はすぐに消え

てしまう。
「とりあえず、ボクは何か冷たい飲み物が欲しい・・・」
「そうだね。僕も汗だくでフラフラしてる。
この鎧は直接の温度変化はほとんど無いけど、熱くなった空気が入ってきて内側が蒸れるんだよね」
「そうと決まったら飲み物のついでに昼食も買おうよ。できればこの名物がいいね」
「じゃあ中央通りに出ようか。とりあえず黒炎は肩に乗ってた方がいいかな」
「了解。ボクも楽だし、地面よりは鎧の方が温度低いからね」
苦笑いしながら頷いたダスクが立ち上がり、背を向け腰をかがめるのを見た黒炎は、素早く駆け上がると兜の後ろ側にお腹の横を付けて熱を逃がす。熱を溜めない鎧にくっついているだけでも気温が下がった様な錯覚を受ける。動物を肩に載せて歩く黒ずくめのダスクの姿はとても目立ち、周りを歩いている人々は微笑ましそうな顔で見る。周囲の人の半分以上がダスク達の乗ってきた船の船長と同じ小麦色の肌で、陽の光に輝く銀髪と明るい金の瞳を持つ人達である。服装は気候に合わせた薄手の物が多く、赤を基調としたカラフルなデザインの物が多かった。しばらく人の流れに乗って歩いていると目の前に今迄歩いて来た道の数倍の幅がある道、中央通りが見えてくる。通りには各種店舗が軒を連ね、露店や屋台が並び、それらを物色する為に通りを行き交う人々が数え切れない程であった。その光景にダスク達は驚きの余り固まる。今迄通って来た街で見た人の数が可愛く思える程の人の群れで、改めて王都の凄さを実感するダスクと黒炎であった。自分の周囲を邪魔そうな顔をしながら通る人の視線に気が付いたダスクは、慌てて歩き出す。当初の目的通りに食べ物と飲み物の屋台を探しながら歩いていると、進行方向から良い匂いが漂ってくるのに気が付く。黒炎も同じ様に気が付いたらしく、兜を前足で叩いてからその匂いの発生源を指し示す。
「良い匂いだけど、これは何ていう料理なんだろう?」

小さな声で呟いたダスクの言葉を聞いた黒炎は兜に口を寄せて予想通りの言葉を伝えてくる。
「なんだっていいよ～。スッゴク美味しそうだからこれにしようよ。飲み物も売ってるから丁度いいし」
いかにも黒炎らしい言い分に微笑んだダスクは、屋台の主人に二人分の料理と飲み物を注文する。
「ウチのはメチャクチャオイシイヨ。
オキャクサンくろいね～、とってもシブいヨ！キにいった、もうイッチョもっていきナ！」
なんだかとてもノリの良いオジサンで、ダスク達を気に入ったらしく一人分の料理をサービスしてくれる。喜んだ黒炎は尻尾を大きく振ってオジサンに感謝を伝えていた。昼食を確保したダスク達は、中央通りから少し離れ、人気の少ない道へと入る。少し進んだところに公園の様な、港を見下ろせる場所があったので、そこで食べることにしたダスクは黒炎を降ろして岩に腰を掛ける。屋台で買ったのは、穀物の粉を練った生地を薄く延ばして焼いたモノに生野菜と甘辛く味付けして炒めた挽肉を載せて巻いた料理で、飲み物は新鮮な果物を搾った果汁を湧き水で少し薄めたモノである。黒炎の分を器に載せて置くと、兜を脱いでダスクは自分の分にかぶりつく。挽肉の味付けが絶妙で、生野菜と外側の生地との相性が抜群であった。
「うわっ、これスッゴク美味しいよ。こんな料理もあるんだね」
「うん。初めて食べたけど、これは本当に美味しい」
ダスク達はあっという間に自分の分を食べ切ると、残りの一人分をどうしようかと悩む。飲み物を飲みながらお互いに牽制し合っていると、ダスク達の後ろから子供の声が聞こえて来る。
「スミマせん。ソレあまっていたらボクタチにくれませんカ？」
ダスク達が後ろを振り返ると、目の前には兄弟なのか手を繋いだ小さな子供が二人立っている。二人の子供は薄汚い格好をしており、髪も伸び放題で、服から覗く手足は痩せ細っていた。それを見たダスクは黒炎と顔を見合わせてどうすればいいか聞く様な素振りを見

せる。それに頷いた黒炎の答えに、ダスクは料理を子供に渡そうと決めて立ち上がる。子供達はダスクの鎧を怖がっているようであったが、料理を貰えそうな気配に嬉しそうな顔になった。

「良く分からないけどお腹が減っているんだね？これで良ければ、」

そこまで言ったところで、いつの間に近付いてきたのか、横から伸びた手が料理を持つ腕を掴み止める。

「やめときな」

手と共に飛んできた言葉に、腕を掴む手の持ち主へと視線を向ける。そこに居たのはおそらくダスクと同年代の、透き通る様な輝きを見せる腰まで届く銀髪を三つ編みにして背中に垂らした中性的で美しい容姿の人物で、ダスクより少し低い位の背丈の小麦色の肌を持つ細身の身体には、赤を基調とした中央通りでよく見たデザインの服を着ている。服の素材は良い物らしく、傍から見ても柔らかそうなキメの細かい布地である。その人物で一番印象的なのは力強さを感じさせる金の瞳で、今も厳しい瞳をダスク達に向けていた。

「いきなりなんだよ。君には関係ないだろ」

「関係ない、というわけでもない、かも？・・・と、とにかく周りの建物の影を見てみろよ」

その言葉に訝しげな様子になると、ダスク達は周囲を見廻す。するとそこには目前の兄弟と同じ様な身なりをした子供達がジッとこちらを見ていた。驚いたダスク達は腕を掴んでいる闖入者（ちんにゅうしゃ）に視線を向ける。

「どういうこと？あそこの子供達は何でこっちを見てるんだ？」

「その兄弟と同じだよ。親を亡くしたり、貧しさで捨てられた子供達さ。

それが身を寄せ合って生活してるんだ。今みたいに人に施しを求めたり、盗みをやったりしてな」

「大変なんだな。それで何で君が出てくるんだ？」

「やめとけ、味をしめて繰り返し来るかもしれない。さすがに全員にやれないだろ？」

「当たり前だよ。余ってるのは一人分しか無いし、別に全員にあげる気は無いよ。
何かを得るには対価が必要だって小さい頃から学んできたからね。あの子達とは育った環境が違うけど、皆で何かを生み出せる人間になってくれれば良いと思う」
「意外だな、顔のわりには現実的というかなんというか。余計なお世話だったか」
「いや、まあ、心配してくれてありがとう。君は意外と優しい人なんだな」
「なっ、優しくなんてねぇよ。結局は勇み足だっただけだし」
照れて頬を少し赤くした銀髪の人物は、ダスクの腕を放して後ろを向く。ダスクは改めて小さな兄弟に視線を向ける。先程から視界の端に映っていたが、一生懸命にダスクの脱いだ兜を持ち上げようとしていた。ちなみに黒炎は、我知らずという風情で丸まって港の方を見ていた。
「君達には無理だよ。さあ、これを持って帰りな」
自分達のしていた事に気が付かれていた事にも驚いたが、それを気にしないで料理を手渡してくるダスクにも驚いて、兄弟はダスクの顔を凝視する。その表情に怒りは無く、笑顔しか無いのを確認して我に返ると、恥ずかしそうに料理を受け取って礼の代わりに頭を下げて建物の影へと消えていった。
「お人好しだな」
兄弟を笑顔で見送っていたダスクの様子を見て、呆れたような顔で銀髪の人物は言う。
「そんな事は無いよ。持って行けないのは分かっていたからな」
「ふむ、お前って面白いヤツだな。それに、格好も黒に統一していて渋くて趣味も良さそうだ。
よし決めた、オレの友達にしてやるよ」
「友達にしてやるって・・・君だって面白い人じゃないか。まあ悪い人間じゃないみたいだけど」

「ふんっ、オレと仲良くなりたいヤツは多いんだから光栄に思え」
「はぁ、ありがとうございます。それじゃあ少し場所を変えようか。未だに見てる子も多いし」
「そうだな。いい場所がある、ついて来な」
ダスクは兜を被って黒炎に頷くと、こちらをジッと見ている子供達に威嚇(いかく)の視線を飛ばしている銀髪の人物の後に続く。ダスクも無用な希望を抱かせ無い様に、子供達には一瞥(いちべつ)も向けなかった。
しばらく歩くうちに、しつこく後ろをついて来ていた子供達の姿も見えなくなり、黒炎からも気配は無いと伝えられてダスクは安心する。黙々と歩く銀髪の人物の後姿は歩みを緩める気配は無く、目的地がまだまだ先だと語っている。少なくない時間歩いた先には、王都を囲む城壁の姿が近付いてきていた。
「まだかい？」
「黙ってついて来な。いいモノ見せてやるから」
そう言った銀髪の人物は、少し離れた場所にダスク達を待たせると城壁に上がる石段の前に居る守衛に近付いて何事かを話す。了承が得られたらしく、手招きすると先に立って城壁へと昇って行った。慌ててその後を追いかけたダスク達は、石段の前で守衛にお辞儀をすると素早く昇って行く。先に進んでいた銀髪の人物にようやく追い付いたダスクを、本当に嬉しそうな満面の笑顔で出迎えてくれた。
「ここに友達を誘ったのは初めてなんだ。どうだっスゴイだろう？」
その言葉に、初めて周囲の風景を眺めたダスク達は、感嘆の溜息を吐く。それを見た銀髪の人物は、ますます嬉しそうな顔になっていた。
城壁の上からの眺めは、陽の光に輝く海と雲一つ無い空を背景に、城と町並みが一望出来る。赤と青のコントラストが強調され、なるほど自慢したくなる光景であった。
ダスクは兜を脱いで改めて景色を堪能すると、感謝の気持ちで笑顔になりながら銀髪の人物に向けて握手の手を出す。籠手を外したダスクの手を、少し照れた様な表情で銀髪の人物はしっかりと握っ

た。
「ありがとう。こんなに素晴らしい眺めを見せてくれて。僕の名前はダスク・ウォール。ダスクって呼んでくれ。これからよろしく」
「おう、喜んで貰えて良かった。とっておきの場所に連れてきた甲斐があるってもんだ。
オレの名前はソラリス・シルっ、あ～、ソラリス・シール。ソラって呼んでくれ」
「ボクの名前は黒炎っていうんだ。ボクのコトもよろしくね」
「ああ、よろしく黒炎。さすがのオレも言葉を話す動物は初めて見たぜ」
握手の手の上に前足を載せて自己紹介の流れにちゃかりと加わった黒炎の言葉に、少しも驚いた様子を見せず平然と応えるソラリスに、ダスク達は内心驚いていた。
「ソラって肝が据わってるね。ローラは驚いてくれたんだけどな～」
「ローラ？まあオレはちょっとやそっとの事じゃ動じないぜ。見ての通りの大物（おおもの）だからな」
「ローラは友達だよ。それよりも大したもんだ。普通の人だったら驚いていたと思う。
そうだ、ソラにお願いがあるんだけど、いいかい？」
「ん？黒炎が言葉を話せる事を内緒にしとけばいいんだろ。
当たり前だ、友達を売る様な事はしない。オレを見損なうなよ」
「ありがと～。ソラと友達になれてボクも嬉しいよ」
「ありがとう。ソラって口は悪いが、良いヤツだよな」
「ふんっ、口が悪い、は余計なお世話だ」
照れながらも、機嫌の良い顔になったソラリスはダスク達の視線をかわすようにソッポを向く。ダスクと黒炎は顔を見合わせて笑顔になる。それを見てソラリスも顔を戻すと昔からの友達同士の様な雰囲気で、城壁の上から見える色々な物について会話を楽しんだ。
時間を忘れて話をしていたようで、いつの間にか陽も傾き、辺り

は夕焼けに赤く照らされている。この光景もまた絶景で、視界に映る物全てがそれぞれの色合いで赤く染まってまさしく赤の世界と言うべき景色になっていた。それに気が付いた皆でしばらくその眺めを堪能(たんのう)した後、そろそろ帰る時間になったらしいソラリスが表情を改めてダスク達を見る。

「そういえばダスク達は何しに王都に来たんだ?良かったら案内するぞ」

「それは助かる。僕達が王都に来た目的は、王都の学院で色々な事を学ぶ事なんだよ」

「へ～、意外と勤勉なんだな。学院か・・・はて、王都に学院なんてあったかな。

まあいいか。知人に聞いておくから明日また会おうぜ」

「ありがとう。わざわざ悪いな。ソラって本当に良いヤツだな」

「よせよ、友達なんだから気にするなって。それじゃあ明日の昼頃に港の灯台で待ち合わせしようぜ」

「分かった、港の灯台だな。また明日会おう、ソラ」

「おう、またな、ダスクと黒炎」

「またね、ソラ。バイバ～イ」

先に立って城壁を降りていくソラリスに手を振りながら、ダスク達も同じ様に降りていく。あっという間に見えなくなったソラリスを見送ってから、守衛にお辞儀をすると、今日の宿を探す為に中央通りへと向かう。しかし、2～3歩進んだところでダスク達は止まった。

「すみません。中央通りってどの方角ですか?」

「あっちだよ」

笑みを浮かべる守衛にお礼を言って、バツが悪い顔になったダスク達は教えられた方向へと向かう。高く目立つ城を目印にして歩く事しばし、進行方向から人々の喧騒が聞こえて来る。混み合っている事が分かったので、ダスクは黒炎を肩に載せてから中央通りへと出る。歩きながら目に付く良さそうな雰囲気の宿屋を回るが、満員だ

ったり1階の部屋が空いていなかったりでなかなか宿が決まらない。少なくない数の宿屋を回ったダスク達は、空振りに加え人の多さにも疲労感が増すのを感じて脇道へと逃れる。人気が無くなったのを確認した黒炎はダスクの肩から降り、揃って深呼吸をする。

「はぁ、やっぱり良い事ばかり続かないか」

「そうだね。良い事と悪い事が同じ位あるのが普通なのかもね」

人々の喧騒が感じられる方向をうんざりとした表情で見ながら、ダスク達は顔を見合わせる。

「これからどうしようか？」

「宿屋を諦めてどこかで野宿でもするかい？ボクはどちらでもいいよ」

「う～ん、街の中なのに野宿するのもアレだけど、しょうがないか」

「とりあえず夕飯食べながらもう一度考えて、それでも手が無かったら野宿でいいんじゃないかな」

「そうだね、そうするか」

「明日の集合場所の港の灯台近くでいいかもね。そのまま昼まで寝てたら移動する手間が省けるよ」

そう言って、楽しそうに尻尾を振る黒炎を見ながら、ダスクはやれやれといった風情で息を吐いていた。

再び黒炎を肩に載せたダスクは中央通りに戻ると、宿屋を探している時に見た屋台村の様なモノが出来ていた場所へと向かう。中央通りに面した広場に複数の屋台が固まっていて、その周りのスペースにテーブルやイスが複数並べられ、屋外の食堂の様な雰囲気の場所になっている。そこでいくつかの料理を買い、空いている席に座って黒炎の分を器に分けて地面に置く。炭火で塩焼きにした魚介類や、茹でた芋にピリ辛のソースをかけた料理は素材の味が生かされていたり独特な風味を楽しむ事が出来て、ダスク達はあっという間に平らげてしまう。黒炎の尻尾も機嫌の良さを表して踊るように振られていた。最後にカップで渡された湧き水を飲んでしめたダスク達は、美味しい食事の余韻を楽しみたかったので宿屋探しという面

倒事をやめて港に移動する事に決めた。ダスクは肩に黒炎を載せてすぐに中央通りから外れ、港へと向かう。港の周りは人気も少なく薄暗い為、黒炎はダスクの肩から降りて歩く。目的地の灯台は港の端に建っており、天辺（てっぺん）に眩しい灯りが灯っているが、唯一の灯りを際立たせるように周囲は明かりが無いので暗かった。灯台の周りを回って野宿に良さそうな場所を探す。近くに木箱が積み上げられている場所があり、人の目があまり向かなそうな位置に自分達の入れそうな隙間を見付けたダスク達は、周りに不審者が居ないか気配を探ってから入り込んだ。

「いちおう用心して気配を探ってからにしたけど、傍から見たらボク達が不審者だよね」

「言わないでいい。僕も同じ事を考えていたから」

苦笑して同意したダスクは、暖かい気候だから掛ける必要のない毛布を地面に敷いて黒炎の寝床を作る。嬉しそうにその上に丸くなった黒炎は、欠伸をしながらダスクへ視線を向ける。

「鎧は脱がないのかい？」

「うん。とりあえず着たままにしとくよ。

野宿も今日くらいだろうし、学院が見付かれば部屋も借りる事になるだろうからね」

「そっか、それじゃあさっさと寝ちゃおう」

「そうしよう。おやすみ、黒炎」

「おやすみ～」

今日も色々な事があったからか、目をつぶったダスク達はあっという間に眠りに落ちていく。辺りには穏やかな波の音だけが聞こえていて、眠りを守るようにダスク達を包み込んでいた。

木箱の陰で寝ていたダスク達に朝日が当たり始め、少しの間まぶしさに呻（うめ）いてから目を覚ます。同時に起きたダスク達は、寝起きの身体も起こすようにあちこち動かして柔軟をする。場所が陰だった為、いつもより起きるのが少し遅くなったダスク達から見える船の

周りでは、すでに仕事を始めている人々が忙しそうに動き回っていた。
「おはよ～。お腹すいたね」
「おはよう。起きるのが少し遅くなったから、そのせいもあるな」
「とりあえず、腹ごしらえしておこうよ」
「そうだな、約束の時間までまだあるし」
忘れ物が無いか確認したダスクは、黒炎を促して港の近くにある市場に向かう。競(せ)りも終わっているので独特のやりとりは見られないが、買い物に訪れた人々のやりとりで活気の有る空気が出来ている。商売人や客達を目的とした屋台もたくさんあり、新鮮な素材を使った料理を振舞っている。座って食べられるスペースをとっている屋台を見付けたダスク達は、そこでパンと魚介のスープを頼んで席に座った。
「なんか料理を食べている人達ってキミみたいに武装してる人が多くない？」
「うん。僕も気になってた。何かあったのか、それともあるのか」
声をひそめて話すダスク達の周りにも数人の武装した人間がちらほらと見える。昨日もそれなりに武装した人間は居たが、今日は話題に上がるくらいに目立って視界に入ってくる。気にはなったが、考えても分からない事だったのでそのまま食事を続け、スープのお替りも平らげてから席を立つ。待ち合わせの昼まではまだ時間があるので、ダスク達は中央通りに行く事にする。これから住む事になる王都の地理を少しでも覚えようと考えたからであった。
「お城を見に行ってみない？帰りは下りだから間に合いそうだし」
「了解。僕も昨日から気になってたんだ」
肩に乗った黒炎が耳元でささやいた言葉に頷いたダスクは、建物の上に覗く城の尖塔を目指して足を踏み出す。入り組んだ道に入ってしまった時には、すれ違う人達に聞いて修正しながら進む。しばらく歩いたところで、急に目の前に広々とした広場が現れる。そこは城の目の前の広場で、何か国の催しがある時にはここで行われるの

が常であった。綺麗に舗装された地面と巨大な城の姿にダスク達は感嘆の溜息を吐く。城の周りは水を満たした掘があり、城への入口は正面と真後ろの二つの跳ね橋だけである。跳ね橋を渡った先には金属製の扉があり、それ以外は高い城壁に囲まれている。ダスクの肩から降りた黒炎は、ダスクと一緒に堀の周りを回りながら、見事な造りの城を眺める。

「すごい立派だな～。ここに王様が住んでるんだね」

「うん。僕達の知らない世界があそこにはあるんだろうな」

「王様ってどんな顔してるんだろ？一度見てみたいな～」

「見れるわけないだろ。それよりも入口の扉の装飾は見事なモノだったな～」

「またそれかい、キミは。相変わらずだね」

呆れたような声で言った黒炎は、堀の中で跳ねた魚に気を取られつつ進み、ダスク達は少なくない時間をかけて城の正面に戻ってくる。

「結構時間かかったね。そろそろ港に戻らないとヤバイかも」

「うん。下りだからさっさと行こう」

そう言ったダスクの肩に黒炎は素早く乗り、ダスクは早いペースで歩き出す。出来るだけ人の少ない道を選びながら下った先に、昼時の混雑した港の様子が見えてくる。そのままスピードを落とさずに進み、ダスク達は待ち合わせ場所の灯台の元に辿り着いた。まだ来ていないらしく、灯台の周辺にはソラリスの姿は見当たらない。まだ昼になったばかりだったので、その場所からあまり離れないようにしながら、兜を脱いだダスクと、楽しそうに尻尾を振る黒炎はそれぞれ海を見たり流れる雲を見ながら時間をつぶす。

「そういえば海の水って本当に塩辛いのかな？」

海を覗き込んでいた黒炎が突然そんな事を呟く。その言葉に誘われる様にダスクは黒炎の傍らにしゃがんで同じ様に海を見る。

「試しに舐めてみるかい？やるならカップにすくうけど」

「確かめてみようよ。やっとかないと後で後悔しそうだからね」

頷いたダスクは荷物からカップを取り出すと、桟橋から身を乗り出

して海水をすくう。興味津々で尻尾をブンブン振りながらカップを見る黒炎の様子に苦笑しながら、ダスクは皿に海水を入れて黒炎の前に置いた。

「キミはやらないのかい？まあいいや、どれどれ」

言葉とは裏腹に、恐る恐る口を皿に近づけた黒炎は、匂いを少し嗅いでから舌を豪快に海水に浸けた。あっ、という顔でそれを見たダスクは続く黒炎の言葉を待つ。

「っ、ぅぅぅぅぅっ、しょっぱ～いっ！」

予想通りの結果に呆れた顔になったダスクは、黒炎に水筒の水で口をゆすがせようと海水を捨てた皿に栓を抜いた水筒を傾ける。しかし中身が無くなっていたらしく、1滴の水も出てこなかった。

「ごめん。水筒の水が無くなってたから何か買ってくるよ」

申し訳なさそうな顔で言うダスクに、黒炎は涙目の紅い瞳で見ながら何も言えずに何度も頷く。それを見たダスクは、走って飲み物の屋台へ行くと、水筒に入る分の水と、口直しの果汁の薄めたものを買ってすぐに黒炎の元に戻る。ダスクの戻りを心待ちにしていた黒炎は、戻ってくるのを見て催促する様な目を向ける。皿を水で洗って新しく水を満たすやいなや黒炎は舌を水に突っ込んだ。

「飲まないでうがいするんだぞ。口直しの飲み物も買ってあるから」

「分かってるよっ」

何度もうがいをする黒炎に、ダスクは皿に水を順次追加していった。しばらくして、塩辛さが治まったようだったので、皿から水を捨てると口直しに買ってきた飲み物を注ぐ。黒炎はそれを本当に美味しそうに飲みながら、不満そうな顔をダスクに向ける。

「なんでキミはやらなかったんだよ？」

「ああ、僕は船で船員の人を手伝っている時に確かめていたから」

「うわ、ずるいよ。こうなるって分かってたんだね」

「ごめんごめん。自分の舌で確かめておいた方が良いかと思ったんだよ」

不満そうな黒炎を、ダスクはなだめながら、早くソラリスが来ない

かと思っていた。
　仲直りしたダスク達は、灯台に寄り掛かりながら座って、水平線を眺めながら待ち人が来るのを待っていた。正午から1~2時間経ったところで、ソラリスと一緒に昼食を食べようと思っていたダスク達の腹の虫が食べ物を催促する様に鳴り始める。空腹に耐えながら、何かあったのかと思い、心当たりの有る場所を探すか、それともこのまま待つかを悩んでいると、突然背後から聞き慣れない声が掛けられる。
「ダスク様と黒炎様ですか？」
突然現れた気配にも驚いたが、人生初の『様』付けで呼ばれたダスク達は、飛び上がって慌てた様に声の主へと視線を向ける。そこには、この場所に全くそぐわない格好の人物が立っていた。一言で言えば、メイドである。紺色のエプロンドレスと頭に載せたホワイトブリムをキッチリと着込んだ、肩で揃えた綺麗な銀髪と小麦色の肌を持つメリハリのある女性的な体型の可愛らしい顔の女性で、今迄見た王都に多い人々とは違い深い碧色に輝く瞳をダスク達に向けている。背はダスクと同じ位で、年齢は二十歳くらいに見えていた。数瞬ボケッとしていたダスクは、メイドさんと目を合わせて頷く。
「はい。僕達がダスクと黒炎です」
その言葉に頷いたメイドさんは、楽しそうな笑顔でダスク達の姿を確認しつつ頷いたり何事か呟いている。その様子に不安になったダスクは、恐る恐るメイドさんに声を掛ける。
「あの、僕達に何か御用でしょうか？」
「あっ、ごめんごめん。コホン、私（わたくし）はソラリス様に命じられて伝言を伝えに参りました」
知っている名前が出てきて少し安心したダスクは安堵の息を吐く。黒炎も安心した様子で尻尾をゆったりと振っている。
「ソラに何かあったんですか？遅いから黒炎と心配していたんです」
その言葉に、黒炎も同意するように首を縦に振る。
「キャー！可愛いっ」

その様子を見たメイドさんは感極まったかのように黒炎の首に抱きついてくる。
「うわっ」
驚いた黒炎の口から言葉を出ると、益々嬉しそうにギュッと抱きつく手に力を込める。
「く、くるしいっ」
「あっ、ごめんね。ソラ様が言っていた通りだったから嬉しくって」
驚いたダスクは、メイドさんの顔をマジマジと凝視する。
「その事をソラに聞いたんですか？」
「心配しないで。わたしはソラ様の専属メイドだから秘密も厳守します。
姉妹の様に育ったわたしだから教えてくれただけで、他言無用っていうのも分かってるわ」
「それなら良いですが、くれぐれもよろしくお願いしますね」
「ダスクくんは心配性ね～。大丈夫だから。黒炎くんもそう思うでしょ？」
「ボクもちょっと心配かな。なんだかノリが軽いんだもん、お姉さんって」
「もぅ、イジワルね。お姉さんは悲しいわ・・・っていうかとりあえず自己紹介しましょ。
わたしの名前はサフィーラ・ロング、サフィって呼んでね」
「僕達の名前は知っているみたいですが、僕はダスク・ウォールです。
ダスクで良いので、よろしくお願いします、サフィさん」
「ボクは黒炎。よろしくね、サフィ」
「こちらこそ。ソラ様共々よろしくね～」
自己紹介して握手をしたダスク達は、仕切り直す様に表情を真面目なモノに変えるが、サフィーラはニコニコしたままである。笑顔がデフォルトなのだとダスク達は納得する事に決めた。
「それで、ソラに何かあったのですか？」

「心配しないで。ソラ様には今のところ何も起きていないから。
でも外出する事が出来そうも無かったから、わたしに伝言を伝える役目を命じたの」
「なるほど、そうだったんですか。わざわざありがとうございます」
「お礼なんていいわよ。それと、ソラ様からダスクくんの質問に答えるように言われてるわ」
「質問？・・・あ、学院の事か。助かります、僕達だけじゃ見付からないかもしれないので」
「学院ねぇ・・・ここに学院なんてあったかしら？それは確かにここにあるの？」
「はい。学院長さんに王都の学院に誘われたんです」
「王都・・・あ、まさかとは思うけど、王都ってアズレシルエンスの方じゃないわよね？」
「アズレシルエンス？王都って他にも有るんですか？」
「ここはハンフロージェン王国の王都、スカルトパシオン。そしてこの国の北東に隣国が有るの。
そこはオブゼルヴ王国という国で、王都がアズレシルエンスっていう名前なの」
「北東？それってシアネントが有る方向じゃなかったっけ・・・」
その時点で気の毒そうな顔を向けてくるサフィーラを、焦った様子で見るダスクの顔は血の気が引いて青ざめて見えていた。黒炎も困った様な仕草でピンと立っていた耳を伏せ、尻尾も元気無く垂れていた。
「シアネントはオブゼルヴ王国の領地よ。残念だけど乗る船を間違えたみたいね」
落ち込んだダスク達の様子に、サフィーラは心配そうな顔で更に悪い知らせを伝える。
「落ち込んでるところに悪いんだけど、追加で悪い知らせがあるわ。
まだ誰も知らない事だけど、今朝、王様が幽閉されてしまったの。
その影響で王都からの出入りが禁止されてしまったって話よ」

「え!?それは本当の事ですか?王都から出れなかったら国に戻れないじゃないですか」
「この国のイザコザに巻き込んでしまってごめんなさいね。
これから王都内は色々あるから、貴方達は宿に泊まってジッとしていた方がいいわ」
無言のまま動けないダスク達を見て、離れ難い思いもあるサフィーラではあったが、ソラリスのもとに早く戻りたい気持ちもあってすまなそうな顔になる。
「ごめんなさい。ソラ様の側に戻らないと。短い間だったけど楽しかったわ」
「謝らないで下さい。サフィさんのせいじゃ無いんですから。ソラの側に居てやって下さい」
「またね、サフィ。ソラによろしくね」
「元気でね。それじゃあまた」
その言葉を残してサフィーラは人々の中へと消えていった。それを見送ったダスク達は、その場に力無く座り込んで溜息を吐く。
「この先どうすればいいんだろう?」
「おおごとだよね。ボク達に出来ることなんてあるのかな?」
それっきり無言になったダスク達の目には、陽の傾いた港の光景も入っておらず、自分達のこの先の運命も分からないままだった。

王都に到着したと思っていたダスク達は、実際は隣国の王都に来てしまっていた。自分達の間抜けさに怒りを感じながら、先の見えない状況に落とされた事を考えると全身の力が抜けてしまう。ダスク達は自国の王都に辿り着けるのだろうか。そしてその前にスカルトパシオンを無事に出る事が出来るのだろうか。

勘違いと足止め（後書き）

楽しんで頂けたでしょうか。続きも早く読んで貰えるように頑張ります。

赤都の事件：油断（前書き）

同じペースを守るのは大変ですね。
とりあえず今年も終わりなので、もしかしたら次話から数話を書き収めで早めに投稿するかもしれません。

赤都の事件：油断

周囲は傾いた陽の光に照らされて真っ赤に染まっている。聞こえるのは波の音と海鳥の鳴き声、船の集まっている場所から聞こえて来る人々の喧騒だけである。港の一角、灯台の建っている場所はほとんど人気（ひとけ）が無く、居るのは力無くしゃがみ込んだ人影と側に寄り添う動物の姿だけだった。人影の方は、くすんだ黒色の全身鎧を装備して二つの巨大な装備を傍らに置いた、ボサボサの黒髪と優しそうな黒瞳の十代半ば位の少年で、名前をダスク・ウォールと言う。動物の方は、ピンと立った三角の耳と狐の様に大きい尻尾を持つ艶やかな黒い毛皮が美しい、ルビーの様に紅く輝く瞳が特徴的な四足の獣で、名前を黒炎と言う。衝撃の出来事が続いたダスク達だったが、目に映る刻々と変わっていく風景を見ているうちに気持ちが落ち着いてくるのを感じる。立ち止まる事は全く考えておらず、進んで行かないと辿り着けるものも辿り着けないのだから、クヨクヨしていても始まらない。自分で決めた事なのだから自分の足で立ち上がるべきだ、そう思ったダスクは黒炎へと視線を向ける。黒炎の方も待っていたかのようにダスクと視線を合わせて頷くと、嬉しそうに尻尾を振った。

「さあ、行こうか。こんなのはボク達らしくないからね」

「うん。一緒に進もう。自ら（みずか）諦める事は絶対にしない」

力強く頷き合ったダスク達は、装備や荷物を整えると、これから何が出来るのかを知る為に人の多い場所へと情報収集に向かおうと足を踏み出した。

ザワザワッ

人が集まっている場所に近付くにつれて、船が停泊している桟橋の辺りから普段よりも大きな人々のざわめきが伝わって来る。何が起きているのか確認しようとそちらへ視線を向けると、船へと続く桟橋の入口に武装した兵士の壁が出来ていた。兵士の前には、船の持

ち主や労働者、船客等が人だかりを作っている。歩いて近付くにつれて、ダスク達の耳に兵士へと投げられる人々の抗議の声が届いた。
「港の封鎖が始まってるから当たり前だけど抗議したくなるよな」
「船の仕事って街にとって大事なんだよね？あんまり長くは続かないのかな？」
「普通ならそうだけど、サフィさんの言っていた事が本当なら分からないな」
「人生って何が起きるか分からないって本当だね」
「大げさだって言いたいところだけど、今は同意したい気分だよ」
「あ、あっちに立て札があるよ。何か分かるかもしれない」
黒炎の示す方向には、木製の立て札に何かが書かれた羊皮紙が貼られている。興味をかられたダスクは、黒炎に続いてその前に向かった。他にもたくさんの人が書かれている事を読もうと集まっているので、手前で黒炎を肩に載せてから文字が読めるギリギリの位置に立つと、邪魔にならない様に縮こまる。
「とりあえず2週間は王都からの出入りが禁止されるみたいだ。商売人に関しては厳重な調査を通過すればそれよりも早い段階で出入り出来るらしい」
「足止めされてたら商売にならないもんね。それにしても2週間か～、ちょっと長いよね」
「うん。僕達は早く自国に戻らないといけないから、2週間は痛いな」
小さな声で話しつつ、ダスク達は同時に溜息を吐く。思っていた以上に足止めが長くなりそうだと分かって、春までに戻れるか不安になってくる。黙っているダスクを見て、何かに気が付いた様子の黒炎が注意を引く様に兜を軽く叩く。ハッとしたダスクは、黒炎の紅い瞳に視線を合わせた。
「ちょっと気になった事があるから話せる場所に行こう」
囁く言葉に頷いたダスクは、人垣から抜けて移動し、人気が無い場所で黒炎を降ろすと地面に座る。

「気になった事ってなんだい？」
「足止め中って宿に泊まらないとダメだよね。
　ボク達って宿運が無いみたいだから、早めに長く泊まれる宿を探した方がいいんじゃない？」
「なるほど。確かにそうだ・・・今のうちに宿を探しに行こう」
立ち上がったダスクは、肩に黒炎を載せ直すと、中央通りへと向かう。道ではあちこちで立ち止まって話をしている人々の姿が目に入ってくる。既にほとんどの人の耳に王都封鎖の話が入っている様で、同じ事を考えている人が居るに違いないと思っているダスクの足取りを速めていく。いくつも宿屋を回るが、ほとんどが満室になっていて焦りを募らせる。諦めムードが高まる中、中央通りから城へと続く道に入った所にある宿屋の、客室ではなく納屋を借りる事が出来た。親切な宿屋の主人が、藁の束を運び入れてくれて簡易的なベッドもこしらえてくれる。納屋の扉には鍵に加えて内側に閂（かんぬき）も付いているので、とりあえずの安全は確保出来そうであった。宿代はひとまず1週間分を前払いしたが、納屋なので割引いてくれて懐具合には優しい結果になった。泊まる場所が決まったダスク達は、安堵の息を吐いて床に座り込む。
「はぁ、見付かって良かった」
「そうだね。それにしても、ボク達って納屋みたいな所に縁があるのかな」
「そうかもしれないな。でも、最初の町の様な事は勘弁して欲しい」
「ダイジョブだって。ここは悪い感じはしないからね」
「良かった、黒炎がそう感じるならそうなんだろうな」
「安心したらおなかが減ってるのを思い出しちゃった。何か食べに行こうよ」
「着替えたら晩飯に行こうか。昼から何も食べて無いからさすがにキツイ」
頷き合ったダスク達であったが、安心感からの笑顔も空腹で力の無いモノになる。装備を全て外し、汗をかいた身体を濡らした手拭い

で拭いてから着替えたダスクは、考える様な視線を鎧に向ける。それに気が付いた黒炎は、ダスクの脚に前足を載せて頷く。
「簡単には持ち出せないよ。たまには身軽な格好でいいんじゃない？」
「うん。しばらくここで暮らすんだしいいか」
そう言ったダスクは、鎧と装備を組み合わせて納屋の隅に置く。鎧と装備は、コツの要る取り外し方なので、おそらくダスク本人じゃないと簡単には外せないだろう。鎧の状態に納得がいった様に頷き貴重品だけを持つと、ダスクは黒炎を促し納屋から出て施錠をする。宿屋の主人に外出の旨を伝えて中央通りへと向かった。すれ違う人々の顔は一様に暗く、御触れが出る前とは全く違う場所に来たかの様である。ダスク達は昨夜の晩飯を食べた場所と同じ屋台の集まっている場所に行くと、肉の串焼きと野菜スープを頼んで空いている席に座った。食事をしているうちに色々な話が耳に入ってくる。
「数週間前から王家のゴタゴタが噂になってたみたいだ。
武装した人が多かったのは荒事目当ての傭兵とかが集まってきてるらしい」
「ふ～ん、王様ってのも大変なんだね。でもこうなってくると情けないな～って思っちゃうけど」
「偉い人同士で争う暇があったら、この前の子供達の為に何か出来る事があるだろうに」
ダスク達の心の中では王家に対する評価が下がりっぱなしになっているようだった。
「あちゃぁ」
黙って食事をしていたダスクの耳に、そんな黒炎の言葉が飛び込んでくる。何かと思って黒炎の見ている方向へ視線を向けると、酔っ払い数人に絡まれている黒髪の女性の姿があった。酔っ払いは全員軽装鎧を装備した傭兵らしき人間で、女性一人ではどうしようもない状況に見えるのに、黒髪の女性の連れらしき金髪の男性とフードを被った赤髪の女性は我関せずという顔で食事を続けている。その

時、酔っ払いの一人が黒髪の女性の腕を掴んで自分の方に引き寄せようとする。それを囲むように立っている酔っ払いの仲間達も囃し立てる様に声を上げた。

ドガッ

止めるかどうするか迷いながらも立ち上がったダスクの目の前で、腕を掴んだ酔っ払いの男が突然真後ろに吹き飛ぶ。唖然とした顔の酔っ払い達の視線の先には、片足を綺麗に真っ直ぐ水平に伸ばした黒髪の女性の姿があった。数瞬後、ハッとしたように怒りの顔になった酔っ払いの仲間が黒髪の女性へと殺到する。脚を踏み出しかけたダスクではあったが、面白いように次々と蹴り飛ばされていく酔っ払いに心配は無用と思い視線を外して席に座った。

ザワッ

その瞬間、辺りにざわめきが広がり、ダスクは視線を引き戻される。その時には全て終わっていたらしく、目に映るのは蹴り飛ばされて山になった酔っ払い達だけであった。疑問が顔に出ていたらしく、黒炎がダスクの脚に前足を載せて注意を引く。

「最後に残った酔っ払いの人がナイフを出したんだよ。

その瞬間に女の人の連れの男の人が素早く奪って、女の人の目の前に酔っ払いの人を押したんだ。

そこにドンピシャで女の人のキックが炸裂して、後は見ての通り人山の一部になっちゃった」

「すごいな、あの一瞬でそこまで動けるなんて。特にすごいのはお互いを信じて動ける絆の強さだな」

「ボク達も絆の強さは負けないけど、あの人達もなかなかやるね」

頷き合ったダスク達は握った拳と前足を突き合わせてニヤリとした。

蹴り飛ばされた酔っ払い達は一人もテーブルや他の客にぶつかる事も無く、隅の邪魔にならない場所に積み上げられており、黒髪の女性の技量の高さに驚かされる。周囲の客達も感嘆の視線を向けているが、当の黒髪の女性本人はつまらなそうな顔で自分の席に戻って食事を再開していた。フードを被った赤髪の女性が、酔っ払いを

あしらった黒髪の女性をからかったらしく、金髪の男性が間に立って宥めている。その様子を見ていたダスクの視線に気付いた金髪の男性が視線を向けて一瞬だけ微笑んでくる。我知らずジッと見てしまっていた事に気が付かされたダスクは、バツの悪そうな顔になって食事へと戻る。それからは何事も無く、気が付いた酔っ払い達も実力の違いを思い知らされて逃げる様に去って行った。食事が終わったダスク達は、腕利きの女性達の事が気になって後ろ髪を引かれる思いであったが、さっさと現在の拠点である宿屋へと戻る為に席を立つ。今日一日は疲れる事ばかり起こったので、早く休息を取りたくなったからだ。ダスクは黒炎を肩に載せると、あっという間に人波に消えていった。

その後姿を、どこか面白そうに見送る金髪の男性の視線には全く気が付かなかった。

ガチャ

宿屋に戻り戸締りも確認したダスクは、毛布で黒炎の寝床を作り、藁の簡易ベッドに倒れ込む。藁は良く陽に当ててあり、良い匂いがしてすぐに眠気が襲ってくる。その誘惑に抗いながら、寝床に丸くなった黒炎へ視線を向ける。

「明日は、消耗品とかを補充しに行くつもりだけど、黒炎は何か案はあるかい？」

「うにゃ、ん？キミに任せるよ。・・・むにゃ」

「はぁ、ほぼ寝てる。まあいいや。足りない物が有れば、その都度考えよう」

溜息を吐きつつも、自分も眠気に勝てないダスクは『おやすみ』の言葉も最後まで言うことも出来ずに、落ちる様に眠りの世界へと突入していった。

チュンチュンチュン

早朝でも暖かく感じる空気の中で早起きの小鳥達の鳴き声が、納屋の屋根の上から聞こえて来る。窓の無い室内は、板の隙間から差し

込む陽の光だけが光源になっており、ちょうどダスクの顔に当たる場所だったので、少し唸って抵抗していたが諦めた様に眩しげに目を開ける。昨日の疲れが少し残っている眠そうな顔で欠伸をすると、藁のベッドの上から起き上がる。その気配を感じたのか黒炎も目を開けて起き上がった。

「おはよ～、うにゃ、まだ眠いな～」

「おはよう。すごく眠そうだな」

「うん。なんだか疲れが抜けてなくて・・・」

「僕も同じだよ。やっぱり精神的な疲れのせいかもしれないな」

「あぁーーっもうっ！こんなのは今日だけにしとこうよ」

「それがいい。今日は買い物ついでに美味しい物でも食べて気分転換しよう」

「やった！いろんなヤツ食べようよ」

「良いよ。これも必要な出費だから、ドンと来いっ」

一気に元気になった黒炎に苦笑しながら、手拭いを持ったダスクは納屋から黒炎に続いて外に出る。共に伸びをしながら朝の涼しい空気を思いっきり吸って吐いているうちに完全に目が覚めてきた。ふと裏庭と言うには狭い場所の隅に目をやると、井戸があるのに気が付く。王都を歩き回っているうちに井戸の数が少ない事に気付いていたダスクは、この宿屋は当たりだったと内心で喜んでいた。井戸水で顔を洗ってうがいをすると、手を皿にして黒炎にもうがいをさせ、水に濡らして絞った手拭いで嫌がる顔を拭く。さっぱりしたダスク達は、ゆすいだ手拭いを干して背嚢を持つと、施錠をしてから宿屋の主人に外出の挨拶をして中央通りに向かった。

「朝ごはんはあれがいいんじゃない？」

肩に載せないでも歩けそうな状態の中央通りを歩いていたダスク達の先から良い匂いが漂ってくる。匂いに逸早く気付いた黒炎の指し示す方向には、焼きたてのパンを店先の台車で売っている店があった。近付いて行くと、焼きたてのパンとそれを使ったサンドパンがあるのが分かる。新鮮な葉野菜と焼いた鶏肉を挟んだサンドパンと

パリパリのクロワッサンを買ったダスク達は、近くの露店で牛乳も買って港へと向かう。灯台の近くまで行き黒炎を降ろすと、眺めの良い場所に座って朝食を食べ始めた。

「昨日の今日でどうかと思ってたけど、もう出入り出来る人も居るんだな」

「おいしいな～。サンドパンも良いけど、このパリパリのクロワッサンが最高だよ」

「王都に入るのに手間が掛かるせいで高めだけど、新鮮な食材だからなかなか美味しい」

黙々と朝食を食べ尽くしたダスク達は満足した様子になり、笑顔でお腹をさすったり、尻尾を機嫌良い感じに振っている。

「少しここで時間を潰したら消耗品を補充してから昼食かな。その後お菓子でも食べて王都を見学したら夕飯を買って部屋に戻ろうか」

「それでいいよ。今日は食べまくるぞ～」

嬉しそうな黒炎に釣られる様に笑顔になったダスクも、今日が楽しい一日になって欲しいと望んでいた。

予定通りに1日を過ごしながらも、あちこちで脱線して新しい発見をしているうちに、陽が傾き、空や街並みが赤く染まってくる。そろそろ夕飯を買って帰る為に屋台の多い中央通りへと足を向ける。思ったよりも距離があったらしく、中央通りに到着する頃には陽は山に隠れそうになっていた。昼食に魚介の串焼き、今回は赤くて辛いソースをかけられたモノを食べたので、夕飯は持ち運びに便利なパンをまた買っていく。芋のサラダと焼いた牛肉を挟んだサンドパンも朝に食べたモノと比べても食欲をそそる匂いがして、つい多めに買ってしまったダスク達であった。

「あ、昼間にこの道通ったよね。こっちの方が宿屋に早く辿り着けそうだから夕飯も早く食べれるよ」

通り掛った脇道の手前で肩に載った黒炎が囁き（ささや）ながら前足で指し示す。その理由に苦笑したダスクは、黒炎の言う通りに近道らしき脇

道へと向きを変えると、脇道に入った所で黒炎を肩から降ろした。
脇道は人気が無く、ランプも灯っていない為、中央通りを歩いていたダスク達には尚一層暗く感じられる。しばらく歩いているうちに宿屋の有る方向を見失ってしまう。昼間と違って、夜の暗さは土地勘の薄いダスク達にとっては道に迷う事は必然であったのかもしれない。直後の曲がり角を曲がった所で立ち止まったダスク達は顔を見合わせて溜息を吐く。
「うぅ、ごめん。夜だとこんなに分かりにくいとは思わなかったよ」
「いや、僕も同意したんだから同罪だよ。さて、ここからどうすればいいのやら」
辺りを見回してもどっちがどの方向なのかも判別する事が出来ない。ダスクは建物に何か記されていないかを確かめていたが、黒炎はその場で目を閉じてピンと立てた耳をこまめに動かして何かを聞いている様子であった。何も見付からなかったダスクが黒炎に声を掛けようとした瞬間、興奮して尻尾を勢い良く振り始めた黒炎がダスクに視線を向ける。
「あっち、あっちから何か聞こえる。誰か居れば道も聞けるかもしれないよ」
そう言うや否やダスクの答えも聞かずに走り出す。
「あっ、ちょっと待てって・・・はぁ、何があるか分からないってのに」
溜息を吐いたダスクは、黒炎を追いかけて走り始める。鎧が無いのでその走りは実に軽快で、スピードに乗ってグングン黒炎との距離を詰めていった。
　ギンッギンッドガッ
黒炎と並んで走るダスクの向かう先から、金属同士を打ち鳴らす音や何かが倒れる様な音が聞こえて来る。走る足を速めて曲がり角を曲がった所で、視界に修羅場が飛び込んできた。少し広くなっている場所に、攻める方と守る方がくっきりと分かれている。攻める方は全員が黒っぽい服装で顔に鼻の上から顎の下までを覆うマスクを

着けて個人の特定が難しくしており、片手に装備した曲刀で守る方を押し込んでいる。守る方はボックス型の馬車を守る様に半円に並び、赤に揃えた服装と攻める方と同じ曲刀で攻撃を受け止めている。地面には赤服の男が数人血を流して倒れており、黒服の方が断然有利に状況を進めているようであった。思ってもいなかった光景に、ダスク達は動けなくなっており、その間に赤服の半円が崩されて黒服が隙間に突き刺さっていく。

ガシャン

ダスク達の居る場所から近い場所の赤服の男が倒され、その手から曲刀が弾かれてダスクの目の前に滑って止まる。その音に我に返ったダスクは反射的にその曲刀を拾って黒炎の顔を見る。

「黒いから悪いって言いたくないけど、黒い方が悪者っぽいんだが、どう思う？」

「ボクもそう思う。やられちゃってる方を助けた方がいいんじゃないかな」

「うん。言っても無駄かもしれないけど、危ないから黒炎は離れてた方がいい」

「分かってるじゃん。ボクは馬車の方に行くからそっちに敵が来ない様にガンバって」

面白そうな口調でダスクを見る黒炎の紅い瞳を、諦めたような顔で見返したダスクは、素早く戦闘の中心に駆け込みながらもう一本曲刀を拾い、黒服達の突き刺さった先端を受け止めていた赤服の横から襲った曲刀を受け止めて弾き返す。驚いた顔を向けてきた赤服の顔を見返して頷く。

「助太刀します。僕が前に出ますから防御を立て直して下さい」

「すまん、頼んだ」

一瞬悩んだ顔をしたが、躊躇している暇も無いと結論した赤服はそう答えて下がると崩れかけていた防御陣を組み替える。大丈夫そうだと判断したダスクは、目の前の黒服をまさしく力で押し戻して複数の黒服を同時に相手にする。防御だけならしばらくもたせる事が

出来るだろうと、彼我の力を分析したダスクは少しだけ肩の力を抜いて両手の曲刀を扱う。
「馬車の近くの赤服の人っ、黒い毛皮の動物は僕の連れだから気にしないで下さいっ」
背後から動揺する空気が伝わってきたので、大きな声で馬車の近くに居ると思われる赤服に注意を伝える。直後にホッとした風な気配が来たので、ダスクは安心して目の前の黒服達に注意を戻した。
ピーーーー
しばらく一進一退の状況が続いたところで、辺りに高い笛の音が響き渡る。疑問に思ったダスクと赤服達をよそに、黒服達は素早く後退する。終わったのか、とダスク達が思うや否や、そこに黒炎の緊迫した声が飛んでくる。
「あぶないっ!!」
ドガァァァッ
その瞬間、光と音と猛烈な衝撃がダスクと赤服達の中心で弾ける。ダスクを含めてその近くに居た赤服達は一人の例外も無く吹き飛ばされていた。駆けつけようとした黒炎も、その余波で吹き飛ばされ馬車に叩き付けられてしまう。
「いけませんっ、姫っ!」
どこか聞き覚えのある様な声と共に、馬車の扉が開いて人影が飛び出してくる。その人影は、煌びやかな装飾品を身に付け、透き通る様に輝く銀髪を腰まで伸ばしたダスクと同年代の女の子であった。姫と呼ばれた少女は、気を失った黒炎を抱き起こすと怪我の状態を心配そうに確かめる。そこに黒服達が周囲を警戒しながら近付いてくる。隊長格らしき黒服が曲刀を姫に突きつけるが、姫は黒炎の力の抜けた身体をギュッと抱き締めて金の瞳で力強く睨み返す。睨み合いは姫の勝利に終わり、隊長格の黒服は身振りで馬車に乗る様に促すと、もう一人黒服を連れて馬車に乗り込む。黒服達はダスクを含む赤服達の止めを刺すか迷った様子だったが、ここに駆けつけようとする何者かの複数の足音が響いてきたので諦めたらしく、馬車

を囲みながら路地の闇へと消えていった。ダスクはぼやけた視界で一部始終を見ていたが、吹き飛ばされた影響で身体には力が入らず、悔しい想いで馬車を見送っていた。

ザザザザッ

その後に気を失ったダスクや、呻いてる赤服達を囲む様に現れた集団は、ほとんどが同じ赤服を着ており、倒れた赤服達の怪我の具合を確かめたり、傷の軽い者を覚醒させたりしている。後から来た集団の中で赤服を着ていない3人がダスクに気付いて近付くと、金髪の男性がしゃがんで抱き起こし怪我を確認して黒髪の女性の顔を見る。心配そうな顔で頷いた黒髪の女性は、金髪の男性の隣にしゃがんでダスクの傷に手をかざす。黒髪の女性の口が何かを呟くように動くと、その手が優しい光を灯し、その光が傷へと染み込むように消えていく。光と共に傷も消えていき、顰められていたダスクの顔も安らかな寝顔に変わった。

「ベッドで休ませた方がいいわよ」

黒髪の女性の言葉に、金髪の男性は頷きダスクを背負うと、怪我人を担いでどこかに向かう赤服達に続いて路地の闇に消えていった。

ヒヤッ

額に載せられた冷たい感触に刺激されて、深く沈んでいた意識が浮上していくのが感じられる。目を覚ましたダスクの目には知らない天井が見えている。少しの間何があったのか考えていたダスクは、次の瞬間、ハッとした表情になる。

「黒炎っ！」

ダスクはその言葉と共に、額の濡れた手拭いを跳ね飛ばす勢いで上体を起こす。

「助けに行かないとっ！」

慌ててベッドから抜け出そうとしているダスクを、横から伸びてきた腕が押し留める。その腕に抗う様に暴れていたダスクの顔に、先程額から落とした手拭いが絞られずに水を滴らせたまま当てられる。

ビシャッ

冷たさと肌を伝っていく水の感触に、興奮していた頭が強制的に落ち着かされる。顔から落ちた手拭いの向こうには、どこかで見た覚えのある3人の人物が居た。イスに座ってダスクを押さえていたのは黒髪を肩まで伸ばした茶瞳の女性で、神職が着る様な白い服の上から軽装鎧を装備している。その隣には未だに水に濡れた手をプラプラ振っている赤髪を腰まで伸ばした蒼瞳の女性が、黒いローブ姿の上から外套とフードを被ったまま無表情に見ている。恐らくこの女性が水を滴らせた手拭いを顔に当てた犯人だろう。最後は、ベッドを挟んで反対側に居る金髪碧瞳の男性で、青い服の上から銀色の鎧を装備しており、その顔は申し訳無さそうにダスクに向けられている。背丈は金髪の男性がダスクより頭一つ高く、黒髪の女性はダスクと同じくらい、赤髪の女性はダスクより少し低いくらいである。しばらく固まっていたダスクであったが、ビショビショにされた怒りで突っかかろうとする。

「何をっ」

「落ち着け少年。助けてくれた人間に向かってその態度は良くない」

表情を変えずに話す赤髪の女性の言葉に、続く言葉を飲み込んだダスクは言われた事を理解する為に黙って深呼吸をする。

「すみません、頭に血が昇っていたみたいです。助けてくれてありがとうございました」

「うむ、偉いぞ少年。自らの過ちを認めて、キチンと謝罪するのは人間として当たり前の事じゃからな」

「貴女はいちいち言う事が大げさなのよ。君（きみ）、痛い所とかは無い？」

「え～と、はい、大丈夫みたいです。

あと、僕はダスク・ウォールっていいます。ダスクって呼んで下さい」

「了解、ダスクくん。私は、えっと、ミリーって呼んで。それと彼女はバーナで、彼はアルね」

「ありがとうございました、ミリーさん、バーナさん、アルさん」

「うむ、ダスクよ、よろしくしてやろう」
「よろしく、ダスク」
ひとまずの自己紹介を終えた一同であったが、黒炎の事が心配なダスクは改めてベッドから抜け出そうとする。
「僕は家族を助けに行きたいので、そろそろ行きますね」
その言葉に顔を見合わせたアル達だったが、真剣な表情になってダスクの肩に手を置く。その手を焦った様な顔で見ると、ダスクは手の先に見えるアルの顔に視線を向ける。
「ダスク、君の言う家族っていうのは、あの黒い毛皮の動物かい？」
「はい。小さい頃から一緒に育ってきた僕の大切な家族です」
「そっか・・・」
何かを考える体勢になったアルの顔を見るダスクの胸中には焦りの気持ちが強くなってくる。続きを促そうと何かを口にしかけたダスクの目の前で、アルは一つ頷いてダスクの肩に載せていた手に力を込める。
「ダスク、君も一緒に来ないかい？僕達はあの馬車に乗っていた人物、この国の姫を助けに行くんだ。
君も見ていただろうけど、姫が黒炎を心配して守ろうとしたのを一緒に連れて行かれたと聞いている。
一人で情報も無しに行くより、皆で力を合わせて助けに行った方が良いと思う」
それを聞いたダスクもどうしようか考える様に俯く。しかし、考えるまでも無い事だと結論づけたダスクは、アルの顔を見て頷く。
「お願いします。僕一人では黒炎がどこに居るのかも分かりません。力を貸して下さい」
「ああ、こちらこそ君の力を貸してもらうよ。一緒に戦った者達が見事な戦い振りだったと褒めていた」
「ありがとうございます。戦う事しか出来ませんが、よろしくお願いします」
少し明るくなったダスクの顔を見ながら、アルも笑顔になって握手

を交わす。ミリーとバーナもやれやれといった表情で二人の様子を見ていた。

少し休んで顔色も良くなったダスクは、自分の装備等を持って来る為に一度宿に戻りたい旨を伝える。心配そうな顔で見るミリーに、大丈夫だと手を振ったダスクは改めて頭を下げると、建物の出入り口までアル達に付き添われて行く。外を窺っていた赤服が頷いたのを見たバーナが、ダスクに近付いてきて握った手を差し出し、手のひらを上にして開く。そこにはバーナの髪の色と似た小さな赤いトカゲが乗っていた。

「ダスクよ、こやつを連れて行け。戻って来る時にこの場所に案内してくれるじゃろう」

「ありがとうございます」

頭を下げてトカゲを受け取ったダスクは、自分の肩に載せてよろしくという風にトカゲを見る。

「それでは荷物を取りに行ってきますね」

「ああ、何も無いとは思うけど、気を付けて」

そう言うアルに頷いたダスクは扉を開けて、未だに薄暗い路地に飛び出す。建物の外は、もうすぐ日の出が近いらしく少しずつ明るくなり始めている。しかしながら入り組んだ路地には光が届き難く、自分の居場所を特定するのが難しい状態であった。一度中央通りに出ようと明るくなってくる方向にダスクは向かう。方向が分かっているので、あっという間に中央通りに出たダスクは、納屋を借りている宿屋に向かって走り始めた。朝の冷たい空気でも気分はさっぱりとせず、心配する気持ちに囚われそうになる。嫌な想像を振り切る様に駆け抜けたダスクは、宿屋の入口からその勢いのまま飛び込む。驚く宿屋の主人に、納屋から引き払う事を告げると、返事を待たないで納屋に向かう。納屋で装備を整え、慌(あわただ)しく忘れ物の確認をすると、休む間も無く宿屋の主人の所に戻った。余分な宿代を返そうとする宿屋の主人に首を振ったダスクは、鍵を返して脇目も振らずに宿屋を飛び出す。そこから隠れ家のあったと思われる方向に向

けて駆けるダスクは、改めて肩に載せたトカゲに視線を向ける。その視線に応えて、トカゲは尻尾を進むべき方向に向ける。案内に従い曲がりくねった路地を駆け抜けたダスクは、見覚えの有る扉を見付けてその前へと走り寄った。

トントン、トン、トントン、トン

教えられた通りに扉をノックしたダスクであったが、いつまで経っても内部からの応答が無い。もう一度やってみようと手を上げかけたところで、内部から誰何（すいか）の言葉が伝えられた。

「あっ」

うっかりしていたダスクは、自分がここから出た時の格好とは全く違う格好をしている事にやっと気が付く。慌てて兜を脱いで、扉から見えるように顔を向ける。内部から驚いた様な気配が伝わってくると同時に扉が開かれる。それを見たダスクは、素早く中に入ると、人の目を避ける様に急いで扉を閉じた。

「おかえり。それにしても驚いたな。ダスクの装備がそんな重装備だったとは」

出迎えてくれたアル達は一様に驚いた顔でダスクの装備を眺めている。ダスクが持つには重過ぎるのではないかと思ったが、軽々と持ち歩いている様子に次第に感嘆の表情に変わっていった。

「ありがとうございました。このトカゲって頭が良いんですね」

頭を下げてトカゲを返したダスクを見たバーナは、アル達にとっては珍しい、笑顔になって頷く。

「うむ、こやつは妾（わらわ）の自慢の僕（しもべ）だからな。ダスクよ、おぬしはなかなか見所の有る少年じゃな」

笑みを浮かべてその様子を見ていたミリーは、ダスクが両手に持っている装備に興味を引かれたらしく近寄って眺め始める。

「ダスクくん、これって盾と剣だよね？ちょっと持ってみてもいいかしら？」

「いいですけど、重いですよ？筋（すじ）とか痛めない様に気を付けて下さいね」

「あはは、大丈夫よ。私達だって冒険に出てから結構鍛えられてるからね」
「屋台の所で見てました。ミリーさんの蹴りはすごかったです」
「あはは、変なトコ見られちゃったわね。忘れて忘れて、ねっ」
バツの悪い顔になったミリーに、床に置いた盾を持ち易いように向ける。笑顔に戻ったミリーは、盾の裏の持ち手を握って力を込めた。普通にやっても全く持ち上がらない盾に首を捻ると、改めて息を止めて力を込める。その様子に笑顔から疑問の顔になったアルは、自分も持ってみようと剣の方をダスクに求める。ダスクは剣の先を床に置いてから柄(つか)をアルに渡す。ミリーと同じ様に力を込めていくと、腕を震わせながらであったが中段程度の高さまで持ち上がる。諦めたミリーから盾を返して貰ったダスクは、その光景に驚きと賞賛の視線を送った。
「ぷはっ、これは無理だ。ダスク、君はすごいな。
これらの装備に加えて、同じ素材らしい全身鎧もつけて軽々と動いている」
「小さい頃から鍛えてきましたから。それにもう慣れました」
あっけらかんと言うダスクへ剣を返したアルは、疑問に思った事を聞いてみる事にした。
「その剣の鍔(つば)と鞘が外れないように固定してあるのはどうしてなんだい？」
痛い所を突かれたらしく、困った顔になったダスクは少しの間迷ってから口を開く。
「この剣を鍛造してる時に、打つ度に元の色よりも黒が濃くなっていったんです。
それが面白くて調子に乗ってやってたら、ちょっと危なくなりまして・・・」
「危なく？いったいどうなったんだい？」
「すみません。鍛冶屋として恥ずかしいので勘弁して下さい」
「そっか、それなら聞かないよ。それにしても、鍛冶の技も持って

いるんだな」
「はい。この鎧とかを扱う術を含めて父さんに鍛えられました」
「なるほど。さて、ダスク、君は病み上がりなんだから奥の部屋で休んでるんだ。
姫達の情報が入ったらすぐに呼ぶから安心してくれ」
「ありがとうございます。それでは失礼しますね」
そう言って頭を下げたダスクは、顔から笑みを消して奥の部屋へと消えていった。

それを見送ったアルは、何かを思い出すように首を捻っていたが、思い当たる物があったらしく手の平に握り拳をポンと載せる。
「もしかしたら、あれが師匠の言っていた黒炎鋼か」
「師匠って、白焔の事？貴方の剣を鍛えたっていう」
「うん。僕の剣に使われている白焔鋼の対極にあるような金属だって聞いた」
「なるほどのう。おぬしらが持ち上げる事が出来ない程なれば、その可能性が高いじゃろう」
「あんな少年が担い手だったとは驚いたよ」
自分の事についてそんな会話がされていた事に気が付く事も無く、不安な気持ちで黒炎の無事を祈るダスクはベッドに座って俯いていた。

この先、ダスクと黒炎は無事に再会出来るのだろうか。アル達と知り合い、望みが潰えていないと分かったダスクは、『大丈夫』という言葉を何度も呟きながら、情報が入ってくるのをジリジリとした気分で待ち望んでいた。

赤都の事件：油断（後書き）

楽しんで頂けたでしょうか。続きも早く読んで貰えるように頑張ります。

赤都の事件：脱出（前書き）

予定通り、少し早めの投稿になりました。あと2話くらいは今年中にする予定です。

赤都の事件：脱出

建物の外には既に陽が昇り、質の良い硝子とレースのカーテンを通して入ってくる光は強く、分厚い絨毯の敷かれた床を照らしている。しっかりとした石造りの部屋は広く、質の良い調度品で揃えられた室内は綺麗に掃除されており、塵一つ無く清潔に保たれている。中でも存在感を放っているのは、豪華な天蓋付きのベッドである。陽の光がベッドの上で寝ている人物の顔の辺りに差し掛かってくると、嫌がる様に何かに抱きついている手に力を込める。それは思った以上の力強さだったのだろう、ミシミシと音が聞こえそうな位に締め付けられていくと、まるで嫌がる様に動いて見えてくる・・・と思ったらそれは実際に動いていた。

「ふにゃ・・・っ、イダダダダッ！

ちょっ、ちょっと、ヤバイって、出ちゃう、中身が出ちゃうよっ！」

どこかで同じ事があったな、と思いつつジタバタと腕から逃れようとしているのは、ピンと立った三角の耳と狐の様に大きな尻尾を持つ艶やかな黒い毛皮の四足の獣で、特徴的なルビーの様に紅く輝く瞳が救いを求めて彷徨っている、黒炎であった。次第に抵抗が弱まっていき、伸ばされた前足が力無くふわふわの布団に落ちようとしたその時、明るい女性の声と手が割って入る。

「姫様起きて下さいませ。黒炎様が苦しんでおいでです」

さほど力を込めている様には見えなかったが、割って入った手はあっさりと締め付けていた姫の手を外して布団の中に戻す。戒めから開放された黒炎は、再び捕まりたくはなかったので急いでベッドから床に降りる。分厚い絨毯は音を吸収して、少しも足音を立てなかった。自分を救ってくれた恩人はどんな人物かと視線を向けると、背を向け乱れた布団を直しているのは紺色のエプロンドレスと頭にホワイトブリムをきっちり着込んだメイドさんであった。見知らぬ

人間に言葉を話す事に躊躇していた黒炎であったが、布団を直し終わってこちらを振り向いた女性の顔は、自分の知っている人間のモノだったので余計に驚いてしまう。
「なんでサフィがここにいるの！？」
「おはようございます、黒炎様」
笑顔が基本装備のサフィーラらしく、笑みを絶やさずに黒炎に一礼する。彼女は先述した通りにメイドの格好をした、肩でそろえた綺麗な銀髪と輝く碧瞳を持つ小麦色の肌とメリハリのある女性的な体型の可愛らしい顔をした女性で、ソラリスに縁（ゆかり）のある人物である。サフィーラの変わらない笑顔を見ているうちに、黒炎は周囲を確認する余裕が出てくる。キョロキョロした後に、呆然とした様子でサフィーラに問いたげな紅い瞳を向ける。
「ここどこっ！？サフィの事も気になるけど、それよりも気になるのは今居る場所だよ」
「落ち着いて下さい、黒炎様。姫様が驚いてしまいますわ」
「サフィ、その言葉遣いはやめてよ。ボクはくだけた話し方の方が好きだよ」
「かしこまりました。うふふ、黒炎くんが困ってるのが面白かったから、ごめんね」
「もぅ、いきなり訳の分からない状況に放り込まれたボクの身にもなってよね」
「ごめん、ごめん。それじゃあ説明しときましょうか」
ベッドの主がモゾモゾと動いているのを確認しながら、サフィーラは黒炎が気を失ってからの事を説明していった。
「そっか、ボクはあの時気を失った後に、姫って人に助けてもらったんだね」
「はい。ああっ、黒炎くんを庇って狼藉者を睨みつける姫様の気高さと美しさ・・・はふぅ」
「それはいいからっ、サフィ、そのベッドに寝てるのが姫って人？」
「コホン、そうです。姫様が黒炎くんを離そうとしないので一緒に

軟禁されたのよ」
恩人がどんな人物か気になった黒炎がベッドの方へ視線を向けると、ゆっくりとではあったが起きてきそうな気配が伝わってくる。顔を確認しようとした黒炎の視線を遮るかの様に回り込んできたサフィーラは、ウインクをしながら立てた右手の人差し指を左右に振る。
「ダメよ。高貴な御方の寝乱れた姿を見ては失礼になっちゃうわ」
「そういうもんなんだ？」
そう言って黒炎はベッドから視線を逸らすと部屋の内装や調度品を眺め始める。その様子を、子供がお手伝いを上手に出来た時の様に、サフィーラは優しく微笑んで見る。それからベッドの主に近付くと、顔を近づけて何かを囁く。その言葉にハッとした姫は頷くと、サフィーラに傅(かしず)かれながら身支度を整えていく。一通り眺め終わった黒炎は、暇になったので顔は向けずにサフィーラに声を掛ける。
「そういえば、さっきも聞いたけどサフィがなんでここにいるの？」
「えっ？ああ、わたしもたまたまあの馬車に乗っていたの」
「そうなんだ？でもソラ専属とか言ってなかったっけ？」
「えっ！？あ～、えっと、ソラ様の命令で姫様のお世話をしていたんです」
「なるほど。それでこんな事に巻き込まれちゃうなんて、サフィも運が悪いね」
「悪い事ばかりでもないわ。知らない所で姫や黒炎くんに何かあったら嫌だもの」
「優しいねサフィは。でも一緒に捕まってるから身動き出来なくてタイヘンじゃない？」
「そうでもないわよ。姫様の世話役として部屋から出入りが出来るの。厳重にチェックはされるけどね」
「そっか。姫と一緒に居たメイドさんなら自分達でやるよりは楽だもんね」
「は～い、準備出来ました。姫様のご登場でございますよ～」
楽しそうに言いながらサフィーラは姫の手を引いて歩いてくる。姫

がどんな人物かとても興味があった黒炎は、すぐに後ろを振り返ってサフィーラに続いて出てくる人物へ視線を向ける。姫は、透き通る様に輝く腰まである銀髪をそのまま背に流した、サフィーラより少し低い位の背丈で小麦色の肌の控えめな体型の上に、スカルトパシオンではお馴染みの赤を基調としたカラフルな服装を着ている十代半ば位の少女で、美しいと思われる顔は目の下から薄絹が隠しているので、分かるのは力強さを感じさせる金の瞳だけである。各所にちりばめた美しい装飾品を眩しそうに見ながら、黒炎はどこかで見た事が有る様な気がして首を捻っていた。

「良かった、気が付いたのですね」

その声もどこかで聞いた様な気がしたが、姫なんていう偉い人の知り合いは思い浮かばなかった黒炎は、頭を下げて感謝を示してから、確認する様にサフィーラに視線を向ける。

「大丈夫。姫様もあなたが話せる事は知っているから」

「そっか。ありがと～、姫。助けてくれたってサフィに聞いたよ」

黒炎の誰でも変わらない言葉遣いに、何かを言いかけたサフィーラだったが、姫が頷くと了解した風(ふう)に下がる。

「礼には及ばないわ。こちらの面倒事に巻き込んだ形になったのですから」

「でも、助けてもらったんだから『ありがとう』だよ」

「ふふっ、それなら『どういたしまして』と応えましょう」

笑顔で話す姫と黒炎を、サフィーラは優しい笑顔で見守っている風情である。

「ところで、姫ってなんて名前？姫だけじゃなんか寂しいし。

ボクは黒炎っていうんだ。よろしくね」

「私(わたくし)は、フラムフィール。フラムって呼んでいいわ」

「よろしく、フラム」

「むむむ、黒炎くん、せめてフラム姫って呼んでくれないかしら。じゃないとわたしが怒られちゃうわ」

「そうなんだ？じゃあ、よろしく、フラム姫」

「私は構わなかったのですが、サフィが言うなら仕方がありませんね」

「サフィが怒られたらカワイソウだもんね」

困った様な顔になっているサフィーラを見て、フラムフィールと黒炎は顔を見合わせて笑う。途中から笑いに加わったサフィーラも合わせて、仲の良い友達が集まった時の様に楽しそうな雰囲気になっていた。

そこは円形の石造りの部屋で内装や家具は良い物であったが、少し古く痛んでいる物ばかりだった。置いてある家具は必要最小限のベッドと机と椅子くらいである。窓から見える景色は全て遠く、この場所がかなり高い位置に有る事を示している。窓の反対側には下へ続く階段の入口が四角く暗い穴を開けている。その階段の前には、窓にはまっている鉄格子と同じ物が天井から床までを塞いでおり、唯一の出入り口である鉄格子の扉は大きな鍵で施錠されていた。現在、鉄格子を挟んで二人の男性が向かい合って立っている。階段側に居るのは、銀髪金瞳に小麦色の肌の、長身だが痩せた体型がひょろっとした印象を与える三十代半ば位の男性で、豪華で立派な身なりと美形と言って良い顔なのだが、顔色が妙に悪いので見る者に悪い印象を与えてしまっている。一方、鉄格子の内側に居るのは、同じ銀髪金瞳と小麦色の肌の、長身だがガッシリとした体格が先程の男性よりも大きく見える三十代後半位の男性で、王都の人が普通に着ている服を身に付けているにも関わらず、先程の男性よりも立派な人物に見えて風格も感じさせる。二人は厳しい顔で睨み合っているが、有利なはずの階段側の男性の方が押され気味の様であった。

「兄上、いい加減に王位を譲ると言って貰えませんか？」

「聞けぬな。その言葉が執務室で堂々と発せられたなら我が心も少しは揺れたかもしれぬがな。

此度（こたび）の様に魔法で眠らせて監禁するなど王者ではなく卑怯者のする事ぞ」

「ふんっ、強気で居られるのも今だけだ。目の前で娘が泣いて頼めば気持ちも変わるだろうさ」
「おぬしっ！そこまで落ちたか・・・王族に生まれながら王というものが分かってないようだな」
「分かってるさ、兄上より私の方が優れているのだからな。父上さえ判断を誤らなければ・・・」
「そういう所が駄目だと何故気が付かない」
「ははは、何とでも言うがいいさ。王として力を示せば良いのだから」
そう言って背を向けると、階段側に居た男性は虚勢と分かってしまう態度で、振り返ることも無く階段を降りていった。残された男性は大きく溜息を吐くと、悲しげな表情で既に誰も居ない階段へ視線を向ける。
「あやつも不憫な奴ではあるが・・・。フラム、不甲斐ない父を許しておくれ」
その言葉は誰にも聞かれず石造りの部屋に消えていった。

「さて、これからボク達はどうすればいいと思う？」
自己紹介をしてお互いに落ち着いたところで、黒炎はフラムフィールとサフィーラの顔を見ながら問いかける。顔を見合わせた一同は最後には方針を決定してくれそうなフラムフィールへ自然と視線が集まる。
「わ、私ですか！？えぇっと、その、サ、サフィに任せますわ」
「わたしに丸投げですか、姫様・・・」
慌てた風にキョロキョロしていたフラムフィールは、サフィーラの顔を見て助けを求める。求められたサフィーラは溜息を吐きつつも、既に何か考えていたらしく、一同の顔を真面目な顔で見て唇に指を当てると、近くに寄るように身振りで伝えてくる。
「聞き耳を立てられているかもしれないので念の為・・・扉の外に見張りの人間が居ます。

うまく部屋に誘い込んでどうにか出来れば部屋から出る事は可能だと思います」

「なるほど、その後をどうするかが問題なんだね」

「わたし達ってほとんど戦闘力が無いじゃないですか。

そのおかげと言えるのかもしれないけど、見張りの数が一人か二人しか居ないのが幸運ですが」

「ボク達は弱っちいからね。部屋から出た後に城から出る方法があればな～」

そこまで大人しく話を聞いていたフラムフィールであったが、じれったくなったのか突然立ち上がって大きな声で何かを言おうとする。

それを予想していたかの様にサフィーラは機先を制してフラムフィールの口を手で押さえて座らせる。

「もがっ」

「あらあら、姫様ともあろう方が、その様なはしたない声を出すなんて。もぅ、ダメですよ～」

「いいから手を離せっ！まったくもう、息が出来ないじゃないかよっ」

「フラム姫って口が悪かったんだね。驚いちゃったよ」

ハッとした様子で慌てて口に手を当てるフラムフィールであったが、ニコニコしたサフィーラが何度か頷いて黒炎の頭を撫でる。

「ごめんなさいね。注意はしてるんだけど、公用語を教えた教師が言葉遣いの悪い人でね」

「なるほど。フラム姫とサフィの言葉が変な発音になってないのは勉強したからなんだね」

「そうなの。王族やそれに仕える人間は公用語を扱う能力を必要とされるから」

納得顔の黒炎を笑顔で見ているサフィーラに、話す邪魔をされたフラムフィールが拗ねた風な顔で割って入ってくる。

「ちょっと、私の話を聞きなさい。言葉遣いは私の不注意でした。サフィ、ごめんなさいね」

「いえ、お気になさらないで下さい。でも声は小さくお願いします」
「分かったわ。とりあえずこの部屋を脱出してから、後の事はその時考えましょう。
　こんな所で話し合ってても何も変わらないわ。お父様の事も心配ですし・・・」
「フラム姫って無鉄砲なんだね。まあボクはそういうの嫌いじゃないけど」
「そうなの、姫様ったら無鉄砲で困ってるのよ。でも面白いから良いんだけどね」
黒炎とサフィーラの言葉を聞こえないモノとしてフラムフィールは話を続ける。
「とにかく、見張りの人間を部屋におびき寄せて処理しましょう。見張りは男性よね？」
「はい。先程わたしが入室する時に居たのは男性が一人でした」
「一人なら丁度良いわね。私が見張りを呼び寄せますのでサフィが色仕掛けで注意を惹きなさい」
「えぇっ、わたしがですか！？」
「私にさせるつもりですか？なんなら命令しても良いのですよ、サフィ？」
「はぅ、分かりましたよ。急いでどうにかして下さいよ。わたしだって女なんですから」
「分かってます。私だってサフィの事は大事ですから」
「心配しないで。ボクも出来る限り手伝うから」
「ありがとう、黒炎くん。君は良い子ね～」
そう言って黒炎の首にギュッと抱きつくサフィーラを、フラムフィールは半眼になって睨む。
「私はずっと見てようかしら」
「冗談ですよ、姫様。わたしは姫様の事も信じていますから、機嫌を直して下さいな」
サフィーラはフラムフィールと目を合わせた後、力を借りるように

一度抱き締めてゆっくりと離す。
「機嫌悪くなんてないわよっ。サフィ、気を付けてやるのよ?」
「はい。ありがとうございます、姫様」
それから一同は、細かい事を話し合う。フラムフィールは手頃な大きさの花瓶を手に持ち、黒炎は一撃で失神しなかった時の為に口に布を突っ込む準備をする。サフィーラは襟元のボタンをいくつか外して胸元をはだけさせソファに倒れ込む体勢になると、深呼吸をしてフラムフィールに向かって頷いた。
「誰かっ、誰か居ませんかっ!助けて下さいっ!」
バタンッ
入口の扉が勢い良く開かれると同時に、見張りらしき男が飛び込んでくる。状況を確認しようと室内を見回そうとしたところでソファに倒れこんでいるサフィーラの姿に気が付いたらしく、足早に駆け寄る。
「どうしたっ、何があったんだ!?」
「む、胸が、きゅ、急に苦しくなって・・・」
「病気か?ちょっと待ってろ。医者を呼んでくる」
「待って。お願い、あなたに助けて欲しいの」
立ち上がりかけた見張りの男の手を取ると、サフィーラは潤んだ瞳でジッと見詰める。
「な、何をすればいいんだ?」
サフィーラの碧い瞳に縫い止められたかの様に動けなくなった見張りの男は、ゴクリと音を立てて唾を飲み込み、視線もメイド服のはだけられた胸元に固定して動かせなくなる。
「苦しくなった胸をさすって欲しいの。お願い、あなたしか頼る人が居ないんです」
「あ、ああ、任せておけ。しっかりとさすってやるからな」
騒がしい心臓の鼓動を感じながら、ゆっくりと手をサフィーラの胸元に伸ばしてくる見張りの男の視界には、もはやサフィーラの姿しか映っていないようであった。その様子を見ながら見張りの男の背

後に近寄っていたフラムフィールと黒炎は、サフィーラの迫真の演技に自分達も引き込まれてしまって動けなくなっていた。その状況に内心焦ったサフィーラの頬には一筋の汗が流れていたが、見張りの男は汗ばむ程苦しんでいると思いつつ色っぽさが増して益々他の物が見えなくなっていく。見張りの男の手が胸元に触れようとした瞬間、サフィーラはよろめいてソファに深く沈み込む。見張りの男の目が胸元に固定されているのを利用して、サフィーラは見張りの男の見えない位置でフラムフィールと黒炎の方へ、笑顔ではあるが怒りを込めた顔を向ける。その表情にビクリとしたフラムフィールと黒炎は、ハッとすると、急いで当初の予定通りの行動に戻った。

ガシャン

室内に花瓶の割れる音が響き、力の抜けた見張りの男の身体が床に倒れ込む。その音は分厚い絨毯に吸収されてほとんど聞こえなかった。急いで見張りの男に近寄ったフラムフィールと黒炎は、完全に失神しているのを確認してから布で口を塞ぎ、その身体をシーツを利用した縄でグルグル巻きに縛り付ける。ホッとしたフラムフィールと黒炎は、その場に座り込むと息を吐いて力を抜いた。その背後には服の乱れを直したサフィーラが仁王立ちで睨んでいた。

「姫様、黒炎くん、先程は一体何をしてらっしゃったのですか？」

「「ひぃっ」」

驚いたフラムフィールと黒炎は、その場に正座と伏せになり、申し訳無さそうに頭を垂れてサフィーラの顔から視線を逸らす。その様子に再び怖い笑顔になったサフィーラはゆっくりとした口調で話を続ける。

「姫様も黒炎くんもわたしがこんな男に汚(けが)されても良いと思っていたんですね」

「そ、そんな事はありませんわ。私は貴女(あなた)の事を本当に大事に思っています」

「そ、そうだよ。ボクだってサフィの事が大事だよ」

「では、何でジッと見ていたんですか？わたしだって本当は怖かっ

たんですよ」
そう言ってサフィーラは顔を手で覆い後ろを向くと、肩を震わせる。
驚きと申し訳無さでフラムフィールと黒炎はサフィーラへと駆け寄り、肩を抱いたり身体を触れ合わせたりする。
「ごめんなさい。言い訳にしかならないけど、貴女の迫真の演技に飲まれていました」
「ごめん、サフィ。ボクもフラム姫と同じだったんだよ」
謝罪をするフラムフィールと黒炎の様子に、サフィーラの肩は震えを増していく。泣いてスッキリして欲しいと思ったフラムフィールと黒炎であったが、震えは大きくなり、なんだか違う感情が伝わってくる気がして困惑する。
「・・・ぷっ、うふふふ、あははは、姫様も黒炎くんも大げさなんだから」
手を外したサフィーラの顔は笑顔になっており、涙の跡は全く残っていなかった。最初から泣いてはおらず、腹いせに嘘泣きをしていたらしい。憮然となったフラムフィールと黒炎ではあったが、自分達にも非はあったので何も言えず、サフィーラが泣いていなかったのが分かってホッとしていた。
「さあ、作戦はうまくいったのですから早く動きましょう。
この見張りの男の人はベッドで布団を被せて姫様の不在を少しでも遅らせられる様にしておきます。
姫様はもう少し目立たないように装飾品は全て外して下さい」
「ベッドまではボクが運ぶから背中に載せてね」
「ありがとう。助かるわ、黒炎くん」
サフィーラはフラムフィールに少し手伝ってもらって黒炎の背に失神した見張りの男を載せ、ベッドに運んで偽装すると、フラムフィールの装飾品を外して鏡台の引き出しに仕舞う。準備が整ったところで、サフィーラは一同を見て頷いた。
「それでは今から部屋を出ますが、最初はわたしについて来て下さい。

見張りの人間が通らなそうな場所を選んで進み、空き部屋にご案内します」

全員で頷いて出入り口の扉へと向かう。扉の向こう側から音がしないか、扉に耳を当てていたサフィーラは、最後に気配に鋭い黒炎に視線を向ける。黒炎がそれに頷いて返すと、サフィーラは音を立てない様にしながら扉を開けた。左右の廊下を人影が無いか確認してから振り返ったサフィーラは、ついて来てという風に廊下に出て走り出す。フラムフィールと黒炎も置いて行かれない様に、その背を追って駆け出した。

いくつもの曲がり角で止まり、人の気配を確認しながら進む一行は精神的にも肉体的にも疲労が蓄積するのを感じていた。足が重く感じる様になり、休みたいと口に出したくなったところでサフィールが立ち止まる。軟禁されていた部屋の有る場所と比較すると装飾も減り、陽もあまり当たらない場所に来ているらしく、先程までと比べて冷たく感じる空気が辺りを覆っている。今曲がった角が最後だった様で、装飾のされていない扉の前に居るサフィーラが振り返ってフラムフィールと黒炎に頷いた。

「ここは使用人の居る棟です。この部屋ならしばらくは見付からないと思います」

そう言って扉を開いたサフィーラに続いて皆で部屋の中へと滑り込む。ホッと一息吐いて、一同は疲れて重くなった身体をくたびれたソファに投げ出した。

「ふはぁ～、見付からない様に歩くのってタイヘンだね～」

「そうですね。さすがの私も疲れてしまいましたわ」

「うふふ、姫様も黒炎くんもお疲れ様でした。ひとまずはここで休んで、次の対策を考えましょう」

「はぁ～い」

「分かりましたわ、サフィ」

それぞれの返事を聞いて笑顔になったサフィーラは、部屋の奥に行くと、お茶の用意をして戻ってくる。紅茶の良い香りが部屋の中に

満ちて、一同はやっと張り詰めていた気を緩める事が出来た。

そこは広い石造りの部屋で、一番北側、一段高くなっている場所に立派な装飾の椅子、玉座が置かれている。その上には、王位を譲るように王へ詰め寄っていた男性、王弟殿下が座っている。疲れた様な表情で座る王弟殿下は、イライラしているらしく、肘掛を殴った拳を強く握り締めていた。

「兄上が素直に王位を譲ると言えば・・・」

コンコン

その時、玉座の間の入口の扉をノックする音が響く。不機嫌な王弟殿下は無視しようかとも思ったが、何度も続くノックの音に、不承不承であったが声を掛ける。

「入れ」

「失礼致します、殿下」

「しばらく人を近付けるなと、命令していたはずだが？」

「申し訳ありません。大事なお話があったものですから、お許し下さい」

「まあよい、それで話とは？」

「はい。王を救おうとする勢力が城へと潜入する計画を立てているそうです」

「あの男は王ではない。余が王であるぞ、間違えるでない」

「はっ、申し訳ありません。それでいかが致しましょうか？」

「ふむ・・・」

何かを考え始めた王弟殿下の様子に、配下の男は跪(ひざまず)いたままピクリともせずに声が掛かるのを待つ。少なくない時間が経った時、ニヤリとした王弟殿下は配下の男に視線を向ける。

「兄上や、その娘は我が手にある。それらをエサにして邪魔な奴等を一網打尽にしてくれよう。

お前の情報源は、逆に偽情報を奴等に伝えられるのか？」

「はい。反逆者の中ではそれなりの地位にある人物です。その辺は

上手くやれるでしょう」
「それは好都合だな。ちょっと近くに来るが良い。我々が・・・」
配下の男を近くに呼んだ王弟殿下は、耳に囁く程度の大きさの声で何事かを伝える。それを聞いていた配下の男も、その内容にニヤリとして頷く。配下の男が命令を伝える為に玉座の間を出て行くのを、王弟殿下は楽しそうな顔で見送っていた。

コンコン
扉をノックする音が突然聞こえて来た一同は、ビクリとして音の聞こえて来る出入り口の扉へと視線を向ける。次の瞬間、ハッとしたサフィーラは、一同に物陰に隠れる様に身振り手振りで指示をした。全員が隠れたところで何者かに扉が開かれる。無言でいると、若い女性の声が掛けられた。
「サフィ？わたし。大丈夫だから出てきて」
その言葉に安心したサフィーラは、フラムフィールと黒炎に頷いて立ち上がる。その視線の先にはサフィーラと同じ、メイドの格好をした女性の姿があった。黒炎達の軟禁されている部屋に戻る前に、既に脱出を考えていたサフィーラは、同僚の女性に簡単な協力だけだが頼んでいたのである。
「良かった、追っ手かと思って焦ったわよ」
「ごめんなさい。簡単な物だけど食事を持ってきたわ」
「ありがとう。今城の中はどうなってるの？」
「なんだか忙しそうに走り回ってたわ。
でも誰かを探してる感じじゃないから、まだばれてないんじゃないかしら」
「そっか、ありがとね。後はこの部屋には近付かない方がいいわ。巻き込まれると悪いから」
「ごめんなさい。わたしも何か手伝いたいけど、足手纏いになっちゃうから・・・」
「いいのよ。あなたは自分の仕事に戻って知らないふりをしといて

ね」
「分かったわ。それじゃあサフィ、それと姫様に・・・ワンちゃん？無事を祈ってます」
「ありがとう、感謝しますわ」
フラムフィールの横で黒炎も頷いて尻尾を大きく振る。その様子を楽しげに見たサフィーラの同僚のメイドさんは、一礼をして部屋から出て行った。それを見送った一同は、せっかくの食事が冷めないうちに食べる事にする。焼きたてのパンと良く煮込まれたシチューは素朴な味で相性が良く、あっという間に食べ終わってしまった。
「おいしかったな～、熱々のシチューはボクの好物だから嬉しかった」
「疲れていたから、尚更美味しく感じましたね」
「そう言って貰えると、あの娘も喜びます。
わたし達が普段食べてる賄いを姫様に食べてもらう事なんてめったに有る事じゃないですから」
「私はこういう料理の方が好きかもしれないわ。気取って食べる食事は肩が凝ってしまいます」
「うふふ、料理長が泣いちゃいそうなお言葉ですね。でも言いたい事は分かります」
「贅沢だな～。ボクだったら贅沢なご飯はいくらでも食べたいけどね」
「料理というよりは、食べる時の雰囲気だと思う。黒炎くんにはちょっと分からないかもね」
「食事は楽しく食べられればいいんじゃないかな～」
「ふふっ、その通りだわ。黒炎も直感的に分かっているみたいね」
楽しく会話をして精神的にもリフレッシュした一同は、今後の方針を考える為にテーブルを囲んでソファに座る。
「腹ごしらえが終わったから、次はこれからどうしようっていう感じだね」
「ですね。わたしはさっきの娘が言ってた事が気になりますので様

子を探ってこようと思います」
「サフィ、それは危険だわ。一人で敵中に踏み込むなんてダメよ」
「ですが姫様、これは誰かがやらないといけない事なんです」
「だったらボクが行こうか？」
「駄目よ。黒炎くんは城の構造とかは分からないでしょ？
それに姫様は問題外、危険だと分かっている事を主にやらせる使用人は居ません。
メイドなら他にもたくさん働いてるから、一番目立たないわたしが適任よ」
無言になったフラムフィールと黒炎は、心配そうな顔でサフィーラを見る。それを見て嬉しそうな顔になったサフィーラは、フラムフィールと黒炎をギュッと抱き締めて一礼する。
「ありがとうございます。姫様と黒炎くんが心底から心配してくれてるのが本当に嬉しいです。
わたしは絶対に無事に戻ってきますから安心して待っていて下さいね。
もし誰かが来た時は音を立て無い様にしてすぐに隠れて下さい」
安心させる様に最後まで笑顔のままだったサフィーラは、外に人が居ないか確認してから扉から出ると、普通の使用人と同じく走らずゆっくりと歩いて城の中心部へと向かっていった。それを見送ったフラムフィールと黒炎は、ジッと扉を見ながらサフィーラの無事を祈っていた。

カチャカチャカチャ
そこは石造りの細長い部屋で、片側は大きなガラス張りの窓があり外の光をふんだんに取り入れている。部屋の真ん中には細長い部屋に合わせた様に長いテーブルがあり、その上座には王弟殿下が座って豪勢な食事を摂っていた。その時、扉がノックされた後に配下の男が入ってくる。
「失礼します。少しよろしいでしょうか？」

「今度は何だ?見ての通り食事中だ、さっさと告げるがよい」
「はっ、悪い知らせと良い知らせがありますが、どちらからに致しましょう?」
「どちらからでもよいっ、さっさとせんかっ」
「はい、失礼致しました。悪い知らせの方ですが、姫様がお逃げになられたそうです」
「は?見張りの者は何をしておったのだ?そやつの首を刎ねいっ」
「どうかお許しを。罰は与えておきますので、姫様を探し出させる人員に加えたいと思います」
「ちっ、必ず見付けるのだぞ。とにかく時間まで城から出させるな」
「分かりました。それで、良い知らせの方ですが、情報提供者が上手い事やったそうです」
「ふっ、それは良い知らせだ。準備の方も抜かり無く整えておくのだぞ」
「畏(かしこ)まりました。それでは失礼致します」
一礼をして大食堂から出て行く配下の男を一瞥(いちべつ)もせずにニヤリと笑う王弟殿下は、食欲が戻った様に食事を再開するが、年代物のワインで流し込みながらほとんどの料理を味見程度だけ口をつけて下げさせていく。下げられた料理は全て捨てられているので、食費を違う事にまわせば救われる者も居るのではないか、と考える人間が出てくるに違いない浪費っぷりであった。

サフィーラが部屋を出てから結構な時間が経ち、フラムフィールと黒炎は不安感が増してくるのを感じる。落ち着かないフラムフィールは何度も立ったり座ったりを繰り返していた。
「落ち付きなよ、フラム姫。サフィだって馬鹿じゃないんだから簡単には捕まらないって」
「それはそうですが・・・サフィとは姉妹の様に育ったので、私は心配でしかたがありません」
コンコン

話をしている最中に、再び扉をノックする音が聞こえてきて、サフィーラの帰りを今か今かと待っていたフラムフィール達は声を上げそうになる。次の瞬間に、ハッとすると、サフィーラの残していった言葉通りに音を立て無い様に身を隠す。それと同時に何者かが無言で入ってきて周囲を窺い始める。その物音を聞きながら、緊張に身を硬くしたフラムフィール達は、騒がしい心臓を静めようとしつつ早く出て行ってくれと思っていた。

「うふふ、ただいま戻りました～。どうです？驚いちゃいました？」

底抜けに明るい声で帰還の声を上げたサフィーラに、無言で立ち上がったフラムフィールはそのまま傍に立つと、サフィーラの頭をスパンと叩いた。

「あぅ、姫様痛いですぅ。

冗談ですよ～、暗い想像ばかりしていたに違いない姫様達に気分転換して欲しかったのに～」

「時と場合を選ぼうよ、サフィ。フラム姫は本当に心配してたんだよ」

黒炎の言葉にフラムフィールの顔を見たサフィーラは、その目尻に涙が光っているのを見ると、優しい表情になってフラムフィールを抱き締める。

「ごめんなさい、姫様。おふざけが過ぎました。心配して頂き、ありがとうございます」

「そうよ、心配したんだからね。まったく貴女ってヒトは・・・」

しばらく抱き合って無事を確かめている二人の様子を、黙って見ていた黒炎であったが、落ち着いてきた様に見えたのでゆっくり近寄り二人を見上げる。

「そろそろいいかい？外の様子はどうだったのか知りたいんだけど」

その言葉に、二人は離れながら目元を軽く拭うと、笑顔になって黒炎の紅い瞳を見る。

「そうですね、サフィ、外はどの様な状況でしたか？」

「はい。あの娘が言っていた通りに忙しそうに動き回っている人間

が多かったです。
　でも、中には何かを探しているらしい者も居ましたので、わたし達が逃げたのはばれている様です。
　おそらく交代の人間が発見したと思いますので、あの娘を疑う必要はありませんよ」
「忙しそうにしている者達が何をしていたかは分かりませんか？」
「申し訳ありません。相当の人数が動いていましたが、何をやっていたかは分かりませんでした」
「謝る必要はありません。貴女は勇気を以って虎穴に入り込んで行ったのですから。
　無事に戻って来れただけでも大したものですよ」
「それで、ボク達はどうすればいいのか、ヒントになる様な事は分かったのかな？」
「はい。何故か正門の辺りには人の姿がほとんどありませんでした。なので、暗くなったら、もしくは最良の時間として明け方に、正門から脱出出来るかもしれません」
「なるほどね。それじゃあその時間までこの部屋は安全だと思うかい？」
「いいえ。何度か移動しておいた方が良いかもしれないわ。姫様よろしいでしょうか？」
「ええ、全て貴女に任せます」
その言葉に頷いたサフィーラは、移動する前に食事をしておこうと、食事を取りに一旦部屋を出る。少しして戻ってきたサフィーラが持ってきたのは前に同僚の女性が持ってきた物と同じ料理であった。
状況が状況だけに、文句も言わず、料理は美味しかったのでそもそも出なかったが、さっさと終わらせると、サフィーラは再び食器を下げに部屋を出ていってすぐに戻ってくる。顔を見合わせた一同は、深呼吸をしてから外の様子を探り、頷いたサフィーラに続いて部屋を出た。その後は何度か部屋を変えつつ、交代に睡眠をとっていく。
幸運にも誰に見咎められることも無く、刻々と時間が過ぎていった。

陽が落ちて暗くなった裏門前の広場には、黒一色に服と軽装鎧を揃えた部隊が整列していた。王弟殿下への忠義か、それよりも欲の為か、少なくない数の人間が集まっている。そこに同じ様な格好に揃えた、他とは違い高価な装備の、王弟殿下が表れると、部隊の前に立ち片手を上げて合図をする。その瞬間、ザワついていた部隊は口を閉ざして姿勢を正した。その様子を満足そうな顔で見た王弟殿下は、そのまま口を開く。

「皆の者、よくぞ集まってくれた。今回の作戦が成功すれば多くの恩賞を与えよう」

その言葉に、部隊の人間は腕を上げて喜びを表す。再び上げた王弟殿下の手に、部隊は静かになる。

「それでは手はず通りに行動するのだ。出発する、門を開けよ」

ギィィィ

軋む様な音を立てて大きな金属製の扉が開いていく。その様子を眺めながら、士気の高い部隊に作戦の成功を確信して笑みを浮かべる王弟殿下であった。

カチャッ

深夜になって辺りが寝静まった頃に、一同は正門に近い部屋に移動していた。扉を開けて室内に入ると、素早く扉を閉める。扉の前には近くにあった花瓶を置いて、何者かの侵入に備えた警報の代わりにしておく。一同は扉から一番離れた場所に、扉から見えない様に座った。

「危ないところもあったけど、無事にここまで来れてよかったね」

押さえた声で話す黒炎の言葉に二人は頷く。

「サフィのおかげですね。貴女の忠勤に感謝しますわ」

「いえ、わたしは当然の事をしただけですから。それに、まだ最後の難関が残っていますよ」

「そうだね。無事に正門から出る事が出来なきゃダメだもんね」

「そうですね。お父様の事も心配ですが、脱出して手勢を集めて戻ってきましょう」
「はい。わたしはどこまでも姫様について行きます」
「ボクも出来るだけ手伝うよ」
「サフィも黒炎もありがとう。私はあなた達と友人になれて嬉しいです」
親交を深めつつ、正門に向かう時間を待つ。時間が経つに連れて一同の会話は減り、無言で過ごす時間が増えてくる。無言になると不安が頭をもたげてくるらしく、不安な気持ちがそれぞれの顔に出ていた。
「大丈夫かしら?外に出られる場所は正門と裏門だけですのに、見張りの数が少ないなんて」
「大丈夫だと信じましょう。わたし達に出来る事は自分を信じて実行する事です」
「そうだよ。ボク達なら出来るって信じようよ」
「そうですね。王族の私が弱気になるなんて情け無いですわ」
「しょうがないって、こんな事は初めてやるんだろうし」
「そうですよ、姫様。わたし達全員が同じ気持ちなのですから、お気になさらずに」
「ええ、ありがとう。私は最善を尽くす事だけを考える事にします」
笑顔で見守るサフィーラと、嬉しそうな様子で尻尾を振る黒炎に、フラムフィールも少し硬いが笑顔を見せる事が出来る。そんな風に、気持ちを上げ下げしつつその時を待っていた一同は、窓の外がうっすらと白んできているのに気が付いた。
「そろそろ行きましょうか」
そう言うサフィーラに続いて立ち上がったフラムフィールと黒炎は、お互いに緊張した表情になっていた。扉の前で外の様子を探ったサフィーラに見詰められて、黒炎も同じ様に気配を探ってから頷く。それを見たサフィーラは、慎重に扉を開いて左右を確認すると、付いて来てという仕草をして廊下を走り出す。それに続いて走り出し

た黒炎の後を、扉を閉めたフラムフィールは遅れないように続いて駆け出す。正門までの道には何故か見張りの姿が見えず、一同は無事に門の前に辿り着く。月明かりが照らす中、見付からない様に物陰に隠れながら正門の開閉装置の周辺を探るが、そこにも人影は無く、訝(いぶか)しげに思ったが、ここがチャンスだと考えたサフィーラは、フラムフィールと黒炎に頷いて開閉装置に手を掛ける。

チャキッ

その瞬間、黒ずくめの人物が現れると、サフィーラの背後から口を押さえて、その喉にナイフをピタリと当てる。動けなくなった一同に、黒ずくめの人物は押し殺した声で制止の言葉を掛ける。

「動くな。動けばこの者の命は無い」

最後の最後で人質になってしまったサフィーラの目に覚悟が表れたが、フラムフィールの懇願する表情に動く事を諦める。黒炎も黒ずくめの人物に隙が出来ないか見ていたが、その気配は全く無かった。一同の心中は諦めで占められていき、全身から力が抜けてしまい抵抗する意欲も無くなってしまう。

「誰か・・・」

救いを求めて呟くフラムフィールの言葉は、白んできた空の闇に溶けて消えていった。

絶体絶命のサフィーラと、眺めるだけしか出来ないフラムフィールと黒炎。救いを求めて祈る姫の言葉に応える者は居るのだろうか。はたして一同の運命はどこに向かって進んで行くのか。それは現時点では、ここに居る誰にも分からない事であった。

赤都の事件：脱出（後書き）

楽しんで頂けたでしょうか。続きも早く読んで貰える様に頑張ります。

赤都の事件：終結（前書き）

あと1話は年内に投稿予定です。

赤都の事件：終結

時間はダスクが隠れ家に戻ってきてからしばらく経った辺りに戻る。ダスクのフルネームはダスク・ウォール、くすんだ黒色の全身鎧と同じ素材の巨大な盾と大剣を持つ、ボサボサの黒髪と優しそうな黒瞳の十代半ば位の少年である。陽が昇り明るくなっても黒炎の行方の情報が入って来ないので、不安と共に焦りとイライラが募っていた。黒炎は、ピンと立った三角の耳と狐の様に大きな尻尾を持つ艶やかな黒い毛皮の四足の獣で、ルビーの様に紅く輝く瞳が特徴的な、ダスクの家族で旅の相棒である。不機嫌そうな顔になったダスクは、部屋の中をうろうろと行ったり来たりし始め、兜を脱ぎ、盾と剣を持ってなくても尚重い全身鎧のせいで、軋む床板の音が部屋の外にまで届いていた。その様子に心配になったアルは、軽くノックをしてから扉を開ける。弾かれた様に扉の方を見たダスクであったが、アルが首を振るのを見て肩を落とした。

「心配するのは分かるけど、もう少し落ち着いたらどうだい？」

「すみません。そう言われても不安でしょうがないんです。

今迄これほど長く離れていた事が無かったので、余計にそう感じるのかもしれません」

「それでも無理やりでもいいから落ち着いた方が良い。そうしないと肝心な場面でミスをする」

「言うのは簡単ですが、一体どうすればいいんですか？アルさん教えて下さい」

その言葉に、何かを考える体勢になったアルは、少しして何かを思い付いたらしく、ダスクへ再び視線を向ける。

「こういうのはどうだい？身体を動かして適度なガス抜きをしてみるってのは？」

「ガス抜き？何をやるっていうんですか？」

「これだよ」

不敵な笑みを見せるアルは、腰に下げた長剣の柄を握って持ち上げてみせる。驚いたダスクではあったが、ムシャクシャしている気分が少しでも発散出来そうな提案に、アルと似た笑みを浮かべた。

ザワザワッ

隠れ家の中庭、とは言ってもそれほど広い物では無かったが、建物に囲まれた四角い空き地の様なもので、見上げると四角く切り取られた青空が見えている。その中庭に居る数人に加え、中庭を臨む窓辺にも多くの観客が集まっていた。その視線の向けられる先には、完全武装のダスクとアルの姿があり、向かい合う二人の横にはミリーとバーナが立会い、注意事項等を伝えている。アル達三人は同年代のようで、ダスクよりも年長の二十歳位に見える。アルは金髪碧瞳でダスクよりも頭一つ高い背丈に青い服と銀色の鎧を纏い、腰に輝く白色の長剣を差している。ミリーは黒髪を肩まで伸ばした黒瞳の女性で、ダスクと同じ位の背丈に神職の着る様な白い服と白い軽装鎧を纏う、回復魔法の使い手である。バーナは赤髪を腰まで伸ばした蒼瞳の女性で、ダスクより少し低い背丈に纏った黒いローブの上から外套とフードを常に被っており、独特な言葉遣いで常に無表情の顔は滅多に変わる事がない。周囲の観客はほとんどが赤に統一した服装をしており、盛んにどちらが勝つかの賭けをして声を飛ばし合っている。賭け率は7：3でアルの勝ちに賭ける人間の方が多かった。注意事項を言い終えたミリーは、呆れた様な顔で二人を見て溜息を吐く。

「まったく、男ってのは・・・とにかく、大怪我しないように気を付けてね。

簡単な怪我なら治せるけど、回復魔法だって万能じゃないんだから」

「その辺にしておくがよい。痛い目を見れば自ずと分かるものじゃ」

バーナに引きずられていったミリーは、壁際に置かれたテーブルの周りに置かれたイスに座る。隣にはふんぞり返る様にしてバーナが座った。

「どちらが勝つと思う？」
「私はこういうのはやめて欲しいわ。どちらにも怪我して欲しくないから」
「つまらん奴じゃのう。弓も引き絞り過ぎれば弦はあっさりと切れてしまう。
それを緩めさせる為に自らその役を務めようとするアルの気持ちが分からんおぬしでもなかろう。
深刻なモノにならないように、この様な形にするのが一番だと思うのじゃが？」
「分かってるわ。だからこそ、私の様な意見も有った方がいいのよ。
それよりも、バーナは単に良い暇潰しが出来て嬉しいだけでしょ？」
「くっくっくっ、当然じゃ。新たな情報が入るまで動けない状態は暇で仕方が無い。
それで、おぬしはどちらが勝つと思う？妾（わらわ）はダスクが良いところまでいくと思うのじゃが」
「またそれ？はぁ、私はやっぱりアルの方が有利だと思うけど。経験の差が大きいし」
「なるほどのう。見たところ装備は互角、後は実戦経験がモノを言うという事じゃな」
カチャッ
その時、金属を触れ合わせる音が聞こえて来る。周囲のざわめきが静まっていき、それに合わせる様に口をつぐんだミリーとバーナの視線の先では、ダスクとアルが体の前に構えた互いの武器の先を触れ合わせていた。ダスクの巨大な盾は壁に立て掛けて置いてあり、大剣を両手で握って構えている。同じ様に長剣を構えたアルの口元には笑みが浮かんでいた。
「盾は要らないのかい？大剣だけじゃ、早い長剣についてこれるかな？」
「大丈夫です。逆に両手で構えた方が集中出来そうなので」

「なるほど。それじゃあ少しずつテンポを上げて行こうか」
「はい。胸を借りるつもりで行きます。よろしくお願いします」
キンッ
その瞬間、武器を引いたアルは素早い斬撃を繰り出す。袈裟斬りや逆袈裟斬り等、何種類もの斬撃をかろうじて周囲の人間が分かる速さで出していく。その全てをダスクは重い大剣で受けて弾いていた。周囲からは観客の感嘆の息を吐く音が聞こえて来る。ダスクの兜に覆われた表情は分からないが、同じであろうアルの笑みが、未だに二人が本気になっていない事を示している。その場で動かず数十の斬撃を交わしたところで、アルは初めて移動して間合いをとった。アルの顔が真剣なものに変わったのを確認した観客のほとんどが固唾を呑んで見守り、自分の唾を飲み込む音さえも大きく聞こえて来るのを感じていた。
ガギッ
一瞬で間合いを詰めたアルの長剣を、ダスクは大剣で受け止める。観客の目には、いつの間にアルが踏み込んだかさえも見えていなかった。そこから再び間合いを取ったアルは、ダスクの周りを回りながら斬撃や突きを放っていく。ダスクはそれらを弾いたり、鞘の面で受けたりしながら最小限の足捌きでアルの動きについて行く。しばらく豪雨の様な攻撃を続けた後、攻めあぐねたと言うよりは、今度はダスクの攻めの番だという風にアルは下がる。それに頷いたダスクは、アルに劣らぬ速さで踏み込み、上段から大剣を振り下ろす。アルとは違って手数は多くないが、長剣で受け流されても身体は流されずに、斬撃を流れる様に縦から横へと繋いでいく。時折突きも入れながら大剣を振る様子は、まるで竜巻のような荒々しさであった。目の前で起きている光景が信じられないくらい高度なやり取りである事に、観客は声も出せずに見入る事しか出来なかった。初めは笑みを浮かべていたバーナも、ここまでの試合は予想外だったらしく、顔色の青くなったミリーと同じく動けなくなっていた。
ガッ

弾かれるように間合いを取った二人は、最後の一撃を放つ為に気息を整え始める。ジリジリと上がっていく緊張感が限界に達しようとした瞬間、その場に轟く様な野太い声が響き渡る。

「やめんかっっっ！！・・・そこまでにしておけ、どちらかが死ぬぞ」

その場の緊張感があっさりと霧散する。武器を下ろしたダスクとアルは、肩で息をしながらお互いに一礼をして武器を収める。アルと兜を脱いだダスクの顔は流れる汗でびっしょりになっており、双方が本気で剣戟を交わし合っていたのが分かる。バツの悪い顔になったアルは、頬をかきながら改めて自分達を止めてくれた人物に頭を下げる。

「止めてくれてありがとうございます。隊長さんが止めてくれなかったらどうなっていたことか。

ダスクの予想以上の強さに我を忘れて戦ってしまいました」

「俺もここまでの試合になるとは思っていなかったがな。ダスクと言ったか、その若さで見事なモノだ」

そう言って、ダスクの顔を見る人物は、王直属の親衛隊の隊長であり、５０代位のガッシリとした体格の巨漢でダスクよりも背が高いアルの頭一つ分も高く、紫の服に紫の軽装鎧を身に着けた、白髪交じりの黒髪と碧瞳の偉丈夫である。王が幽閉されたのは、隊長が不在の時で、任されていた副隊長は怪我をしながらも隊員に連れられて隠れ家に逃れている。

「ありがとうございます。アルさんがうまいこと導いてくれましたから。

試合の見事さを褒めるなら、アルさんを褒めて下さい」

「そんな事は無いよ。僕の力だけじゃここまでにはならない。君の力が高かったからでもあるんだよ」

「素直に賛辞を受けろ。双方の力があってこそなのだから、謙遜が過ぎると嫌味になるぞ」

「そうですね。楽しかったよ、ダスク」

「こちらこそ。ありがとうございました、アルさん」
晴れやかに握手を交わす二人の様子に、ウンウンと頷く隊長の顔は満足そうに笑みを浮かべていた。
「見事、じゃ、ありませーーーん！！」
突然怒鳴られたダスク達三人は、声の掛けられた方向に視線を向けると、一様に困った顔になる。そこには怒りに眉を立てたミリーが、バーナに押さえられながらも厳しい視線を向けてきていた。
「何やってるんですかっ！あのまま続けたら怪我じゃ済まなかっただろうし、下手すれば死・・・」
「落ち着け、ミリー。二人共怪我も無く、結局は隊長殿が止めたのじゃから」
「止めたから良いってわけでもないでしょっ！二人共なに考えてるのよ。
アルも大人なんだからここまでする事ないでしょ」
「ごめん、ミリー。僕が悪かった、許して欲しい」
そう言って申し訳無さそうな顔で微笑んだアルは、ミリーの頭に手を置き軽く撫でる。しばらくなすがままになっていたミリーであったが、大きく溜息を吐くと肩から力を抜いてアルの顔を見る。
「はぁ、もういいわ。二人共無事だったんだから良しとしましょう」
「心配してくれて、許してくれてありがとう」
「ありがとうございます。心配させてしまって、ごめんなさい」
「いいのよ。はいっ、この話はここまでっ」
その言葉と同時に、深呼吸をして笑顔になったミリーに、周りの一同は安心した様に笑顔になる。周囲の観客も、引き分けで賭けがご破算になったにも関わらず、試合内容の凄さにダスクとアルに向けて大きな歓声を浴びせていた。
「そろそろ昼食にしよう。伝えたい情報もあるからな」
そう言った隊長の顔を、ダスク達は驚いて注視する。それにニヤリとした表情で応えると、皆を先導する様に室内に戻る扉へと向かって行った。

食堂兼作戦会議室へ隊長を追い掛けて行くと、先程まで姿が見えなかった副隊長の姿があった。副隊長は、長い銀髪と鋭い金瞳の貴公子然とした３０代位の男性で、長身に赤で揃えた服と軽装鎧を纏っている。入ってきたダスク達には一瞥だけして、隊長に礼をする副隊長の印象は、ダスクには良い物とは感じられず、表情を硬くする。テーブルには既に食事の用意がされており、隊長は上座に座って嬉しそうな顔をしていた。

「おら、お前らも早く座りな。話は食事が終わってからだ。冷める前に頂こうじゃないか」

その言葉に一同は空いた席に座ると、隊長が食べ始めるのを見てから食事を開始する。親衛隊の隊員の手作りらしく、豪快に材料を放り込んであるスープは、味はさておき、疲れた身体を癒してくれた。しばらく食事をする物音だけが聞こえていたが、段々と食事を終える人数が増えていき、最後に隊長が酒の入ったカップを音を立ててテーブルの上に置いたところで完全に静かになる。自分を見詰める周囲の視線をグルリと眺めた隊長は、一つ頷いて笑みを浮かべていた顔を真剣な表情に変える。

「さて、皆が待っていたと思うが、新たな情報とそれに加えて大きな成果を伝える」

そう言った隊長は、副隊長に向けて頷くと、ドカリと席に座る。それに了解の頷きを返した副隊長は、立ち上がって姿勢を正すと、一同を眺めてから報告を始めた。それに因ると、王を幽閉した犯人は王弟殿下であり、場所は城の貴人を罰する時に使う一番高い塔だという事。昨夜誘拐された姫は、城の一室に軟禁されており、あの時馬車に乗っていた者は全て同じ部屋に居るという事。最後に、情報と言うよりは成果で、独自に行った偽情報の流布が成功して、夜中に別の場所に我々が集合する事を信じ込ませる事が出来たらしく、この機に我々を殲滅しようと王弟殿下に決心させたようで、ほとんどの戦力を夜中から明け方にかけて城から誘き出す事が可能になったらしい。最後のところで得意げな顔で髪をかき上げる副隊長の仕

草が、実に嫌味な様子であったと、後でダスクやアル達は頷き合っていた。

「そういうわけだ。皆は夜まで交代で睡眠をとっておくように。肝心の所で眠くて駄目でした、なんて言ったらぶん殴るから、覚悟しておけよ」

それから隊長は、部隊長達に隊員全員に伝えておくように命令した後、席を立ったダスク達の近くに歩み寄ってくると、アルとダスクの顔を見る。

「お前達二人には特に期待してるからな。しっかり寝ておけよ」

「「分かりました」」

二人揃っての返事に、笑みを浮かべた隊長は、二人の肩を掴むと痛い程の力を込めてから戻っていった。副隊長と作戦について話し合うのだろう。それを見送ったダスク達は、揃って部屋を後にする。その背を苦々しそうな顔で見ていた副隊長の眼差しに気付く者は誰も居なかった。

陽が傾き、次第に赤く染まっていく空が、隠れ家の一室の窓から外を、正確に言えば中庭を眺めているアルの目に映っている。昼間の熱狂が嘘だったかの様に、無人の中庭は静かだった。

「ダスクは想像以上に強かったな」

ポツリと呟いたアルの言葉に、イスに座っていたミリーと、ベッドの上で外套とフードを被ったままゴロゴロしていたバーナは、窓辺のアルへと視線を向ける。

「本当に強かったわね。私も鍛えていると思っていたのに、とてもじゃないけどついていけないわ」

「そうじゃのぅ。あの齢(よわい)であの力、どれ程の鍛錬をしたものやら」

感心する二人の様子に、曇った表情のアルは溜息を吐く。いつもと違う暗い雰囲気のアルに、二人は不思議そうな顔を向ける。それを見て頬をかくと、アルは苦笑いを浮かべた。

「いや、あの歳であの力を得るには、どれだけの時間を鍛錬に使っ

たのかなって」
「小さい頃から脇目も振らずに来たんじゃないかしら？」
「ふむ、アルよ、おぬし余計な事を考えてはおらぬか？
ダスクの心根の清い事は一目瞭然。自ら決めた事を苦しむよりは楽しむ気概で貫いたのじゃろう。
黒炎とかいう相棒も常に傍に居たようじゃ。それを不憫とか思うのは余計なお世話だと思うがな」
痛い所を突かれたという顔になったアルは、苦笑いのままだが、気分の晴れた様子であった。
「ごめん。確かに余計な事だね。それにしてもバーナは随分とダスクの事を気に入ったみたいだね。
いつもは他人に興味が無いのに」
「ふんっ、あやつは良いヤツじゃ。おぬしにも似て真っ直ぐに育っておる。
それに、妾の僕（しもべ）を褒めてくれたしのぅ」
その答えがいかにもバーナらしいものだったので、アルとミリーは揃って笑顔になる。
「エリスにも会わせてみたいな。真面目な彼女ならダスクの事を気に入るだろうし」
「そうね、動植物が好きだから、黒炎くんに会わせたら元気になりそうね」
「どうかな？あやつは意外と大きい動物は苦手かも知れんぞ」
そんな感じに会話を楽しみながら、今は療養中の仲間の事を想うアル達であった。

ダスクが寝て起きてみると、窓の外は既に真っ暗になっており、真夜中と呼ばれる時間帯に突入している事に驚いてしまう。アルとの試合が想像以上に疲れたという事に加えて、張り詰めていた気持ちが緩んだのが一番の理由だろう。ダスクは内心、アルに感謝の言葉を呟く。身支度を整えて食堂に行くと、既にほとんどの人間が起

きているらしく、食事を各々で摂っていた。周りを見回していたダスクの視界に、己を呼ぶアル達の振る手が映ったので、自分の分の食事を確保して近くの席に座る。
「おはよう、ダスク。随分長く寝ていたみたいだな」
「おはようございます。アルさんのおかげで緊張がほぐれたみたいです。ありがとうございました」
「気にしないで良いよ。戦力は万全であるにこした事はないからね」
「おはよう、ダスクくん。顔色が良くなってるみたいで良かったわ」
「ミリーさんの回復魔法のおかげでもありますよ。ありがとうございました」
「ふふっ、使った甲斐があったわね」
「おはよう、ダスク。おぬしも疲れは充分に取れたようじゃな」
「はい。バーナさんも顔色が良いみたいで良かったです」
「うむ。妾も充分長く寝たからのぅ」
笑顔で、バーナは除くが、会話をしながら全員が充分な休養を取れたみたいだと、ダスクは安心する。黒炎を助ける為には、アル達の状態も大きく影響するからだ。
パンパン
その時、食堂内に手を叩く音が響く。音の出所へ視線を向けると、隊長が立ち上がっているのが見えた。
「おう、お前ら、半刻後には作戦を開始するぞ。遅れた奴はぶち殺すからな」
それが冗談では無い事を証明するかの様に、隊員達は慌てて食事を終えると、出撃の準備をする為に食堂から飛び出していく。呆気に取られて見送ったダスク達に近寄ってきた隊長は、出撃が迫っているせいか笑顔が猛獣の様に見えていた。
「お前らも同じだぞ。隊員じゃないから拳骨一発くらわすだけだがな」
岩の様な拳が落とされれば、一発でも致命傷になりそうな迫力がある。苦笑いになった一同は、同じ様に食事を終わらせると、準備を

する為に食堂から部屋へと戻って行った。
　時間前に食堂に戻ったダスクの視線の先には、準備を整えた全員の姿が有り、アル達の呼ぶ動作が既視感を感じさせる。隊員たちの表情はいずれも引き締まっており、これからの実戦に思いを馳せているのが分かる。扉が開いて副隊長を伴った隊長が入ってくると、全員が姿勢を正して迎え、今回の作戦の最終確認を待つ。
「うむ。時間前に全員揃っているようだな。そいじゃサクサク説明よろしく」
そう言って場所を副隊長に譲った隊長は、イスにドカリと座る。代わる様に前に出た副隊長の説明に因ると、王弟殿下の部隊は思惑通りに城を出たらしく、時間の猶予は朝日が昇るまで有る見込みである。速やかに城の正門前に移動して潜み、身軽な隊員に先行させて門を開けさせる。その後、王弟殿下の部隊が戻るまでの間に王と姫を救出する。救出する前に王弟殿下が戻ってきた瞬間にこちらの負けが決定する。そういう綱渡りの様な作戦であった。
「質問はあるか？今のうちに言っておけよ、始まったら最後まで止まれないからな」
周りの手が上がらないので、少し考えたダスクは懸念していた事を聞いてみる事にする。
「はい。本当に王弟殿下の部隊は騙されてくれたんでしょうか？」
その質問に不快そうな顔になった副隊長が何かを言おうとするが、隊長が手で制して立ち上がる。
「俺はこいつを信頼している。だから大丈夫だ。
　もしこいつを信用できないなら、こいつを信じた俺を信じてくれ」
その言葉に何も言えなくなったダスクは、大人しく引き下がる。周囲の隊員は、素人の考えだと笑っていたが、アル達は真面目な顔のままであった。心配そうなダスクの顔を見て、アルも同じ事を考えていたらしく、頷いてから囁いてくる。
「最悪の場合も念頭に置いとくべきだな。何があっても動けるようにしとこう、ダスク」

「はい。僕は単身で動けますので、アルさんはミリーさんとバーナさんに付いててあげて下さい」
「ああ、そうさせてもらうよ。だが、君も気を付けるんだよ？」
「ありがとうございます。大丈夫です、単身での実戦には慣れています」
頷き合った二人は、緊張感の増した顔になりながらも落ち着いたまま、もうすぐ始まる作戦の開始を待っていた。

カチャッ

扉を後手に閉めたダスクは、先行するアル達を追いかける。時間になり、目立たない様に5人ごとに隠れ家を出発する隊員たちに続いて、ダスクとアルとミリーとバーナの４人は深夜の路地に走り出る。さすがと言うべきか、アル達は足音も立てずに走って行く。遅れない様に走るダスクも同じく足音を立てていなかった。未だに土地勘の無いダスクは、アル達の姿を見失わない事だけを考えて追いかける。色々な方向に角を曲がりながら走る事しばし、前方に月に照らされた広場と城の大きな影が見えてきた。しばらくして全員が揃った事を確認した隊長は、黒ずくめの細身の影に頷きかける。おそらく、この黒ずくめの人物が先行して潜入し、正門を開ける役割を務めるのだろう。危険な役割を行うだけあって、腕も立ち、隊長に信頼されている人物だと他の隊員達が言っているのをダスクも耳にしている。隊長に頷き返した黒ずくめの人物は、脇目も振らずに城へと駆けて行く。その姿はまるで影の様で、視界に入っていても人だと認識するのは困難だった。あっという間に城壁に取り付くと、少ない出っ張りを探って器用に登っていき、城内へと消えていった。

チャキッ

城壁を越えた黒ずくめの人物の眼下には、隙だらけだが人影らしき物がいくつか動いていたので、腰のナイフを抜いて様子を窺う。どうやら女性らしい人影二つと何か動物の様な影が一つだと確認出来たので、速やかに無力化に入る。現時点では何者か分からないので、

門の開閉装置に近寄っている女性を目標として、その背後に音も無く降り立つと、片手で口を塞ぎ、その喉にナイフをピタリと当てる。
「動くな。動けばこの者の命は無い」
それだけで動けなくなった人影達に、警戒していた心は少し安堵した。そして、もう一人の女性の顔へと視線を向けたところで、弱々しい声が聞こえて来る。
「誰か・・・」
救いを求めた様な女性の言葉は、白んできた空の闇に溶けて消えていくが、丁度その時月の光が女性の顔を照らした。一瞬とまどった黒ずくめの人物は、それが自分の仕える王家の姫の顔である事に驚いたが、念の為に確認の問いを飛ばす。
「貴女はフラムフィール様ですか？」
突然の質問に躊躇していたが、相手が話しの出来る人間だと分かり、胸に希望の光が灯る。
「そうです。私（わたくし）は、この国の王の娘、フラムフィールです」
背後に居る動物の様な影からは見えなかったが、黒ずくめの人物に向けて、顔の薄絹を外して月光に照らされた素顔を見せる。その顔はまさしくフラムフィール姫のモノであり、不敬を行ってしまったと理解した黒ずくめの人物は、ナイフを当てていた女性を離してその場に跪く。
「失礼致しました。わたしは王の親衛隊の者です。王と姫を救う為の作戦に従事しております。
城の外に親衛隊と隊長、副隊長が来ており、協力者と共に城門が開くのを待っております」
「おぉ、親衛隊が王の救助に来ているのですね。早く門を開けて下さい」
「はっ、了解しました」
その言葉と同時に門の開閉装置に取り付いた黒ずくめの人物は、開ける操作を行い始める。その様子を薄絹を戻しながらホッとした顔で見るフラムフィールの傍に、恐怖でフラフラになった女性、サフ

ィーラが歩み寄って彼女を抱き締める。もう一つの影である黒炎も安心した風にゆっくりと尻尾を振っていた。
「良かった。ナイフを当てられた時は、もう駄目かと思いました」
「私もです。もしサフィが死んでしまったらと、絶望感で動けなくなりました」
「ほんとに良かった。ちょうどいいタイミングで救助が来てくれたね」
笑顔になったフラムフィール達の後ろでは、門の開いていく音が低く響いていた。フラムフィールは透き通るように輝く腰まである銀髪を背に流した、ダスクより少し低い位の背丈で控えめな体型の小麦色の肌の上にスカルトパシオンではお馴染みの赤を基調としたカラフルな服装を着ている十代半ば位の少女で、美しいと思われる顔は目の下から薄絹が隠しているので、分かるのは力強さを感じさせる金の瞳だけである。サフィーラは紺色のエプロンドレスと頭のホワイトブリムをキッチリと着た、いわゆるメイドの格好の、肩でそろえた綺麗な銀髪と輝く碧瞳を持つ、ダスクと同じ位の背丈に小麦色の肌とメリハリのある女性的な体型の可愛らしい顔をした女性で、ソラリスに縁(ゆかり)のある人物である。
ギィィィガンッ
重い金属製の門が開くと、跳ね橋を渡った先から親衛隊らしき集団が近付いてくるのが分かる。その中には、見覚えの有るくすんだ黒色の全身鎧の姿があった。跳ね橋を渡って駆け寄った黒炎達の姿に、最初の目的が達せられた親衛隊の面々は嬉しそうな顔になる。ダスクは黒炎に走り寄ると、怪我が無いか全身を確かめる様に眺める。
「怪我とか痛い所は無いかい？本当に心配したんだからな、黒炎」
「あはは、キミは心配性だな。僕は全く心配してなかったよ。キミの力を信じてるからね」
「う、僕だって信じていたさ。でも僕と違って鍛えてないから、怪我とか・・・」
「くっくっくっ、こやつは心配の余り、熊の様にウロウロしていた

のじゃ」
「本当の事を言ったらかわいそうよ。確かにバーナの言う通りだったけど」
「二人共、知っていても黙っていようよ・・・ダスク、すまない」
「いいですよ、もう。とにかく無事だったんだから構いません」
不貞腐れているダスクの様子に、一同は笑顔になる。そこにサフィーラを伴ったフラムフィールが歩いてくると、見慣れないアル達に視線を向ける。
「貴方達が協力者ですね？この度は救出に来てくれて感謝します」
「いえ、僕達は姫の護衛を頼まれたにも関わらず、誘拐の現場に間に合わなかった間抜けです。
　貴女を救うのは我々の義務でもありますので、お気になさらずに」
そこまで話したところで、親衛隊の隊長がフラムフィールの側まで来て跪く。
「姫様、お救いするのが遅れて申し訳ありません。
　王の幽閉にも力及ばず、事が終結したあかつきには親衛隊全体の積を我が一身にて賜りたい」
「立ってください。それは全てが終わってからです。それに悪いのは犯人なのですから」
「はっ、全力を以って王を救います。とりあえず姫様は城から逃れて下さい。ここは危険ですから」
「分かりました。貴方に全てを任せます。それではサフィと黒炎は私と共に参りましょう」
　ボッボッボッ
フラムフィール達が避難しようと足を踏み出すと同時に、広場の周囲に篝火が焚かれる。その数は多く、広場を隅々まで煌々と照らしていた。何が起きたのかと驚いた一同の前に、篝火の周辺に居た部隊が進んでくる。広く間合いを開けたその中心に、部隊を割って出てきた人物が進み出る。
「叔父上っ」

フラムフィールの叫びを聞いた王弟殿下は、ニヤリとした笑みを浮かべてこちらを眺める。突然の出来事に動けないでいると、何故かこちらに居た親衛隊副隊長が進み出て、王弟殿下の横に一歩引いた位置で立つ。訳が分からないでいると、副隊長は王弟殿下と同じ、ニヤリとした笑みを浮かべる。

「まだ分かりませんか？私はここにおられる次期王の親衛隊の隊長になる男です」

言葉の意味がゆっくりと理解されるにつれて、こちらの隊員達に動揺が走る。隊長は怒りに顔を真っ赤にしながら足を踏み出した。

「貴様っ！何故王を裏切ったっ！まさか、王の幽閉にも関わっているのかっ！？」

「ここまできたら言わずとも分かるでしょう？あの怪我は偽装ですよ」

「くっ、叩き殺してやるから、そこにジッとしていやがれっ！」

元副隊長に飛び掛ろうとした隊長に、王弟殿下は片手を上げる。それに反応した部隊が前進すると、威嚇する様に武器を打ち鳴らした。その数は、こちらの数倍もあり、その威圧感に思わず足が止まる。

「動けば余の部隊がそなた達を一人残らず殲滅するぞ」

「ぐっ」

動けなくなった隊長の姿に、満足そうに笑う王弟殿下は、全員に聞こえる様に言葉を発する。

「武器を捨てて余に下るがよい。今なら命だけは助けてやらんこともない」

痛いほど拳を握り締める隊長と、悔しげな隊員達の様子を見ていたダスクは、小さな声で隊長とアル達に聞こえる様に囁く。口の動きは兜に隠れるので心配する必要はなかった。

「ここは僕に任せて王様を助けに行って下さい」

驚いた一同は、視線を動かさない様に気を付けながらダスクへ声を掛ける。

「ふざけている場合じゃないんだぞ。言ってる意味が分かっておる

のか？」
「はい。僕が時間を稼いでいる間に王様を助ければ、この状況も変えられると思います」
「いや、しかし、そんな事が可能だとは・・・」
それまで無言で考えていたアルは、確かめる様にダスクに言葉を掛ける。
「本当に良いんだね？王様を救出に向かえば、君を助ける者は誰も居なくなる」
「はい。言うのは失礼かと思いますが、僕一人の方が良いです。他に人が居ると邪魔になってしまうので」
「そうか、それじゃあそうさせてもらう。隊長、合図をしたら全員を城に向かわせて下さい」
「分かった。すまない、この国の為に命を賭けさせてしまって・・・」
力無くうなだれる姿は、王弟殿下には観念した様に見えるらしく、元副隊長と共に笑みを深める。動き出そうとアルが合図をしようとした時、フラムフィールが制止の声を小さな声で上げる。
「お待ちなさい。彼一人を犠牲にして国を存(ながら)えようとして良いのですか？
皆で戦えば撃退する事も出来るのではありませんか？」
「あのさ、みんな勘違いしてないかな？ダスクは死を覚悟してなんていないよ。
そもそも、あんなヤツラがダスクをどうにか出来ると思うなんて、まったく見る眼がないな～」
子供の様な声で話すのが誰だか分からず動揺する隊長以下隊員達に、兜の下で笑みを浮かべているのが分かる声音でダスクは肯定する。
「その通りですよ。見た感じ手ごわい相手は一人も居ません。
数が多いのなんて僕には関係無いですし、命なんて掛ける程の場面じゃありませんから」
それを聞いた隊長と隊員達は、自分達を安心させようとする言葉だ

と思っていたが、アル達は心配そうにしていながらも信じられる言葉に聞こえていた。
「すまん、任せるぞ。我々に残さず全部倒してしまっても構わんからな」
「君の本当の力が試されるんだね。頑張れよ、ダスク」
「ダスクくん、無茶するなとは言わないけど、怪我したら私が治してあげるからね」
「天晴れ！おぬしの戦い振りは僕に見守らせるから、思う存分やるがよい」
「私の名前はフラムフィール、この国の姫です。王に代わり、この国の代表として心から感謝します」
「終わったらわたしがメイド的に御奉仕してあげちゃうわよ。期待してててね、ダスクくん」
「みんな大げさなんだからな～。
キミの本来の『守る』戦いなんだから、さっさと終わらせちゃってもいいんだよ、ダスク」
「うん。本気の出せる機会なんて少ないから少し嬉しいんだよね、僕」
皆の応援と、やりたかった『守る』戦いに、ダスクは全身から力が湧いてくるのを感じる。巨大な盾と大剣を持ったダスクは、楽しげに笑う王弟殿下と元副隊長の前に進み出る。二人が呆気に取られた瞬間、アルの合図と隊長の号令に従ってダスクを除いた全ての仲間が城へと下がる。慌てて突撃させようとした王弟殿下の眼前に大剣の先を突きつけて動きを封じたダスクの後姿を、すぐに閉められる状態に門扉を動かした居残り組みのフラムフィールとサフィーラと黒炎とその頭に載った赤いトカゲが見守る。
「くそっ、余の親衛隊長よ、あやつを討ち果たすのだ」
「畏まりました、我が王よ。鎧の中身はただの子供です。すぐに終わるでしょう」
してやられた感のある王弟殿下は、顔を赤くして元副隊長に命令す

る。それを受けて、笑みを浮かべたまま近付いてくる元副隊長は隙だらけで、かえって手が出しづらいダスクであった。

「ふっ、子供だからといって手加減はせぬ。しかし、最初の一撃は君に譲ろうじゃないか」

腰から長剣を抜いて構えた元副隊長の言葉に、良いのだろうか、と思いつつ鳩尾（みぞおち）に簡単な突きを放つ。待ってましたと受け流そうとした元副隊長の長剣をへし折りながら進んだ大剣は、そのまま鳩尾に突き刺さり、吹き飛ばされた元副隊長はかなりの距離転がってから止まる。口から泡を吹き、気絶している姿は物凄く滑稽であった。

動けなくなっている王弟殿下をよそに、ダスクは跳ね橋の前まで移動して仁王立ちする。その姿には、一人として通さない気迫の様なものがあり、男性としては小柄なダスクを一回りも二回りも大きく見せていた。

「ちっ、使えん奴め。皆の者、相手は一人だ。速やかに踏み潰し、一人残らず殲滅せよっ！」

「お、おぉぉぉっ！！」

呆気に取られていた王弟殿下とその部隊は、大声を上げて自らを奮い立たせると、武器を抜いてダスクへと殺到する。そのまま人の波に飲み込まれるかと思われたダスクは、向かって右側半分を大剣の一振りで武器をへし折りつつ吹き飛ばし、それに後続が邪魔される間に、反対側へ勢い良く踏み込むと、巨大な盾で武器を持つ手の骨を砕きながら弾き返す。弓矢も部隊の後方から飛んでくるが、全て鎧に弾かれて何の効果も無かった。それぞれが重なる様に向かってくる為、倒された人間が後続の障害になるという悪循環に入っており、ある意味作業の様な状態になってしまう。撃退しながら、予想以上の手応えの無さに、失望した風に首を振る余裕もあるダスクであった。後ろから見ていた黒炎は、ダスクの考えている事が分かって楽しそうに尻尾を振る。

「あ～あ、ダスクってばつまらなそうだな～。魔狼の群れの方が手応えがあったのかも」

「あんなにたくさん相手にしてるのに、つまらないって、ダスクくんって何者?」
「う~ん、ダスクは小さい頃から魔狼相手に鍛えてきたから。
あの程度の戦い方しか出来ない相手じゃ全く手応えを感じ無いんだと思うよ」
「そんなに程度の低い戦い方なのですか?私にはとても激しく見えます」
「うん。魔狼が狩りをする時には、隊列もあるし、役割分担も徹底してるんだよ」
「はぁ、すごいのですねマローとは。もっとすごいのはダスクくんだけど」
ピーーーー
そんな風に会話をしていた黒炎達の耳に、どこかで聞いた様な笛の音が聞こえてくる。その瞬間、下がった部隊の後ろから飛んできた炎の塊がダスクのすぐ目の前に着弾する。
ドガァァァッ
気絶していた仲間もろとも吹き飛ばすつもりで放たれたらしく、少なくない数が鎧を焦がして白い煙を上げている。ダスクの居た場所には煙や砂埃が舞い上がって姿が確認できず、更に追撃をするらしく、炎の塊が部隊の後ろに控えていた魔法使いの手の上に渦を巻いている。魔法使いが炎の塊を飛ばすのと同時に、ダスクの居た場所から棒状のモノが飛ぶ。部隊の隊員が使っていたらしい穂先の折れた槍が、魔法使いを吹き飛ばして失神させると同時に、放たれた炎の塊が再びダスクの居た場所に炸裂した。
ドガァァァァッ
先程よりも強化してあったらしく、破壊力は抜群で、倒れた隊員達を吹き飛ばすと共に、離れた場所の黒炎達の所まで熱気が届く。
「ふはははは、一人で生意気な事をするからだ。跡形も無く吹き飛んだに違いないぞ」
薙ぎ倒されていく自分の部隊に顔色を青くしていた王弟殿下であっ

たが、唯一の魔法使いと引き換えにダスクを倒したと確信して引きつった笑い声を上げる。既に部隊の半数近くを倒された王弟殿下は、殲滅が難しくなってきた事に腹を立てていた。

「よし、城に突入するのだ。まだ我々の方が数は多い。そこの我が姪でも人質にすれば楽であろう」

その言葉に、元気を取り戻した部隊は、未だに煙の晴れぬダスクの居た場所へと突撃する。反撃してくる気配が無く、跳ね橋の木材が見えて来たところでいけると確信した隊員達は、踏み出す足に力を込める。

ドガッドガッバキッ

次の瞬間、気配を頼りにダスクは隊員達を吹き飛ばしていく。足が止まった隊員達の目の前で煙が晴れ、そこから無傷のダスクが出てくるのを見た隊員達は、恐怖で心が折れそうになる。

「ふぅ、煙いし見えないし、魔法を相手にするのは大変だな。

それでも今度は鎧を着ているから魔法なんてほとんど効かないんだけどね」

「悪魔だ。黒い悪魔だ」

隊員の誰が言ったか分からなかったが、失礼な名前で呼ばれたダスクは、不機嫌な様子で荒く足を踏み出す。それに怖気づいた隊員達が、ジリジリと後退していくのを見た王弟殿下は慌てて命令を飛ばした。

「前衛部隊は余を囲んで防御陣を築くのだ。後衛の部隊を前に出せっ！」

その言葉に我に返った隊員達は、すぐさま防御陣を築く。その後方からは何か巨大な装置が前に運ばれてくる。木製の土台に車輪があり、その上に組まれた櫓には大きな『てこ』がその真ん中の軸を中心として片側に岩を載せてあり、もう片方に縛り付けられた数本の縄を複数の隊員が握っている。その縄を複数の隊員が一斉に引く事により、岩が目的の場所に飛んでいくという、いわゆる『投石器』という兵器であった。それが数台運ばれてきて、全てがダスクに向

けて狙いを固定されていた。
「あれはちょっと痛そうだね」
「ちょっとなんだ・・・ダスクくん頑丈なのね」
「岩くらいじゃ鎧に傷も付かないんじゃないかな～。中のダスクは痛いかもしれないけど」
「大丈夫なのですか？あれは普通、人に使う物じゃないと思いますが」
「平気、平気。村じゃもっとすごい事して鍛えてたし」
顔を見合わせたフラムフィールとサフィーラは、もう何も言えなくなり、心の中で無事を祈るだけにする事にした。
「放てっ！連続で放って、逃げられない様にするのだ」
とっておきの秘密兵器を持ち出した王弟殿下は、勝利を確信したらしく、前に出て指示をする。さすがに耐えられないだろうと思う隊員達は、ホッと一息吐いていた。
ドガッドガッドガッ
岩が次々と放たれ、ダスクの頭上から襲い掛かる。次の瞬間、笑みを浮かべていた王弟殿下や隊員達の顔が凍りついた。ダスクは飛んでくる岩を大剣で打ち落としたり、巨大な盾で受け止めていながら全く後退する様子も無く、どこか楽しそうにさえ見える様子であった。怒りか恐怖か分からないが、震える身体を自覚する事も無く、青白い顔に狂気の表れた目で王弟殿下は喚く様に指示を飛ばす。
「全ての投石器を同時に放て。さすがの悪魔も動きを鈍らせるだろうから、全員で突撃するのだ」
前からも後からも恐怖を与えられる状況に、この謀反に参加した事を後悔し始めていた隊員達であったが、もう前に進むしか無いと決意すると、決死の表情で武器を構えた。
「放てっ！」
その言葉と同時に、残りの隊員が全て雄叫びを上げて突撃を始める。同時に飛んでくるたくさんの岩を見ていたダスクだったが、突撃してくる姿を目にして初めて顔をしかめる。さすがに岩全部を受けた

後に、死に物狂いで突撃してくる隊員達全員を相手にするのはきつそうだと思ったからだ。そうしているうちに岩が着弾する。

ドガガガガッ

地響きを上げて着弾する岩の雨に打たれ、ほとんどは巨大な盾で防いでいながらも衝撃で一瞬気を失いそうになる。意識をハッキリさせようと頭を振るダスクへと、武器と一体になったかの様な隊員達が鎧の隙間目掛けて特攻をかけてくる。あてずっぽうでも大剣を振るごとに数人が吹き飛び、大部分を退ける事が出来たが、周囲を囲まれてしまっていては逃れる事は出来ず、いくつかの武器が鎧の隙間に突き刺さろうとする。鎧の構造を熟知しているダスクは、うまく隙間を閉じて防いでいたが、後方に回り込んだ一人の武器が首筋に向かってくるのを見逃してしまう。回り込んだ部隊員の顔には勝利の笑みが浮かんでいた。

ズドッ

背後から肉に金属が食い込む様な音が聞こえてきたダスクは、自分が油断していた事を悟る。周囲の敵も驚いた顔で動きを止めていた。まだふらつく頭では未だ痛みを感じていなかったが、急所の首に攻撃をくらってしまったからには、良くて重症、悪くて致命傷だろう。諦めたくは無かったが、現実を受け止めたダスクは、背後の敵だけでも倒しておこうと振り返る。

「ぐはっ」

そこには予想していなかった光景があった。遅れて呻き声を上げた敵が倒れていく姿と、鞘に収められたままの長剣を構えたアルの姿である。アルの後方からはミリーやバーナ、その他の親衛隊の面々がこちらへと走って来るのが確認できた。

「あははは、助かったんだ・・・ありがとうございます、アルさん」

力が抜けてその場に膝を着いたダスクの所に、心配そうな顔で黒炎達が走って来て囲む。

「油断したみたいだね、ダスク。さすがのボクも肝を冷やしちゃったよ」

「ごめん、黒炎。僕もまだまだ修行が足りないみたいだな」
そんな事を話しているダスク達の前に、王弟殿下達と対する形で親衛隊が陣を構える。そして、親衛隊の人垣の中から立派な格好をした人物が進み出た。
「もうそのくらいでやめておけ。これ以上罪を重ねるのは王族として見苦しいぞ」
「兄上・・・」
現れた人物は王様らしく、銀髪金瞳と小麦色の肌のガッシリとした体格で、王弟殿下と同じ位の背丈であったが、一回りも二周りも大きく見える三十代後半位の男性で、強い光を放つ金の瞳はフラムフィール姫とそっくりなのが親子だと感じさせる。
　王様の登場に、ダスクは初めて、周囲を早朝の朝日が照らし始めている事に気が付いた。篝火の明るさに加えて、集中して戦っていたので、周りの変化に気が付かなかったらしい。
「くっ、何故こんな事に・・・」
ガクリと崩れ落ちた王弟殿下を見て、周囲の部隊員達は揃って武器を放棄し、王様に向かって跪く。王様に頷かれた親衛隊隊長は、親衛隊に命令して、今となっては親衛隊よりも数の減っている部隊と共に王弟殿下も拘束していった。周囲の怪我人達も城から新たに出てきた衛兵達によって、軍の病院へと運ばれていく。それらの光景にホッと息を吐いたダスクは、立ち上がって黒炎を促し、その場を後にしようと足を踏み出す。
「本当に疲れたな。どこかで休んだら国に行く船でも捜そうか」
「そうだね。この事件が早く終わったから、その分早く国に帰れるね」
そんな会話をしながら城から離れていくダスク達に、慌てて制止の声が掛けられる。立ち止まって振り返ったダスク達に駆け寄ってきた隊長は、怒った様に言葉を続ける。
「ちょっと待った。お前達、何を普通に居なくなろうとしているんだ」

「あ、すみません。挨拶もしないで行くのは失礼でしたね。
やっと終わって気が抜けちゃったので、すっかり忘れていました」
そう言ったダスクは、皆が集まっている方へ身体を向けると、大きな声で挨拶をする。
「みなさん、黒炎を助ける手助けをしてくれて、ありがとうございました～！
また機会がありましたら、どこかでお会いしましょう。さようなら～！」
それに合わせて、黒炎も大きく尻尾を振って別れの挨拶をする。手を振り終わったダスクは、隊長に改めて一礼すると、再び黒炎を促して広場の出口へと向かう。
「ちっが～う！！そういう事じゃない。王が正式に礼をしたいと仰っているのだ。
わざわざ城へと招待して頂いてるのだぞ、謹んで招待を受けるのが礼儀というものだ」
慌てた隊長の言葉に、ダスクと黒炎は顔を見合わせる。
「すみません。僕達急いで国に帰らないといけないんです。なので、今回は遠慮させて頂くって事で」
「むぐ、頼む、一日でいいから招待されてくれないか？
国を救ってくれた人間を黙って帰してしまったら、この国が笑いものになってしまうのだ」
再び顔を見合わせたダスクと黒炎は、一日ならいいかと結論して、隊長に向かって頷いた。
「助かる・・・お～い、ダスク殿が招待を受けてくれたぞ。
親衛隊は民が集まってくる前に、広場を片付けて城に撤収するんだ、急げっ！」
その言葉に、岩の破片の山を見て溜息を吐いた親衛隊は広場の片付けを始め、王様を含めた全員が城の中へと向かう。指揮を始めた隊長を残して、ダスク達が城門を通ると、そこには苦笑するアル達三人が待っていた。

「君はすごい奴だな、ダスク。あれだけの事をしておいて普通に去ろうとするとはね」
「うむ、おぬしの活躍は僕を通じて見ておったが、実に見事な戦い振りじゃったぞ」
「ダスクくん、怪我してない？掠り傷でも遠慮なく言うのよ？」
それらの言葉を聞いてもダスクにはピンと来ないようで、不思議そうな顔をしてアルの顔を見る。
「良く分からないです。僕は黒炎を助ける為に参加したついでに、手を貸しただけですよ。
　自分の為に戦ったのだから、お礼を言われる事じゃ無いと思っていました」
「無欲じゃな。益々気に入ったぞ、ダスクよ」
笑顔で肩を叩いてくるバーナに、とまどいつつも笑顔になったダスクは照れくさそうにする。その光景を黒炎は楽しそうに尻尾を振りながら見ていた。それからお互いの無事を喜びながら城内の建物へと向かうダスクの背中を、アルは後ろを歩きながら心配そうな顔で見る。それに気が付いたミリーは、隣を歩くアルの顔へと視線を向けた。
「どうしたの？何か心配事？」
「うん。ダスクの考え方だと、この先色々な事に巻き込まれるんじゃないかと思ってね」
「そうね、あの無欲さは悪人に利用されるかもしれないわ」
「人を見る目は確かだから、騙される事は少ないとは思うんだよ。
　でも、力の無い人達が困ってたら、無償で厄介事に頭を突っ込みそうなんだよね」
「確かにそういう所があるわね、ダスクくんは」
「それが心配なんだよ、お節介かもしれないけど」
「そこが貴方の良い所よ、アル。
　でもそればっかりはダスクくん達自身の問題だから、私達が考えてもしょうがないと思うわ」

「そうだね、この先彼等がそういった場面に遭遇した時に、無事に切り抜けられると信じよう」

その言葉に頷いたミリーは、少し離れていたダスク達との距離を縮める為に、アルを促して駆け足になる。ダスクと黒炎は、二人がそんな会話をしていた事には気が付かず、バーナと楽しく会話をしていた。

事件が終結して、やっと本来の目的地である王都アズレシルエンスへと向かえる事になったダスク達は、王からの正式な礼を受ける為に城に招かれる。ゆっくり休んで英気を養いたいダスクと、城の食事に期待を馳せる黒炎は、今日一日だけではあるが、城での生活を楽しみにして足取りが軽くなっていた。

赤都の事件：終結（後書き）

楽しんで頂けたでしょうか。続きも早く読んで貰えるように頑張ります。

正しい王都へ（前書き）

なんとか予告通りに投稿できました。今年はこれで書きおさめになります。来年もまた宜しくお願いします。

正しい王都へ

ザァァァァ

広い石造りの部屋に水の流れ落ちる様な音が響いている。床は一面に白い大理石が敷かれ、部屋の中央には広い浴槽が掘り下げられており、精緻な彫刻の施された湯口からは途切れる事無く熱い湯が流れ出ている。部屋の四隅には松明が焚かれ、湯気で満たされた空間をぼんやりと照らしている。その浴槽に浸かりながら、どうしてこんな場所に居るんだろう、と考えている人影が居た。その人影はダスク・ウォールという名前の、ボサボサの黒髪と優しそうな黒瞳の小柄だが引き締まった身体を持つ十代半ば位の少年で、ここには無いが、くすんだ黒色の全身鎧と同素材の巨大な盾と大剣を纏って軽々動けるツワモノである。

「はふぅ、気持ち良いねこれ。温泉ってスゴイんだな～」

ダスクの背後から聞こえてきた声の主は、床の上に置かれた巨大なタライに張られた、浴槽と同じ湯に浸かった動物であった。その動物は黒炎という名前の、ピンと立った三角の耳と狐の様に大きな尻尾を持つ艶やかな黒色の毛皮の四足の獣で、最も特徴的なルビーの様に紅く輝く瞳を今は気持ち良さそうに細め、タライの縁に乗せた前足の上に顎を載せてすっかり脱力している。

「うん、気持ち良いな。

温泉に入るのが初めてだからでもあるけど、これが勝手に湧いてくるってのがすごいと思う」

「こっちにお湯入れてよ。ちょっとぬるくなってきた」

「了解。一緒に入れれば良かったんだけど、メイド仲間に頼まれたサフィさんにお願いされたからな。

別に一緒でも構わないと思うんだけど。黒炎は怒ってないのか？」

「べつに～。キミとは違うんだからしょうがないって」

「そっか」

なんとか腕を伸ばせば届く位置にあるタライに、桶で湯を続けて入れていく。溢れさせながら入れ替える事で温度を調節し、黒炎が頷いたところで止める。気持ち良さそうな黒炎の姿を見ながら、再びダスクは湯に深く浸かり、城に入ってからの事を思い返す。

王様を幽閉した事件が終結し、功労者として招かれたダスク達は、各々一部屋をあてがわれ、但し黒炎はダスクと一緒であったが、緊張から開放されて一息吐いていた。細かい傷はたくさんあったが、ほとんど無傷だったダスクは、回復魔法をかけられて全く傷の無い状態になっていた。鎧等の装備を全て外して楽な格好になったダスクは、明日の船探しの事について黒炎と相談をする事にした。

「明日だけど、すぐにアズレシルエンス行きの船が見付かると思うかい？」

「う～ん、やってみないと分からないかも。今度はちゃんと行き先を確認すればダイジョブだよ」

「それもそうか。こういうのはソラが得意そうな気がするけど、居場所が分からないからな」

「サフィに聞いてみればいいんじゃないかな。駄目ならサフィに頼むとか」

「そうしようかな。後でサフィさんに聞いてみよう」

「あ、それよりさ、思い切って王様に船出してって頼んでみよっか」

「そんなの無理に決まってるだろ。港にたくさんあるんだから大丈夫だよ」

「むぅ、言うだけならタダだしいいんじゃないかと思ったんだけどな～」

残念そうに言った黒炎は、フカフカの絨毯に丸くなって大きな欠伸をする。色々あったので黒炎だけじゃなくダスクも疲労感が大きく、すぐにでも眠ってしまいそうな状態であった。一度寝てしまったら、起きるのがどれ程時間を必要とするか分からない。ほとんど眠ってしまいそうになっている黒炎を見ながら、欠伸を噛み殺したダスクは頬をパチパチ叩いて眠気を飛ばそうと努力していた。

コンコン

扉をノックする音が聞こえてきて、いつの間にか意識が飛びそうになっていたダスクはハッとする。視線を落とすと、黒炎が気持ち良さそうに眠っている。再びノックの音が聞こえてきて、それがノックの音だと意識したダスクは、慌てて返事をして扉へと近付き誰何（すいか）の言葉も忘れて扉を開く。

「あらら、いきなり開いたから驚いちゃったわ。せっかちねぇ、ダスクくんったら」

「すみません。ウトウトしていたので待たせちゃったと思って、慌ててしまいました」

「うふふ、みんな疲れてるからね。特に君は頑張ってくれたから尚更だよね」

「ありがとうございます。それでサフィさんは何か僕達に用事ですか？」

「用事が無いと来ちゃ駄目なのかな？」

真面目な顔でそんな事を言うサフィーラに、何故だか動揺するダスクであったが、すぐに笑顔に戻ったサフィーラは面白いモノを見たかの様な顔になる。

「うふふ、冗談よ。王様との謁見があるからお風呂でサッパリしてもらおうかと思って。

案内するから黒炎くんと一緒について来てくれるかな？」

ニコニコ笑う笑顔が標準装備のこの女性は、サフィーラ・ロングという名前で、紺色のエプロンドレスと頭のホワイトブリムをキッチリ着込んだ、いわゆるメイドさんである。肩までの綺麗な銀髪と輝く碧瞳に小麦色の肌をした、女性らしいメリハリのある体型をした可愛らしい顔の女性で、ダスクと同じ位の背丈の二十歳位のお姉さんである。

黒炎を起こしたダスクは、サフィーラに何も持っていかないで良いと言われて、手ぶらで彼女の後について歩いていた。初めてジックリと見る城内は、分厚い絨毯が敷かれ、装飾品も程良く置かれて

いるが、華美な装飾は多くないので、綺麗ではあるが物凄く贅沢をしている訳では無い様であった。先程の部屋も、質の良い調度品で揃えてあったが、金ぴかなモノは無かったので悪い印象は受けなかった。ダスク達の王様に対する印象も少しずつ良くなってきている。しばらく歩いて案内されたのは、湯殿（ゆどの）と呼ばれる場所に繋がっている脱衣所という部屋で、ここで衣服を脱いで湯殿に入り、身体を洗って湯を溜めた浴槽に浸かるという、ダスク達には経験の無いモノらしかった。普段は水を浴びるか、濡らした手拭いで身体を拭くだけなので戸惑っていたが、黒炎の入浴にひと悶着あった後、前述の通りに温泉を楽しむ事になる。

　疲れが湯に溶ける様に抜けていくと、だんだんのぼせてきたらしく、フラフラしてきたダスクはそろそろ出ようと思ったが、何も持ってきてなかった事を思い出す。

「そういえば、サフィさんの言う通りに何も持ってこなかったんだよな。

　出る時に濡れた身体はどうすればいいんだろう？」

「拭くものは用意しておいたから安心してね。それにしても、ダスクくんったらもう出ちゃうんだ？」

ポツリと呟いたダスクの独り言に、何故か返事が返ってくる。

「は？何で返事が返ってくるんだろう・・・うわっ、サフィさん、何でここに居るんですか！？」

何気なく声の聞こえてきた方向を見たダスクの視界に、身体に大きなタオルを巻いたサフィーラの姿が飛び込んでくる。慌てたダスクは、首を元に戻して視界から外すと、顎の下まで湯に沈み込む。

「何でって、戦いの前に約束したじゃないの。御奉仕してあげるって言ったでしょ？」

「いやいやいや、待って下さいっ！僕が思っていたのとは全然違うのですがっ！

　お茶を淹れてくれたり、肩を揉んでくれたり、もっと軽い事だと思っていましたよ」

「それも含むイロイロよ。とりあえず背中を流してあげるから、湯から出て来なさい」
「駄目ですよっ！隠す物も何も持ってきてないんですからっ！
とにかくここから出て行ってください。背中を流すのは結構ですから」
「恥ずかしがらなくても良いんじゃない？せっかくなんだからやってもらえば良いのに」
「そうそう、黒炎くんの言うとおりです。お姉さんが優しく洗ってあげちゃいますよ」
「黒炎も面白がって口を出さないっ！いい加減にしないと怒りますよ、サフィさん」
「ちぇー、残念だけど退散しようかな。脱衣所からは人払いしておくから安心してね」
残念そうに、それ以上に楽しそうな様子で頷いたサフィーラは、言った通りに速やかに湯殿を出て行った。最初からこうなる事が分かっていたかのような潔さであった。溜息を吐いたダスクは、黒炎を促して湯から上がると、タライの湯を流してから脱衣所に人の気配が無い事を確認して湯殿から出る。黒炎は、湯殿を出る前に盛大に身体を振るって湯を飛ばしていた。普段使った事も無いフワフワなタオルで身体を拭いたダスクは腰にタオルを巻くと、火照った身体を冷ますついでに黒炎の身体を拭く。タオルは十枚位置いてあったが、一枚目を絞りつつ何度か使って水気を取り、二枚目ですぐに乾く位まで拭く事が出来た。気持ち良さそうにされるがままになっていた黒炎は、最後に身体を振るわせると、毛はふわりと落ち着き、元の艶やかな状態に戻る。その様子を見ながら、置かれていた服を困惑の目で見るダスクは、着るのをためらっている様に見えた。
「どうしたの？早く服を着ないと風邪引くよ」
「分かってるよ。でも、これってなんかヒラヒラしてて嫌なんだけど」
「それしか無いんだから、諦めてさっさと着ちゃいなよ」

その言葉で観念したダスクは、自分の好みからは随分離れた服を渋々と着ていった。ちなみに、ここに来る時に着ていた服は、サフィーラが持って行ったのか分からないが、どこにも見当たらなかった。
「ぷっ、その服キミに良く似合ってるよ」
「笑っておいて、そんな事信じられるわけ無いじゃないか」
「いえいえ、良く似合っておいでですよ。まるでどこかのお坊っちゃんかと思いました」
いつの間に入って来たのか、笑顔のサフィーラが出入り口の前に立っている。既に元のメイド姿に戻っていたので、ダスクはホッとして安堵の息を吐いた。
「突然現れ過ぎですよ、サフィさん」
「メイドの嗜みでございます。うふふ、現れた時の驚く顔が良いのよね～」
らしい言葉に苦笑するダスクと、頷いて同意する黒炎に、サフィーラも嬉しそうに微笑む。
「お二人ともサッパリしましたか？」
「うん。ボク達温泉って初めてだったけど、本当に気持ち良かったよ」
「気持ち良かったし、サッパリもしました。これだけでも城に招かれて良かったですよ」
「満足して貰えて良かったわ。身支度も出来てるし、そろそろ行きましょうか」
「行くってどこに？」
「君達は何の為にここに来たのかな？これから王様の所に案内するわ」
「そっか、フラム姫の父ちゃんってどんな人なんだろうな～」
「厳しいけど、優しい方よ。わたし達の敬愛する王様です」
「なるほど。怖そうな人だったけど、サフィさんがそう言うなら少し気が楽になります」
「うふふ、それは良かったわ。でも君達ならそのままで大丈夫よ」

そう言って先に歩き出したサフィーラは、ダスク達を先導する様に廊下を静々と歩いて行く。背をピンと伸ばして姿勢良く歩いて行く様は、さすがは城に勤めるメイドだと、普段のふざけた様子からはなかなか想像出来ない姿であった。サフィーラについて行くうちに、次第に周囲の造りが立派なモノに変わってくる。おそらくこちらの区画は公的にも使用されているのだろう、他国の人間に対する最低限の見栄の様なモノなのかもしれなかった。思っていたよりも長い距離を歩いた後、格段に立派な造りの両開きの扉の前で立ち止まったサフィーラがクルリと振り返る。

「準備は良いかな？ダスクくん、黒炎くん」

「ボクは準備する事なんてないよ」

「王様に会うからって、特別準備する事は無いですよ。服はサフィさんが用意してくれましたし」

「うふふ、そう言うと思ったわ。驚かないでね・・・ダスク様達をお連れ致しました」

「驚かないでって、サフィさん？」

サフィーラの言葉を疑問に思ったが、扉の内側へ掛けられた声に反応した何者かが扉を開き始める。

ザワザワッ

扉の隙間からダスク達の姿が見え始めると同時に、室内から大勢の人間が居ると分かる様な喧騒が伝わってくる。扉が完全に開かれたところで、改めて室内に視線を向けると、全く予想していなかった光景が目に飛び込んでくる。室内には、一見して分からない位の人数の着飾った人間がダスク達の事を見ており、次いで大きな拍手が雨の様に降り注ぐ。唖然として固まったダスクは、注目されて居心地が悪くなり、連れのペットだと思われて注目されていない黒炎は、気楽にその様子を楽しんでいた。いつまでも動こうとしないダスクを、苦笑したサフィーラが後ろからそっと押して送り出す。その勢いに乗って足を動かすダスクの進行方向に有る人垣が、それに合わせて割れていく。最終的に両側に分かれて並んだ人々の先には、王

様がダスク達を迎える様に立ち、その傍らには姫であるフラムフィールが一歩引いて控えている。王様は、銀髪金瞳で小麦色の肌のガッシリとした体格で長身の三十代後半位の偉丈夫で、幽閉時と違って立派な王の装いをしている。フラムフィール姫は、透き通る様な銀髪を背にそのまま流し、小麦色の肌のダスクより少し低い背丈で控えめな体型の上から、カラフルな赤を基調とした服と煌びやかな装飾品で飾った十代半ば位の女の子で、美しいと思われる顔を目の下から薄絹で覆っているので、見えるのは力強さを感じさせる明るい金の瞳だけである。その瞳は王様とそっくりで、親子の絆を感じさせた。人々の視線に押される様に王様の前まで進んだダスクは、場の雰囲気に飲まれてガチガチになっている。黒炎はその後ろから、これから何が起きるのかを楽しむ様に、尻尾をゆったりと振っていた。

「そなたがダスクか。此度は我が国の危機を救ってくれて、我等一同感謝している」

渋味の有る低い声が、大きい声では無くても良く通り、室内に居る人間全ての耳に届く。

「いえ、自分の為に協力しただけです。大した事は・・・」

「ふむ、縮こまらずに堂々としていて良いのだぞ?そなたはそれだけの事をしたのだ」

「あ、はい、ありがとうございます」

「広場での勇姿を聞いたが、普段はその様に控えめなのか?」

「すみません。こういうの苦手なんです」

「謝らなくてもよい。そなたが救国の英雄なのは変わらないのだから」

「・・・はい?英雄って僕がですか?」

「当然の事だ。今回の騒動でそなたが一番命懸けの活躍をしたのだからな」

「それは違います。それなら救出に参加した全ての人が英雄と呼ばれる働きをしました」

本当にそう思っているダスクは、王様相手でもそこだけははっきりと否定する。
「ふっ、確かにそうかもしれんな。皆の者、英雄達に乾杯しようではないか」
その言葉に人々はワインの入った杯を手に持つ。ダスクにはそっと近寄ったサフィーラが杯を渡してくれる。抜かりの無いサフィーラは、黒炎の前にもワインの入った皿を置いていた。
「杯を掲げよ。目の前の若き英雄と、余を救ってくれた全ての英雄達に、乾杯っ！」
キンッ
各々が乾杯を叫びながら金属製の杯が部屋中で掲げられる中、ダスクの杯と自らの杯を触れ合わせたのは王様が最初で、次がフラムフィール、ちゃっかり自分の杯を用意していたサフィーラも続いて合わせてくる。
「皆の者、本日は無礼講だ。大いに食べて飲み、英気を養うがよい」
その言葉と同時に、歓声が上がり、部屋の各所で立食形式の食事を食べ始める。しゃがんで黒炎の皿とも杯を合わせていたダスクは、自分の出番は終わったと思ったので、その場を下がってアル達を探そうかと考えていた。
「ダスクよ、もう少し話をしても構わんか？」
「え？あ、はい、何でしょうか？」
「そなたはこの先どうするつもりなのだ？」
「この先？はい、急いで国に帰って学院で色々な事を学ぼうと思っています」
「ふむ、このままここに残って余に仕えようとは思わんか？」
「申し訳ありません。学院で学ぶのは小さい頃からの約束なのです」
「そうか、残念だが今回は諦めるとしよう。話は変わるが、そなたは何か望む物などは無いか？」
「望む物・・・」
そう言って少し考えたダスクは、脚に前足をかけてきた黒炎の顔を

見て頷く。
「もし可能でしたら、アズレシルエンス行きの船を出して頂ければ助かります」
「その様な事でよいのか？
金銀財宝とは言わぬが、まとまった金銭があれば船などいくらでも乗れるのではないか？」
「いえ、僕達はお金は必要なだけ有れば充分です。足りなくなれば自分で稼げますし」
「ふむ、無欲なのだな。それでは余の気が済まぬ。他に何でも良いから言ってみるがよい」
「う～ん、それではお願いみたいなものでも良いですか？」
「遠慮せずともよい。余に叶えられる事があれば可能な限り善処しよう」
「ありがとうございます。
僕達はこの街で身寄りの無い子供達に会いました。
彼等が社会に出られる様に、何か出来ることが有ればよろしくお願いします。
僕達に出せるお金はそちらに回してもらえると嬉しいです」
周りで聞いていた人々は、越権行為でもある訴えをしたダスクと、笑みを消した王様を見て、一様に顔を青くしている。それを見ていたアルは、何か考えがある様で、足早に歩み寄ってダスクの横に並ぶ。アルは、目にかからない程度に揃えた金髪と碧瞳を持つ、ダスクより頭一つ高い背丈の身体に青い服を着た二十歳位の男性で、ダスクと共に救出に加わり大活躍をした一人で、今は鎧と長剣は身に付けていなかった。緊張感のある空気がその場を支配するが、アルのあえて雰囲気を無視した言葉が追い討ちをする様に投げ込まれる。
「王様、我々の報酬も半分はそちらに回して頂けないでしょうか？」
「そなたもダスクと同じ事を言うのだな」
「僕の方はダスクに便乗しただけです。気になってはいましたが、言うつもりはありませんでした」

「それなら何故？」
「彼の心意気に感心したから、という理由ではいけませんか？」
その言葉に、王様は身体を細かく振るわせ始める。周囲の人間は、王様の怒りが落ちるのではないかと思い、巻き込まれる事を恐れて距離を取るように離れて行った。しかし、王様の反応はその予想とは真逆のモノであった。
「くっ、ははははっ、遠慮もせず言ってくれる。よかろう、国策として考えると約束しよう」
「「ありがとうございます」」
同時に言って、同時に頭を下げたダスクとアルは、顔を見合わせて笑顔になる。王様も気分が良さそうに笑いながら、ダスクとアルの肩に手を置いて痛いくらいに力を込める。
「余に意見を言った民としてそなたらの名は忘れんぞ、英雄としての名と共にな」
からかう様に言う王様に、ダスクとアルは一本取られた感じになり、苦笑いで応えていた。恐れ知らずのダスク達に、話をしてみようと思っていた人々は互いに遠慮して距離を取り、それぞれ食事や会話を楽しみ始めた。
その後は黒炎に急かされて様々な料理を皿に取ってやりながら、アルの仲間やフラムフィールに加えて、給仕をたまに抜けてくるサフィーラと会話を楽しみつつ美味しい料理に舌鼓を打つ。質の良いガラスとレースのカーテンを通して入ってくる陽の光は、部屋でウトウトしていた時間が思った以上に長かったらしく、いつの間にか赤く染まっており、見晴らしの良い城から見る光景もまた良い眺めなので、景色も楽しみながらの贅沢な晩餐になった。腹も膨らみ、そろそろ休みたいと思い始めた頃には、夜の闇に街の明かりが輝いて見えて、更に満足感を高めてくれる。王様はいつの間にか姿が見えなくなっており、各自が自由に退場し始めていた。
「挨拶したいから、明日また会ってもらえませんか？」
部屋に戻ろうと思ったダスクは、アル達に言葉を掛ける。全員快諾

したのを見たダスクは一礼した後、満足してウトウトしている黒炎を抱えると、サフィーラに案内を頼んで今迄居た広間を後にする。
迷いも無く先を歩くサフィーラに連れられて、あっという間に部屋に戻って来れたダスクは、サフィーラの開いてくれた扉を通って部屋に入り、毛布で作った寝床に黒炎をそっと降ろす。
「ありがとうございました。サフィさんも早く休んで下さい」
「あら、添い寝をしてあげるわよ。遠慮しなくてもいいからね、御奉仕の一環だから」
「またですか、もうそれはカンベンして下さい」
「うふふ、それじゃあ代わりに、少しお茶に付き合ってもらってもいいかしら？」
「それじゃあ逆の様な・・・はぁ、付き合わせて頂きます」
「ありがとう。そういうところが好きよ、ダスクくん」
呆れた顔でベッドの側から戻ってきたダスクは、テーブルの前のソファに座る。それを笑顔で見たサフィーラは、備え付けのティーセットで紅茶を淹れると、二人分のカップをテーブルに置いてからダスクの正面に座る。紅茶の香りにリラックスしながら、身体も温まってホッと息を吐いたところで、サフィーラはダスクと顔を合わせる。
「本当にありがとう。君が居なかったら姫様やわたし達がどうなっていたか分からないわ」
突然お礼を言うサフィーラに驚くが、感謝を込めた彼女の顔を見て、ダスクも真面目な顔になる。
「気にしなくていいですよ。僕も黒炎を助けて貰っていますから、お互い様です」
「わたしって孤児なのよ。今は亡き王妃様に拾われて、姫様と姉妹の様に育てて頂いたの。
だから王様や姫様はわたしの恩人って事に加えて家族でもあるの」
「なるほど。僕と黒炎の関係と同じだから、わざわざお礼を言ってくれたんですね」

「それも理由の一つ。君はわたし自身も助けてくれたから」
「僕も黒炎も、友達のソラの事もあって、サフィさんの事も友達だと思っているんです。
友達を助けるのは当たり前だから、気にしないで下さい」
「友達か～、ところで本当に添い寝は要らないの？」
「またそんな事を・・・冗談でもそんな事言っちゃ駄目ですよ」
「うふふ、冗談でもないんだけどな～」
イタズラっぽい顔で微笑むサフィーラに、ダスクは困った顔で聞かなかったふりをする。そのままお茶を飲み終わった二人は、揃って立ち上がると、ティーセットを片付ける為に持って行くサフィーラを見送りがてら扉を開ける為に、一足先にダスクは出入り口に向かった。
「お茶美味しかったです。おやすみなさい、サフィさん」
「扉開けてくれてありがとう。おやすみなさい、ダスクくん」
お辞儀をして去っていくサフィーラを見送ったダスクは、既に熟睡している黒炎を避け、ランプの灯を消してベッドに倒れ込む。フカフカのベッドの気持ち良さに、そのまま落ちるように夢の世界に突入していった。

カチャ

窓からの朝日が既に室内を明るく照らしているが、ベッドや寝床で眠るダスク達の眠りを妨げる事は出来ず、扉が開く音も全く効果が無いようであった。扉から入ってきた侵入者が、忍び足でベッドに近付いてくるが、途中で寝ている黒炎が気配に反応して起きそうになる。ピクピク動いている三角の耳に、侵入者は身動きできなくなったが、何でもなかった様に動かなくなった黒炎の様子にホッと息を吐く。再び歩き出した侵入者は、ベッドで寝ているダスクの側まで来ると、その顔を覗き込む様に顔を近づけていく。サラリとダスクの顔にかかる長い髪の毛の下で、何かがダスクの唇に触れた。その感触に刺激されて眠りを覚まされたダスクが目を開くと、視界に

覗き込んでいるバーナの顔が間近にあるのが飛び込んでくる。バーナは、腰まで有る赤髪と蒼い瞳の黒いローブの上からフードと外套を常に被っている女性で、ダスクより少し低い背丈と二十歳位に見える、独特な言葉遣いのほとんど表情を変えない、アルの仲間の一人である。予想外の人物の予想外な登場に、固まったまま見詰め合っていたダスクであったが、唇から顔を動き回る何かに正気に戻る。動き回っていたモノを手に取ってみると、それはバーナの僕（しもべ）の赤いトカゲであった。

「・・・おはようございます。朝っぱらから何してるんですか、バーナさん」

「くっくっくっ、少しおぬしと話がしたくてな。む、何と言ったか・・・ドッキリ？というやつじゃ」

「はぁ、驚きましたよ。とりあえず少し離れて頂けないでしょうか？」

息がかかるくらいの距離で会話をしていたが、さすがに女性とこの距離で話し続ける事に照れるダスクは、そう提案をする。その言葉を聞いたバーナは、面白そうに笑みを浮かべる。

「くっくっくっ、可愛い奴じゃな。妾はそちらで座して待つ。茶でも淹れてくれ」

ベッドから身体を起こしたバーナは、テーブルの前のソファへと歩いていった。ホッとしたダスクは、いつの間にか新しくされていたティーセットで紅茶を淹れると、テーブルの上にカップを置いてバーナの正面に座る。淹れている間に香りで起きて来た黒炎の分も、予備のカップに注いで床へと置いた。

「おはよ～。バーナは朝っぱらからどうしたの？」

飲み難そうにカップから紅茶を飲む黒炎は、頭の上に載せられた赤いトカゲの歩く感触をくすぐったく感じながら、バーナに来室の理由を聞く。いつの間にか、普通に黒炎とバーナが会話をしている事を疑問に思ったダスクであったが、邪魔をしない様に視線だけを向ける。

「うむ。少し話があってな。ちょうど良いからおぬしも聞くがよい」
そう言うと、バーナは被っていたフードを外套ごと脱ぐ。フードが覆っていた場所には、まるでドラゴンの様な角が頭の両側、耳の上に生えているのが見える。それを見ても何も変化が無いダスク達の様子に、バーナは笑顔になって頷いた。
「うむ。さすがは妾が見込んだ者達じゃ。これを見ても毛程も動じぬか」
「え？何か驚くような事ですか？」
「その角かっこいいね。隠してるなんてもったいないよ」
「普通の人間は、この角を見ると恐れたり、奇異の目で見るのでな。鬱陶しいので普段はフードを被る事にしたのじゃ」
「そうなんですか？黒炎みたいに話せるヤツも居るし、それ程驚く事じゃ無いと思いますけど」
「妾の美貌もあって珍しい特徴は良くも悪くも人目を惹く」
「それを自分で言うんですね。珍しさか・・・黒炎もそれで狙われたからな。
黒炎が信用出来る人間の前以外ではしゃべらない様にしたのと同じ事ですね」
「なるほど、すでに体験済みか。馬鹿な人間はどこにでも居るものじゃな」
「ボクは気にしてないよ。気を付けていれば平気だからね」
「前向きじゃな。うむ、おぬしらに話して良かった。別れる前に真実を伝えておきたくてな」
「バーナさんが良い人だって事は分かってますよ。アルさん達やソラやサフィさんに姫も。
見た目が違っても、心が同じモノを良いと感じられれば友達になれます」
「うん。みんな友達だよ」
「ふっ、単純だが、そういうのも嫌いじゃないぞ」
皆で笑い合い、紅茶を飲みながらしばらくの間会話を楽しんだ。そ

ろそろ戻ろうと立ち上がったバーナは、ふと思案していたかと思うと、ダスクに握った拳を差し出すと手の平を上にして開く。そこにはバーナの瞳と同じ色の宝石が載っていた。

「受け取るがよい」

戸惑うダスクに、促す様に頷いたバーナの顔を見て、恐る恐る手に取ってみる。瞳と同じ色と大きさの蒼い宝石は、光の具合でまるでドラゴンの目の様な縦長の筋が見える。一目見て高価な物だと分かる品に、ダスクは慌てて返そうとする。

「こんな高価な物は受け取れません」

「いいから持っておくがよい。それは妾とおぬし達との友情の証じゃ。

手放したりすれば、もれなく天罰が下るじゃろう。くっくっくっ、心しておくのじゃ」

「分かりました。そういう物だったらありがたく頂いておきます」

「もし、おぬしらだけではどうしようもない事態が起きた時、助けが必要になったらそれを握りながら心から祈るがよい。どこからか手助けが現れる・・・かもしれぬ」

そう言って、外套とフードを被ったバーナは扉へと向かって歩き出す。慌てて追いかけたダスク達は、扉を開いて彼女を送り出す。

「ありがとうございます。これは大切に持ってますね」

「ありがと～。バーナと友達になれて良かった」

「うむ。改めて別れは、その時になったら言おう。また後でな、友よ」

笑顔で手を振り戻って行くバーナを見送ったダスク達は、扉を閉めて部屋に戻ると、再びソファに座る。黒炎もソファに飛び乗って丸くなった。

「バーナって良い人だね」

「うん。僕達を心配して来てくれたのかもしれない。これはお守りとして持っていよう」

「ボク達ってイロイロ巻き込まれちゃってるからね～」

「この旅って、悪い出会いもあるけど、それ以上に良い出会いが有るのが良いな」
「そうだね、これからも友達たくさん作っていこうよ」
「そうだな」
これからの旅と、王都と学院での生活にそういう小さな目的があってもいいんじゃないかと、笑みを浮かべたダスクは考えていた。
カチャ
扉が開いた音に視線を向けたダスク達の視線の先には、戻って行ったはずのバーナの姿があった。不思議そうな顔で見ていると、わずかにバツの悪い顔になっていると思われるバーナは黒炎の傍らに来る。
「そやつを忘れておった」
そう言うバーナの視線の先には、黒炎の背中の毛に埋もれる様にして寝ている赤いトカゲの姿があった。
「あ、忘れてた」
「そういえば居たんだっけ」
「ふっ、妾もすっかり忘れておった」
赤いトカゲを回収して、そっと懐に仕舞ったバーナは、苦笑いをして戻っていった。ダスク達は顔を見合わせて同じく苦笑する。それからは、紅茶を飲みながらスカルトパシオンで食べた料理でどれが美味しかった等の話をして時間を潰していた。
昼時になると、呼びに来たサフィーラに連れられて、大食堂で食事をした後、公務の有る王様の代わりのフラムフィールや、親衛隊の隊長に見送られて城を出る。港に向かうのは、兜をかぶらず抱えたダスクと黒炎、アルとミリーとバーナ、そしてサフィーラの5人と1匹である。ミリーは、肩までの黒髪と茶瞳の神職の着る様な白い服の上から白い軽装鎧を着けたダスクと同じ位の背丈の女性で、回復魔法と強烈な蹴りの使い手のアルの仲間の一人である。ダスクの肩に乗った黒炎を笑顔で見る女性陣、但しバーナは表情を変えていないが、は服装や髪型等の身嗜みに関する話をしている。ダスク

はアルと再戦の約束をしながら、お互いの武器の扱いについて意見を出し合ったりしていた。港に着き、船の場所を知っているサフィーラの案内で向かった先には、数日ぶりに見る人物の姿があった。色々あったダスクと黒炎には、その数倍も日にちが過ぎた様に感じられた。

「ひさしぶり～、元気にしてた？ソラ」

「久しぶりって、別れてからそこまで経ってないぞ、オレ達」

不思議そうな顔になった人物は、ソラリス・シールという名前の、透き通る様な銀髪を三つ編みにして背に流す中性的で美しい容姿の、ダスクより少し低い背丈で小麦色の肌の上から赤を基調としたカラフルな服を着ており、力強さを感じさせる明るく輝く金の瞳の持ち主である。ソラリスはまるで全力疾走をしたかの様に、何故か汗を流して荒い呼吸を整えるように深呼吸をしていた。

「色々あったんだよ、ソラと別れてから」

「サフィから少しは聞いてるけど、巻き込まれ体質だよな、お前ら」

「言わないでくれ。改めて言われるとへこむから」

「あはは、これからはもう少し気を付けろよ」

「気を付けても、巻き込まれる時は巻き込まれるんだし、気にしないのがイチバンだよ」

「黒炎の方が大物っぽいな」

顔を見合わせて笑い合うソラリスと黒炎に、少し拗ねた感じになったダスクはソッポを向く。微笑ましそうにその様子を見ていた他の面々は、船の出発の時間が迫ってきたところでダスク達に声を掛ける。

「一緒に戦えて良かったよ、ダスク。あまり話せなかったけど元気でな、黒炎」

「あんまり無茶しちゃ駄目よ、ダスクくん。黒炎くんも、そういう時は止めてあげてね」

「またな、ダスクと黒炎。次に会う時まで元気でいるのじゃぞ」

「御奉仕あんまり出来なかったわね。次回に期待しててね、ダスク

くん。
　今度会った時には君にも御奉仕してあげちゃうね、黒炎くん」
「オレ達はいつまでも友達だ。絶対にまた会おうぜ、ダスク、黒炎」
それからアルは、ダスクと硬く握手を交わし、黒炎の頭を撫でる。
それ以外の人は、鎧でやり難そうであったが、ダスクを抱き締め、
黒炎の首にギュッと抱きついていた。別れを惜しむ一同であったが、
船長からの出発の合図で離れて向かい合う。
「みんな、見送りに来てくれてありがとうございます。みんなの事
は友達だと思っています。
　絶対にまた会いましょう。それでは、また」
「みんな、またね～。みんなとは友達だから、絶対に忘れないし、
忘れないでね～」
それぞれが、その人らしく『また会おう』の言葉を掛けながら手を
振って送り出してくれる。ダスク達は笑顔で振る手と、大きく振る
尻尾でそれらに応えながら船へと歩いていく。船へと上がる階段に
ダスクが足を掛けたところで、後ろから走ってきた誰かがダスクの
首に抱きついて囁く。
「ありがとう」
驚いたダスクが、声の主に目を向けると、それはソラリスであった。
普段の強気な顔ではなく、金の瞳は涙で潤んでいた。
「ありがとう？」
何に対してお礼を言われたのか分からなかったダスクは、鸚鵡返し
に聞く。
「ああ、色々な事をしてくれたから、ありがとうだよ」
「そっか」
細かい事を聞く様な雰囲気じゃなかったので、ダスクはそれだけを
返す。しばらくして、気が済んだソラリスは、涙で濡れているが太
陽の様な満面の笑みになって、そっとダスクを放す。
「それじゃあ、行ってこい。次に会う時までにでっかい男になって
ろよ」

「分かった。これまで以上に鍛えておくよ」
しばし見詰め合ったダスクとソラリスは、握手をして離れる。何か問いたげな黒炎にウインクをしたソラリスは、足早にアル達の居る場所に戻って行った。
船上に上がったダスクと黒炎は、ダスク達を待っていたかのように出航した船の縁から皆を見下ろしながら手を振る。それに応えたアル達の振る手に送られて、船は港から段々と離れて行き、お互いに相手が判別出来ない位の距離まで手を振り続けていた。
「良い人達だったね。また会えるといいな」
「大丈夫、きっとまた会える。そう信じていよう」
「そうだね、信じればきっとかなうよね」
「うん」
別れの余韻にひたりながら、遠ざかるスカルトパシオンへと視線を向ける。きっとまたこの景色を見に来ようと、ダスク達は心の中で決意していた。

空は雲一つ無い快晴で、波も穏やかであり、ダスク達の船出を祝福しているかの様であった。とうとう本来の目的地、王都アズレシルエンスへと向かう船に乗る事が出来たダスク達は、このまま順調に辿り着けるのだろうかと、若干の不安を感じつつも、期待に胸を膨らませていた。

正しい王都へ（後書き）

楽しんで頂けたでしょうか。続きも早く読んで貰えるように頑張ります。

学院生活は始まりますか？（前書き）

あけましておめでとうございます。遅くなりましたが、本年度の書初めになります。またいいペースで投稿出来たら良いなと思っていますので、今年も宜しくお願いします。

学院生活は始まりますか？

港町のシアネントから王都スカルトパシオンまでの船旅と全く同じに順風満帆だった、とは言えないが、それでも順調に船は王都アズレシルエンスへと進んだ。今度は北上する為、風向きが良くなかったが、王様の用意してくれた船の乗組員は腕が良く、船客にはその不都合さがあまり分からなかった。現在船が進んでいるのは、大河アヴァストである。大河アヴァストは大陸有数の大河で、大陸東方から流れてきて王都アズレシルエンスの港に面し、そこから遥か遠くの海へと流れていく川で、通れるのは今乗っている中型の船までである。甲板では一人の少年と一匹の動物が、川風に吹かれながら周囲の風景を眺めている。少年の名前はダスク・ウォール、ボサボサの黒髪と優しそうな黒瞳の小柄だが引き締まった身体を持つ十代半ば位の少年で、船室に置いてあるが、くすんだ黒色の全身鎧と同素材の巨大な盾と大剣を纏って軽々動けるツワモノである。動物の名前は黒炎、ピンと立った三角の耳と狐の様に大きな尻尾を持つ艶やかな黒色の毛皮の四足の獣で、最も特徴的なルビーの様に紅く輝く瞳で楽しそうに川面に流れる様々な物を眺めている。

「けっこう涼しくなってきたね」

「うん、スカルトパシオンと比べると涼しいな。

でも僕達がぐずぐずしてた間に冬から春に変わったから、これから暖かくなってくるんじゃないかな」

「そうだね。悪い事ばっかりでもなかったのかな」

笑いながら話すダスク達は、大きな回り道をしてしまい、故郷の村を出てから3ヶ月以上もかかってやっと目的地へと近付いてきていた。豪雪地帯の故郷から雪を避けて冬に入る前に出発したが、紆余曲折の末、春に入る今になってしまったのである。

「明日には王都、いやアズレシルエンスって言った方が良いか。王都って言うと間違えてそうで怖いし。

アズレシルエンスに到着するみたいだから、考えていたよりも遅くなったけど良かったよ」
「そうだね。アズレシルエンスには美味しいもの一杯あるかな？」
「黒炎はそれればっかりだな。でも王都なんだから色々有るんじゃないかな」
「楽しみだな～。早く着かないかな」
「明日にならないと到着しないよ。今日は早めに食事を摂って、早く寝よう」
「りょ～かい。王様の用意してくれた船だから料理が美味しいのがいいよね」
「そうだな。それにも感謝したい気分だよ」
そんな会話をしながら船室へと戻るダスク達は、見送られる様に背中を傾いた陽に赤く照らされていた。

ボォォォォォ
船が港に到着する合図の法螺貝の音が響き、まだ寝ていたダスク達は慌てて船を降りる準備をする。王都の全貌を見たかったが、起きるのが遅くなったので少しでも離れている位置から見たかったダスク達は、急いで甲板に向かった。王都アズレシルエンスは平地に造られているので、既に現在地では全貌が窺えなくなっている。造りとしては、周囲を黒い石の城壁に囲まれ、建物は同じ色の石を使って造られたり、同じ石の土台の上にしっかりとした造りの木造の家が建てられている。街道から続く中央通りは東から西に、丁度王都を南北に分ける様に走り、南には今向かっている港が、北には白い石のみで造られた城が建てられている。スカルトパシオンの色彩溢れるモノとは真逆の、質実剛健な落ち着いた雰囲気を醸し出していた。
「アズレシルエンスって白黒だね。スカルトパシオンと比べると、なんか見た目が暗いな～」
「そうかもしれないけど、僕は帰ってきたな～って思うよ」

「そうだね。確かにこっちの方が懐かしい感じがする」
「やっぱり王都だからって、スカルトパシオンほど変わらないって事だ」
「うん。ボク達って王都だからって、スゴク変わるのがあたりまえだと思っちゃったからね」
「今思うと、田舎者丸出しで恥ずかしいな」
「しょうがないよ。だって田舎モノなのはホントなんだから」
苦笑いをするダスクを、楽しそうに尻尾を振りながら黒炎は見ていた。
ギィィィ
木の軋む様な音と共に港に接舷した船から、船客と荷降ろしの船員が降りていく。ダスク達の為に用意された船なので船客はそれ程多くなく、あっという間に下船が終わったので、顔見知りになっていた船員に挨拶をしてダスク達も下船をする。周囲はスカルトパシオンに勝るとも劣らない賑わいを見せていた。歩いている人の服装はダスクが普段から着ているモノとほとんど変わらないが、ダスク自身は完全装備をしているので物凄く目立っている。立ち止まっていると益々悪目立ちしてしまうので、肩に黒炎を載せて朝食を摂れる場所を探す為に、港と繋がっている市場の有る場所へと向かった。
ここは海が遠いせいか魚介類は川のモノが多く種類が少ない一方、肉や野菜の種類が豊富なのでそれらを利用した料理が多いようだった。座って食べる場所を用意してある屋台で、焼きたてのパンと肉と野菜のシチューを二人分買ったダスク達は、空いている席に座ってさっそく食べる。
「美味しいね。こっちはパンが固めだけど、それとシチューの相性が良くて本当に合ってるよ」
「うん。肉が柔らかくて野菜の甘みが良く出てる」
「あっちのピリ辛とか素材そのままの味を楽しむ料理もいいけど、ここの深みの有る味付けもいいね」
「その場所に合った味付けが、そこで食べるには一番美味しい味付

けなんだろうな」
小さな声で料理について話すダスク達は、ここの料理も美味しく食べられる事が分かって、この先長く生活するだろう王都が歓迎してくれている様に感じて嬉しくなる。お替りも綺麗に平らげ、機嫌も良くなり足取りも軽くなったので、その足でさっそく学院を探す事にした。
「ここも広いけど、どうやって探すんだい？」
「それが問題か。う～ん、城に行ってみようか？城の人なら何か知ってるんじゃないかな」
「そうしよっか。それでダメならまた考えようよ」
「うん。ここでも城は大きいから分かりやすくていいな」
建物の上に見えている城は、周りとは違う白一色なので見失う事もない。まずは中央通りに出る為に、再び肩に黒炎を載せると、混みあう路地を北の方へと歩き出す。どこの王都も同じ位人が居るらしく、スカルトパシオンで驚いたのと変わらない人の多さだった。しばらく歩くと中央通りと交わる場所に出る。通りの両側には、やはり多くの商店や、屋台等があり、それらを目的とした人々がたくさん行き交っている。通りには荷車や馬車が走り、物や人が多く集まる街道らしい光景を見せている。港から歩いて来た路地はそのまま城へと続いているらしく、真っ直ぐ進んだ先に城が大きく見えていた。ダスク達は中央通りを渡り、屋台や露店をのぞきながら進んでいるうちに、城のすぐ近くまで来ていた。この辺りはそれ程人通りが多くないので、黒炎を地面に降ろして城前の広場に入る。近くで見る城は周囲を水を満たした堀で囲まれており、今見ている南側にある正門だけが出入り口のようで、跳ね橋でこちらと繋がっている。大きな鉄の扉には金の飾り模様が全体に施されており、ダスクは視線を強く惹きつけらてしまう。動かなくなったダスクに、黒炎は脚を前足で叩いて催促し、ハッとしたダスクは首を振って気を逸らしつつ正門近くに居る衛兵へと近付いて行った。
「止まれっ！」

近付いてきた黒ずくめのダスク達に驚いた衛兵が、不審者に対する様に制止の声を上げる。驚かせてしまったと理解したダスクは、兜を脱いで少年らしい顔を見せて笑顔になる。十代半ばの少年で、危険そうには見えない相手に、衛兵は硬くなっていた表情をゆるめた。
「城に何か用事かい?残念だけど、突然来ても入れる訳にはいかないんだよ」
「あ、違うんです。ちょっと聞きたい事があって、ここに居る人なら分かるかなと」
「そうなのか。とりあえず言ってみな?知っていれば教えてあげるよ」
「ありがとうございます。
僕達、この街に有る学院を探して来たのですが、どこに有るか分かりませんか?」
「学院か・・・そこは何を専門にしてるんだい?」
「えっと、戦闘職を育てているって学院長さんが言ってました」
「学院長と知り合いなのはスゴイな。戦闘職・・・ああ、あそこか、オルフィエルド学院」
「オルフィエルド学院・・・お願いします、場所を教えてください」
「ああ、いいよ。ここから東、ほら、あそこに塔が見えるだろ?あそこがそうだよ」
衛兵の示す方向に視線を向けると、言った通りに塔が建っているのが見える。その近辺には他に高い建物や塔が無いようなので、道に迷う事は無いだろうと、ダスク達は安堵の息を吐く。
「ありがとうございます。すぐに行ってみます」
お辞儀をして走り出したダスク達は、あっという間に衛兵の視界から見えなくなってしまう。
「そういえば学院って、もう始まってる時期じゃなかったっけ」
その言葉は、ダスク達には届かずに、アズレシルエンスの空に消えていった。
道が混んで来たので黒炎を再び肩に載せたダスクは、人波をどう

にかすり抜けながらわずかに見える塔の先端を目指して走る。しばらく走っているうちに、次第に周囲から人の姿が減っていき、商店や露店の類も視界から消えていった。途中から降りて走っていた黒炎も疑問に思ったらしく、走りながらダスクの顔を見る。
「ねえ、人もそうだけど、店とかが全然無くなっちゃったよ」
「うん。僕もさっきからどうしたんだろうって思ってた」
周囲に見えてきた建物はどれも大きく、金属の柵で視線の遥か先まで囲まれている。どこまで続くのかと思いながら、塔を敷地に含む建物の入口を目指して走っていると、ようやく柵の途切れた場所へと辿り着いた。そこには立派な石造りの門があり、守衛と思われる人間が脇に立っており、門柱にはめられたプレートには確かにオルフィエルド学院と記されている。やっと目的の場所に来れたダスク達は、笑顔と尻尾で嬉しさを表しながら、籠手に包まれた拳と前足を触れ合わせる。
「やっと着いたな。本当に長かった」
「やったね。とうとう始まるんだな～」
「うん。始まる」
門の近くで話をするダスク達は、黒ずくめな事もあり、守衛の目には怪しい人間に見えるようで、いつの間にか人数が増えており、その中の一人が用心深く歩いて近付いてくる。ダスク達は、辿り着いた嬉しさで周りが見えておらず、すぐ近くに来ても気が付かなかった。
「おい、そこで何をしているんだ?」
「え?あ、すみません。嬉しくてつい・・・」
「は?」
「いえ、何でも無いです。・・・えっと、僕達この学院に用がありまして」
そう言いつつ走りながら被り直していた兜を再び脱いだダスクは、怪しい者ではないと弁解する様に笑みを顔に浮かべる。
「用?この学院に何の用事があるんだ?

入学には少し次期が遅いし、見たところ普通の家の子供の様だが・・・」

無害そうな顔のダスクに、安心したように他の守衛に戻っていいと身振りで示してから、ダスクの用事がどのようなモノか考えつつ、黒炎を連れたダスクを不思議そうに見る。

「そう、それです。入学する為に故郷の村から出てきたんです。お願いします、通して下さい」

「それは出来ない。毎年君の様な人間がたくさん来るけど、ここは貴族とかのお偉いさんとか軍関係の家の子女が通う学院だから、いきなり来たって簡単に入れる所じゃないんだ」

「えぇっ！そんな事言わずにお願いしますよ」

「駄目だ。お偉いさんの紹介とかが有るならまだしも・・・ほら、帰った帰った」

「「あっ！！」」

守衛のその言葉にハッとしたダスク達は、学院長からの紹介状の存在を思い出す。黒炎も思わず声を出してしまったが気が付かなかったか気のせいと思ったらしく、守衛はそのまま追い払うように手を動かしてくる。ダスクは慌てて背嚢を降ろして中身をあさるが、しばらく出していなかったので奥の方に入ってしまい、なかなか出てこなかった。ようやく取り出した時には、守衛は門の側の元の位置に戻ってしまっていた。紹介状を持って近付くダスクに、しつこいと思ったらしく、守衛はしかめた顔を向けてくる。

「しつこいぞ、駄目なモノは駄目なんだ。さっさと帰らないと力づくになるぞ」

「ちょっと待ってください。守衛さんの言葉で思い出したんです。これを見て下さい」

「ん？何だ？そんじょそこらの人間に紹介されてもな・・・」

そう言いながらダスクから紹介状を受け取った守衛は、表の『紹介状』の記載を見てから裏の紹介者の署名を確認する。守衛の顔は疑問から驚きへとすぐに変化していった。

「こ、これは!?ちょっと待ってろ。すぐに確認してくる」
慌てた様にもう一人の守衛に後を任せて学院内に走っていってしまう。任されたもう一人の守衛も突然の事に、驚いた様な顔で見送っていた。その様子を見て少し安心したダスク達は、門から見える場所で周囲の光景を眺める。オルフィエルド学院の道を挟んだ反対側は、どうやら違う学院もしくは施設の敷地のようで、少し離れた場所にここと同じ様な門が構えられており、守衛の人間が直立不動で立っているのが見えた。どうやらこの近辺は学院等の施設がまとまって建てられており、普通の商店や露店等が無かったのはそのせいらしかった。しばらく人の通らない路地をボケッと眺めていると、学院へと駆け込んで行った守衛が新たな人物と共に戻ってくる。その人物は、長い金髪を結って頭上にまとめ、ピシッとした服を着た大人の女性で、鋭い碧瞳は眼鏡ごしにダスク達の方をまるで睨む様に見ていた。
「紹介状を持ってきたのは貴方ですか?」
「は、はい。僕達、あの、ノースアタロスから来ました」
気圧された様に答えたダスクと、そのダスクの影に隠れて尻尾を力無く垂らした黒炎の様子にも、その女性の表情はピクリとも動かない。
「分かりました。私について来て下さい」
「あ、あの、あなたは・・・」
問いかけるダスクの声が聞こえていないかの様に踵を返した女性は、そのままズンズンと学院の中へと戻っていく。呆気にとられたダスク達であったが、見えなくなりそうになった背中に、慌ててその後を追いかける。建物の内部は、スカルトパシオンの城程ではないとはいえ、充分立派な造りで掃除も行き届いて綺麗なものであった。カツカツと音を立てて歩く案内の女性は、背もピンと伸ばされており、いかにも有能そうな雰囲気を醸し出している。その後ろを歩きながら、ふと視線をすれ違う部屋へと向けると、男女それぞれに揃えた服を着ているダスクと同じ年代の少年少女が、黒い板の前に居

る大人の話を真剣に聞いているのがガラス越しに見えた。何かを見ているダスクの様子に、そのままでは見えない黒炎は、何度も跳躍した後にダスクの肩へと駆け上る。突然の事であったが、ダスクは少しもグラつかずに歩き、黒炎は同じ光景を見ながら少し楽しそうに尻尾を振る。動物が窓の高さで廊下を進んで行く様子は、通り過ぎた部屋の人間の注意を随分惹いたようで、余所見をしていた少年少女が大人から怒られる光景が続出した。その場面は何も知らないダスク達には伝わる事も無く、視界から完全にダスク達の姿が消えるまでジッと見ていた人間が居た事にも気が付かなかった。

しばらく案内の女性について行った後、大きな両開きの扉の前で女性は立ち止まる。扉の両脇には銀色の全身鎧が飾られており、黙っている女性を含めての威圧感は凄いモノがあった。案内の女性は扉をノックして中の人物に声を掛ける。

「お連れしました。入っても宜しいでしょうか？」

「どうぞ」

室内からの了承の声は、確かに聞き覚えのある声だとダスク達は思い、数年ぶりの再会に軽く緊張感が湧いてくる。開かれた扉から案内の女性に続いて室内へと入ったダスク達の視線の先には、大きな机を挟んで窓を背にするように立派な椅子に座っている人物の姿があった。ダスク達の位置からは逆光で顔は判別できないが、小さい頃に見た学院長と変わらない背格好と雰囲気を感じた。

「案内ご苦労だったね」

「いえ、仕事ですから」

学院長から苦笑した気配が伝わってくる。案内の女性が部屋の壁際にある机に移動して自分の仕事を始めると、学院長は立ち上がり机をまわってダスク達の目の前へと歩いてくる。その顔は少し年齢を重ねていたが、確かにあの時の学院長その人であった。学院長はダスクの肩に手を置くと、以前と変わらぬ笑顔でダスク達を見る。

「よく来たね。随分と立派になったな」

「ありがとうございます。でも、まだまだですよ」

その言葉に頷いた学院長は、まだ黙ったままの黒炎の顔を見る。その視線に、黒炎は案内をしてくれた女性へと顔を向ける。その仕草に何が言いたいかが分かったらしく、学院長は同じ様に女性へと視線を向けた。

「あ～、セシリアくん？今からここで起きる事は他言無用でよろしく」

「畏まりました。他に何かありますか？」

「いや、無いよ。ありがとう」

その言葉に一礼したセシリアと呼ばれた女性は、再び視線を手元に落として自分の仕事へ戻る。

「これで大丈夫。ようやく君の声が聞けるな」

「その前に、学院長、あのヒトは何者なのですか？」

「ああ、私の秘書みたいな事をしてもらってる」

「なるほど。話の腰を折ってすみません」

「いやいや、気になるのもしょうがないさ」

「そろそろいいかい？」

黒炎の子供の様に高い声に、セシリアは一瞬ピクリと反応するが、すぐに何事も無かった様に戻ったので、その変化には誰も気が付かなかった。

痺れを切らした様に声を掛けてきた黒炎に、笑みを浮かべた学院長は嬉しそうにその顔を見ながら何度も頷く。

「うむうむ、ようやく君の声を聞く事が出来たね。待った甲斐があるというものだ」

「ボクの声が聞けるとそんなに嬉しいもんかな～。それにしても、学院長のおっちゃん老けたね」

「こらっ、黒炎、思っていてもそういう事は言っちゃ駄目だろ」

「はっはっは、君達は似た者同士だな。同じ事を考えていたらしい」

「あはは、当然だよ。ボク達いつも一緒にいるからね」

「あ、すみません、つい。でも、相変わらずお元気そうですね」

「ああ、あの時は危なかったが、まだまだ若い奴には負けんよ」

「若い奴とか言ってるから年寄りあつかいされるんじゃないのかな」
「はっはっは、痛い所を突かれたな。こりゃ、参った」
闊達そうな笑みを浮かべる学院長と一緒に笑い合うダスク達は、久しぶりに会うにも関わらず、変わらぬ親しさを感じているようで、周囲に誰かが居たとしても久しぶりに会ったようには見えなかっただろう。
「そういえば、君達がここに来る時期が少し遅かったけど、何かあったのかい？」
「あ、ええと・・・」
「ここに来るまでにイロイロあったんだ。ちょっと回り道になっちゃって、遅くなったんだよ」
ダスクが口籠もっている内に、黒炎がとても簡単に説明を終える。
本当に色々な事があったが、それを少しも感じさせない気軽な口調であった。
「そうか、まあ気が向いたら追々話を聞かせてくれ。
それよりも、ダスク君はこの学院で学びたくて来たという事でいいかね？」
「はい、もちろんです。
あれから自分なりに鍛えてきたので、更に上を目指す為にここで色々な事を学びたいです」
「よかろう。君の入学を認めよう。日々精進して己を高めていってくれる事を望む」
「はい、ありがとうございます。誰かを護れる強さを、きっと身に付けます」
「よかったね。ボクも協力するから、一緒にがんばろう」
頷きつつ笑みを浮かべてダスク達を見ていた学院長であったが、表情を真面目なモノに変えて悩むような仕草をした後に、セシリアの方を見る。
「セシリアくん、もう新学期は始まっていたね？」
「はい。ちょうど一週間が過ぎていますね」

「この場合はどうしたらいいかね？」
「丁度良いので、一週間分の補習を明日明後日の週末の休みにまとめて行うのが宜しいかと」
「なるほど、実技はひとまずやらなくても大丈夫そうだからな。君達はそれでもいいかい？」
「はい。僕達の為にわざわざすみません。よろしくお願いします」
「ところで、ボクはダスクが補習っていうのを受けている時になにをしていればいいのかな？」
「セシリアくん、授業中に教室に居るのは駄目かい？」
「もちろん許可出来ません」
「むぅ、それならここに来て私と話でもしてればいいか。黒炎君、それとセシリアくんも良いかな？」
「私は構いません」
「いいよ～。ボクも勉強してるよりはその方がいいや」
「ありがとうございます。なんか悪いな黒炎、待たせちゃう事になるから」
「いいって。ボクは相棒として、キミに協力する為に来たんだから」
「ありがとな、相棒。頼りにしてるよ」
その様子を微笑ましそうに見ていた学院長は、また何かを思い出した様に悩んだ顔になってセシリアの顔を見る。
「そういえば、この学院の学生寮はペット禁止だったと思うのだが？」
「はい。その通りでございます」
「特例として認める事は・・・出来そうもないね」
「御理解感謝致します」
「さて、どうするか・・・」
学院長の考える様子に、一緒に暮らすのが当たり前なダスク達は不安そうな顔になってくる。駄目なら共に暮らせる場所を探しに行こうと、顔を見合わせて目で意思の疎通をしていた。長く考えている学院長の様子を見て、ダスクが自分達で住む場所を探しに行くと言

おうとしたところで、表情を明るくした学院長がセシリアの顔を見る。
「あそこはどうだろう？ちょっとばかしボロいが住めない事は無いと思うが」
「あそこですか・・・近々解体しようと考えていた場所ですね。確かにこの子達が卒業するまでなら大丈夫だとは思います」
「そうか、だったらあそこを丸ごと使って貰う事にしよう」
その言葉にダスク達は嬉しそうな顔や尻尾の振りになり、感謝の顔を学院長へと向ける。それに学院長もまた、嬉しそうな顔で応えて頷く。
「あそこを使うのは君達で最後だから好きに使ってもらって構わんよ。
自分達の住み易い場所に変えてしまって良い」
「色々お世話になってしまって、ありがとうございます。明日からの勉強を更に頑張ります」
「ありがと～、学院長のおっちゃん。ダスクと一緒に住めるから安心したよ」
「はっはっは、気にするな。命を救ってもらった事に比べれば大したこと無いさ。
セシリアくん、ダスク君達を案内してやってくれ。ついでに明日からの説明等よろしく」
「畏まりました。それでは君達は私についてきて下さい」
「はい。よろしくお願いします」
「おっけ～。よろしく、セシリア」
黒炎の言葉に再びピクリとしたセシリアは、固まってしまったかのように動かなくなるが、ダスク達の怪訝そうな表情に気付いて何事も無かったかのように先導するように扉へと動き出す。不思議そうに顔を見合わせていたダスクと黒炎だったが、扉を開いて待っているセシリアに、慌てて駆け寄っていった。
パタン

閉まった扉の方へとヤレヤレといった風情で視線を向けていた学院長は、誰に聞かせるともなしにポツリと呟く。

「セシリアくんも体面を保つ事に拘ってるからな。彼等の前なら気にする事も無いんだが・・・」

その言葉を最後にダスク達から意識を逸らした学院長は、自分の立派な机に座って積まれた書類へと視線を向け溜息を一つ吐くと、一番上のモノを手に取って内容を検(あらた)め始めた。

学院長室を出たダスク達は、セシリアの案内で入口とは逆の方向へと向かっていた。窓の外に見える建物の壁は陰になっており、どうやら建物の北側へと進んでいるようである。しばらく歩くと、窓の外には学院の敷地の周りを囲む塀の鉄柵が見えてくる。塀は王都の城壁まで繋がっており、この学院が王都の東端に位置しているのが分かった。突き当たりにあった扉を抜けると、寂れた雰囲気の場所に出る。こちらの方へはあまり人が来ないらしく、雑草が伸びて行く手を阻んでいるかのように感じる。セシリアは気にする事もなく足を踏み出しズンズンと進んで行く。ダスク達は遅れないように足を速めてその後を追いかけて行った。建物の角を曲がった所で視線の先に一つの建物が見えてくる。今まで居た校舎は石と木材をふんだんに使った頑丈そうな造りをしていたが、その建物は土台に少し石を使っている以外は木造の、築数十年と思われるボロボロの外観をしている。迷わずそこへと向かったセシリアは、入口の扉を古く太い金属製の鍵で開錠すると、その鍵をダスクへと差し出した。無言のままのセシリアからダスクが鍵を受け取ると、何も言わずに扉を開いて中へと入っていく。それに続いてダスク達はこれから自分達が住む場所になる建物へと入っていった。建物の中は閉められた古いカーテンで薄暗く、ダスク達が入った事により舞い上がった床に積もっていた埃によって益々見通しが悪くなってくる。セシリアは口にハンカチを当てており、黒炎は埃が足に付くのを嫌そうにソロソロと歩いていた。少し室内を見回して現状を確認していたセシリアは、一つ頷くとダスク達の方へと向き直る。

「以前に確認した状態と変わりありませんね。ここがこれから貴方達が暮らす場所です。
見ての通り、しばらく使用されていなかったので掃除や修繕が必要かと思います。
必要な物があれば私に言って貰えれば可能な限り用意します」
「ありがとうございます。とりあえず掃除用具と工具と補修材をお願いします」
「分かりました、手配しておきます。
それで明日からの事ですが、学院の始まりは学院中央塔の鐘が鳴るので分かると思います。
本鈴の前に予鈴が鳴りますので、予鈴が鳴ったら本鈴までに教室に入っていて下さい。
通常は各教室に入っておくのですが、明日からの補習に関してはまず学院長室に来て下さい。
そこから補習に使う教室へと案内します」
「へ～、あそこには鐘があるんだね。見に行ってもいいのかな？」
「あそこは立ち入り禁止です」
「そっか、残念だな～。見てみたかったけどしょうがないか」
残念そうにしている黒炎の様子に、少し考えていたセシリアは微かに笑みを浮かべて黒炎の顔を見る。
「明日ダスクくんが補習中に案内してあげます。特別ですから他言無用にお願いします」
「やった、ありがと、セシリア」
その言葉に優しそうな表情になったセシリアは黒炎の頭を撫でる。
気持ち良さそうにしている黒炎を嬉しそうに見ていたが、ダスクの意外そうな顔に気付いて慌てて先程までのキリッとした表情に戻った。
「コホン、基本的に学院では制服を着用してもらいます。
先程の物と一緒に手配しますので校舎に来る時には忘れないように」

「分かりました。ところで勉強する時に必要な物は何かありますか？」
「筆記用具を含めて明日用意しておきますので、貴方はそれらを入れる鞄だけ持参して下さい」
「はい、ありがとうございます。ところで食事とかはどうすればいいですか？」
「貴方は自分で料理をやりますか？」
「材料さえあれば簡単な物なら出来ますよ」
「そうですか・・・ちょっと待ってて下さい」
そう言ってセシリアは奥へと入って行き、少しして戻ってくると安心した様に頷く。
「冷蔵庫の冷気の魔法はまだ大丈夫だったから、そこに食材を入れておけばいいです。
入口の守衛には伝えておきますので、買い物に行く時には自由に出入り出来るようにしておきます」
「消耗品とかを買っておきたいと思っていたので助かります」
「これくらいでしょうか。また何か有れば私に言って下さい」
その言葉に少し考えたダスクは、笑顔になってセシリアの顔を見る。
「セシリアさん、黒炎の事を気に入ってくれたなら気にせず相手してやって下さい。
僕もその方が嬉しいです。家族に優しくしてくれるのは大歓迎ですから」
「あれはっ・・・ふぅ、言い訳してもしょうがないですね。
私ってかなり動物が好きなの。他に見ている人が居ない時は遠慮しない事にするわ。
でも、この事は誰にも内緒よ、お願いね」
「はい、言いふらす様な事じゃないですから。これからよろしくお願いします、セシリアさん」
「よろしく～。これから仲良くしてくれると嬉しいよ、セシリア」
「ええ、よろしくね。それじゃあ手配とかがあるから行くわね」

「はい、ありがとうございました」
「またね～」
最後に微笑んでから顔を引き締めたセシリアを、ダスク達は扉の外まで出て見送る。毅然としたその背中は、先程までの優しげな彼女とは全く別の人間に見えた。その姿が見えなくなるまで見送った後、ダスク達は顔を見合わせる。
「いつも笑ってればいいのに、もったいないな～」
「学院長みたいな偉い人の下で働いてるからシッカリしてないと駄目なんだと思う」
「タイヘンなんだな～、セシリアって」
「そうだな。あんまり迷惑かけないようにしないと」
「ボクはいつも通りにしてればいいや」
「あはは、黒炎らしいな」
楽しそうに尻尾を振る黒炎を、ダスクは苦笑いしながら見ていたが、今日中にやる事が山積みなので、表情を引き締めて自らの頬をパチリと叩く。
「さて、やる事が多いからサクサク動かないとな」
「そうだね。このままじゃ寝る場所もないよ」
その言葉に頷いたダスクは、動き易くする為に鎧等の装備を全て外して入口の扉が閉まってしまわない様に置く。荷物からボロくなった手拭いを出していると、セシリアの手配で用務員の男性が荷物を持ってきてくれる。荷物の説明を受けてお礼を言ったダスクが男性を見送っていると、いつの間にか姿の見えなくなっていた黒炎が戻ってきた。
「どこ行ってたんだ？」
「まわりを一周してきた。裏に井戸があったよ。けっこういいウチだね、ここって」
「井戸があるのか。建物は古いけど良い所だな。学院長には感謝しないと」
「学院長のおっちゃんもなかなかやるね」

そう言って建物を見上げたダスク達の視線の先には、一人と一匹が住むには大きい二階建ての家があり、立派な石造りの煙突から分かるしっかりとした暖炉と、冷蔵庫付きの台所の設備も期待出来るので、裏の井戸の事も考えればやりようによっては快適な生活が出来そうである。ダスクは一つ頷くと袖を捲くり、手拭いで鼻と口を覆って後ろで縛る。

「上の部屋から窓を開けて埃を掃き出すから、黒炎は外に居てくれ」

「わかった、がんばって」

その言葉に頷いたダスクは、家の中へと入って行った。少しすると、二階の部屋の窓が開かれモウモウとした埃がそこから溢れ出てくるが、すぐに収まってしまう。何が起きたのかと思っていた黒炎の前に、ダスクが家具を担いで出てくる。

「先に出せる家具は出しちゃわないと駄目だ」

「そっか、そりゃそうだね」

それからは、それが一人でやった事かと信じられないくらいの速さで家具が外へと運び出されていった。重ねず広げて置いた家具を前に、ダスクはハタキを黒炎の前に置く。

「出来るだけでいいから、家具の埃をはたいておいて」

「了解。あんまり期待しないでくれると嬉しいけどね」

「分かってるよ。それじゃ頼んだ」

そう言ったダスクは再び箒ともう一つのハタキを持って家の中へと入っていく。少しすると、再び二階の窓から埃が溢れ出し始める。それを見てからハタキを口にくわえた黒炎は、のんびりとした動作で家具の埃を払い始めた。

埃を掃き出し終えたダスクは、空気の入れ替えの為に全ての窓と扉を開けたままにして、井戸から汲んできた水で一番奥の二階の床からブラシをかけ始め、しばらく経った今では一階の一番出口に近い床をブラシで擦っていた。部屋を往復している途中に出入り口の近くで一息吐いていたダスクは、何かを言いたげな様子で近寄ってきた黒炎の顔へ視線を向ける。

「むぐもぐむぐぅ」
「何言ってるか分からないよ、黒炎」
「ぷはっ、お腹空いたねって言ったんだよ」
口からハタキを落とした黒炎は、尻尾を力なく垂らしてダスクの顔を見る。その様子を苦笑しながら見たダスクは、自分の腹の辺りを押さえて頷く。
「確かに朝食を食べてから時間経ってるからな。さてどうしよう」
「床が乾くまで時間かかりそうだから食べに行ってもいいんじゃないかな」
「戸締りしなくてもいいのかな？盗っていくような物は無さそうだけど」
どうしようか悩むダスクを見て、気にせず行こうと促す黒炎であったが、すぐに何かに気が付いたように鼻をピクリと動かして校舎の方へと顔を向ける。それに気が付いたダスクは、同じ方向へと視線を向けると、その先から掃除の前に別れた人物が戻ってくるのが見えた。
「掃除は・・・順調のようですね」
そう言いながら、短時間でほとんどの家具を外に出して掃除をしているダスクを、少し呆れた様に見る。
「はい。おおまかな所はだいたい出来ました。
後は細かい所とか仕上げをして、それから修繕する場所を順次やっていく感じです。
ところで、セシリアさんは何か言い忘れた事でも？」
「いいえ。貴方達は掃除に集中してると思いましたし、ここからだと買いに行くのは時間がかかりますから、勝手ではありますがコレを用意させて頂きました」
セシリアが少し持ち上げた包みに、黒炎は敏感に反応して尻尾を嬉しそうに振り、ダスクは何だろうと包みをジッと見る。ダスク達のそれぞれの反応に、微かに笑みを浮かべたセシリアは、包みをダスクの前に差し出す。

「昼食です。簡単な物ですが、作ってきましたので食べて下さい」
「ありがとうございます。丁度どうしようかって、黒炎と話していたところなんです」
「ありがと～、セシリア。お腹空いてたから嬉しいよ」
ダスクの出した手の上に昼食の包みを置いたセシリアは、黒炎の傍らにしゃがんで撫でながらその艶やかな毛の感触を楽しんでいるのが、表情ではなく彼女の丁寧な手付きから分かった。
「助かりました。濡れた床を乾かしたり、空気の入れ替えをまだ続けたかったので。
この場所が戸締りをしないでも大丈夫か分からなかったので動くに動けませんでした」
「はふぅ、撫で方にも人柄が出るのかな～。
掃除が終わるまで動けなかっただろうから、セシリアのおかげで飢えなくて済んだよ」
目を細めてセシリアのなすがままになっている黒炎は、傍から見ても気持ち良さそうに見えた。
「今回だけです。私は料理が得意な方ではありませんから、あまり期待しないで下さいね」
気が済むまで撫でれたのだろう、来た時よりも機嫌が良さそうな雰囲気で立ち上がったセシリアは、その言葉を残して再び校舎へと戻っていった。見えなくなるまで見送っていたダスク達は、運び出した家具の中でテーブルとイスを濡らした手拭いで綺麗に拭いてから、さっそくセシリアが持ってきてくれた昼食の包みを開く。中からは二人分以上の量の、焼いたパンに焼いた鶏肉や玉子焼きや生野菜をはさんだサンドパンが出てきた。シンプルだが美味しそうな昼食に、ダスク達は感謝の気持ちが更に湧いてくる。心の中で感謝を伝えながら、ダスクは飲み水用に改めて井戸から水を汲んできて自分と黒炎の分を分けて置く。
「早く食べようよ。早く、早くっ」
「そんなに焦らなくても、食事は逃げないって」

「食事は逃げなくても、味は逃げていっちゃうんだよ」
説得力の有る様な黒炎の言葉に続ける言葉を無くしたダスクは、苦笑しながら黒炎用の皿にサンドパンを分けて目の前に置いてやる。待ちきれなかったようにすぐに食べ始めた黒炎の様子に、もう少し味わって食べた方がいいんじゃないかと思ったが、食事は本人が美味しいと思えるのが一番だと、気にせず自分の食事をする事に決めたダスクは、ゆっくりと味わって食べ始める。セシリアは料理が苦手みたいに言っていたが、シンプルな味付けで充分美味しいと言える出来栄えであった。
「美味しかった。意外だけど、なかなかやるね、セシリア」
「作ってくれた人に対してそんな風に言っちゃ駄目だろ」
「ん？ほめてるんだよ。ホントの事だからいいじゃん」
「む、まあそうだけど。言い方というか・・・まあいいや」
「ふふん、でしょ？お腹もふくれたし、暗くなる前に出来る事はやっちゃおうよ」
「そうだな。セシリアさんの御厚意に報いる為にもサクサクやろうか」
手早く食事の片付けを終わらせたダスクは、黒炎が埃を払った家具を濡れた手拭いで拭き始める。黒炎には家の中を歩き回ってもらい、修繕の必要な場所を見付けておくように頼んであった。何度か井戸と往復し、桶の水を換えながら家具拭きを終えた頃、家の中を見回っていた黒炎も戻ってくると、ダスクの作業が終わっているのを確認して側に来る。
「こっちも終わったみたいだね。キミに言われてたコトだけど、最優先はやっぱり火を使う所だね。
その次は屋根かな。ところどころ光の漏れている場所があったよ」
「そっか、ありがと。今言った場所から直していくよ。黒炎は引き続き見回っててくれ」
「りょ～かい。いちおう言っておくよ。屋根の修理は気を付けてね。キミならダイジョブだろうけど」

「うん。二階建てだから落ちたらちょっと危ないからな。気を付けるよ」

そう言ってとりあえずの修繕用具を持ったダスクは、自分でも確認してみようと黒炎と入れ違いで家へと入る。火を使う暖炉や竈(かまど)を見て回り、必要な物を外に取りに戻ってから作業を開始した。見て分かるような所は岩と粘土で直し、木槌で軽く叩いて補強が必要だと分かった場所は隙間に粘土を入れていく。乾かして火を使えば硬くなり、しばらくは騙し騙し使っていけるようになる。とりあえずの修繕が終わったダスクは、ロープの端に必要な物を括り付け、反対の端を腰に結ぶと、外壁の凹凸(おうとつ)を利用してまるで猿の様にスルスルと屋根の上まで登って行き、あっさりと屋根の上に出ると、ロープを手繰り寄せてから屋根の修繕を始める。黒炎の指摘していた場所は、上から見ても分かる位に破損していたので、迷う事無く駄目になっていた所を交換する事が出来た。他にも気になった所を修繕したダスクは、荷物を下ろしてからまるで飛び降りるかのような速さで地上に降りる。そこには待っていたかのように黒炎が座っていた。

「他に直した方がいいのは床かな～、あちこち音が気になる場所があったから歩いてみてよ。

特に気になったのは二階だね」

「了解。床の修繕が終わったら、窓とか壁を拭いたりして、家具を入れ直したら終了かな。

家全部の修繕と掃除はさすがにくたびれた」

「もうちょっとだから、ファイト～！！

終わったら少し休んで買い物行こうよ。目的地に着いたお祝いに美味しい物でも食べよう」

「ははは、そうしよう。早く終わるように頑張るよ」

そこから宣言した通りに作業を終わらす頃には辺りは暗くなり、校舎や今日からの我が家は夕陽に照らされて赤く染まっている。今日の作業はこれくらいで、最後に防水作用のある塗料や防火作用のある塗料を塗って最終的な作業の完了とするつもりであった。井戸の

水と手拭いで汗を拭ってから着替えたダスクは、戸締りを確認してから外に出て玄関に施錠すると、待っていた黒炎と共に学院の外へと向かう。来る時に通ってきた校舎内への扉は、時間が遅いので施錠がされており、とりあえず外側を通って行く事にした。今後も遅い時間帯に学院を出入りする必要が出てくると思うので道を覚えたい事もあり、学院を囲む柵を辿って門を目指す。広い学院の敷地を少なくない時間をかけて歩き、門が見えてきた時にはダスク達は道を間違えていなかった事にホッと安心し、小走りに門へと近寄っていった。

「すみません、外に出たいのですが良いですか？」

門の側に居た守衛の一人に声を掛けると、分かっているという風にダスクへと頷いてくれる。

「話は聞いているよ。黒髪の学生と黒い犬（？）の連れが来たら自由に出入りさせるようにと」

「ありがとうございます。これから買い物に行くのですが、いつまでに戻ってくればいいですか？」

「基本的には夜には門を閉める事になる。とりあえず一刻半以内に戻ってきてくれ」

「わかりました。出来るだけ早めに帰ってくるようにします」

守衛に一礼をしたダスクと、尻尾を大きく振る黒炎は、門から出て昼間とは逆の方向へと足を進める。今度は戻ってこないと駄目なので、道を覚えながらゆっくりと商店のある中央通りへと向かった。抜け道等は今度探す事にしたダスク達は、広く分かりやすい道を選びながら歩いていると、次第に人の姿を見るようになり、大通りが近い事が分かったので肩に黒炎を載せる。

「最初に食事にした方がいいかな。荷物を持ったままだと邪魔になりそうだし」

「そうしようよ。お腹も空いてるし、その後にゆっくり買い物しよう」

方針を決めたダスク達は、美味しそうな料理を出している店を探し

て歩き回る。その途中で買い物に使えそうな店をいくつか見付けながら進んでいると、向かっている方向から良い匂いが漂ってくるのに気付いた黒炎が指し示してくる。それに頷いたダスクが匂いの元へと向かうと、そこは様々な腸詰を使った料理を出している店であった。尻尾を振って嬉しそうにしている黒炎を入口で降ろし、店に入ったダスクはカウンターの店主が黒炎の方を見て渋い顔をしているのを内心複雑に思いながら近寄る。

「すみません、食事をしたいのですが良いですか？」

「困るよお客さん。飲食店に動物を連れてきちゃ」

「駄目ですか？おとなしく食事をしますので、お願いします」

「すまないが、勘弁してくれ。衛生面で国から注意されているんだ」

「そうですか。それじゃあ持ち帰れる料理とかってありますか？」

「料理は無いが、腸詰はどれも持ち帰り出来るよ」

その言葉に、残念そうな様子で尻尾を垂らしていた黒炎は、嬉しそうにダスクの顔を見る。それに頷いたダスクは、様々な種類の腸詰を多めに購入する。

「ありがとさん。すこしサービスしといたからな」

「ありがとうございます」

店を出て再び肩に黒炎を載せると、近くの八百屋で野菜を、パン屋でパンを買って夕飯と明日の朝食の分にする。それからは、来る時に見た店で調味料等の消耗品を補充していき、ほぼ揃ったところで人通りの少ない道へと入る。

「これくらいで充分かな。他に何かあったっけ、黒炎？」

「そういえば、薪はどうするの？」

「多少は古い薪が置きっぱなしになってたし、今日の修理で端材が結構出たからしばらくは大丈夫」

「そっか、薪って買うのかな、それとも取りに行くのかな？」

「どうなんだろう。今度セシリアさんに聞いてみよう」

「あとは、そうだ、布団とかはダメになってなかった？」

「あ、そうだった。大物だから最後で丁度良かったよ」

そう言ったダスクは、近くの店等で布団屋の場所を聞いて向かい、自分の分と黒炎の寝床に使う分を購入する。肩に黒炎を載せて、布団等の大荷物を持つダスクは、鎧も装備していないので、力持ちには見えない外見から、すれ違う人間のほとんどが驚いていた。買い物を終えたダスク達は、守衛に言われた時間よりも随分早く帰る事になったので、ゆっくりと周囲を見ながら帰る。少しずつ何が有るかを確認しながら通りを歩き、そこから外れて学院への道へと向かう。黒炎を降ろして歩いていると、暗いので少し不安はあったが、無事に見覚えのある場所へと出た。空腹もあって足早になったダスク達は、あっという間に学院の門へと戻ってくる。

「おかえり、早かったな」

「ただいまです。こっちで食事しようと思って、食材だけ買ってきました」

「なるほどな」

門を通してもらったダスク達は、柵沿いの遠回りになる道を通って家に向かう。途中で自分を見ている黒炎に気が付いたダスクは、普段通りの口調で黒炎の聞きたいと思っていそうな答えを返す。

「どうしてそうなったかなんて言う必要はないだろ?言った事も本当の事だし」

「そりゃそうだね」

そう言って前に出て先を進む黒炎の尻尾は、どことなく機嫌が良くなった風に見えていた。そのまま歩いて家に着いたダスク達は、今日から自分達の帰る家になる建物を感慨深げに見上げる。

「どれだけ居るか分からないけど、今日からよろしく~」

「今日からしばらくの間、我が家になるんだよな。とりあえずよろしく頼むよ」

それぞれ声を掛けると鍵を開けて家に入る。買ってきた荷物をそれぞれの置く場所に運んだダスクは、戻ってきて暖炉に火を入れると、台所で夕食の準備を始めた。腸詰と野菜のスープと焼いた腸詰にパンを添えた食事を用意したダスクは、暖炉の前で横になっていた黒

炎の隣で床に直に座って料理を並べる。視線を合わせたダスク達はお互いに機嫌が良さそうに頷き合う。
「今日はこうやって食べたくなったんだ。これからもよろしくな」
「こっちこそよろしく～。こういうのもいいね、一緒に食べてるって気になるよ」
「それじゃあ、いただきます」
「いただきま～す」
熱々のスープや、焼いた腸詰と一緒に食べるパンは美味しく、作ったダスクは笑顔になり、黒炎は嬉しそうに尻尾を振っている。いつもより多めに作った料理は、あっという間にダスク達の胃の中に消えていった。井戸の水で淹れたお茶で余韻を流し込み、すっかり満足そうな顔や尻尾の動きになると、今日の疲れが出て一気に眠くなり欠伸が何度も出てくる。
「明日も早いから、さっさと寝ようか」
「ふにゃ、そうだね、もう眠い」
眠そうな黒炎を残して食事の片付けをして歯を磨いてきたダスクは、ランプに火を灯し、暖炉の火を消して既に寝ている黒炎を抱えると、二階の寝室へと向かう。床に寝床を作って黒炎を寝かすと、自分も買ってきたばかりの布団に入り込む。初めての場所でのこれからの生活に期待を膨らませつつ、すぐにやってきた眠気に身をまかせていった。

次の日から補習をみっちりと受け、初めての事の連続に戸惑いつつも次第に慣れていったダスクは、住む家も少しずつ住みやすい環境に整えていく。天候も良かったので、塗装も終わらせる事が出来、家の見栄えも随分と良くなった。黒炎はセシリアと塔の見物に行ったりして、結構仲良くなったらしく、食事や家に居る時に話題に出すようになり、ダスクは自分以外に黒炎が言葉を話せる事を知っても仲良くしてくれる人間が出来た事に安心していた。補習の二日間が終わり、本格的な学院生活の始まりに珍しく緊張するダスクと、

いつもと変わり無く自然体の黒炎に、明日からの学院での生活は何をもたらすのだろうか。

学院生活は始まりますか？（後書き）

楽しんで頂けたでしょうか。続きも早く読んで貰えるように頑張ります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3682y/

それは黒くて重かった

2012年1月9日03時46分発行